

第四章 教員の研究活動状況（2004～2006年度）

[文献文化学専攻]

木田章義（国語学国文学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「両足院本「毛詩抄」とその背景」、『林宗二・林宗和自筆毛詩抄』、臨川書店、2005年1月、pp. 701-736
2. 「訓読と翻訳—日本書紀の古訓—」、『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』、汲古書院、2005年5月、pp. 23-45
3. 「日本漢文訓読史」、『東亜伝世漢籍文献訳解方法初探』、台北、国立台湾大学出版中心、2005年6月、pp. 285-305
4. 「文字の力」、『和漢語文研究』4、京都府立大学、2006年11月、pp. 29-47
5. 「散文の歴史」、『グローバル化時代の人文学(上)』、2007年3月、pp. 338-361

【学術講演・発表】

1. 「古代日本語の再構成」、東方学会関西西部会、2004年5月
2. 「訓読と翻訳」、国際学術会議「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」、北海道大学、2004年9月1日～4日
3. 「日本語版 WINDOWS 上のアルタイ語系言語のワープロの作成について」（マリア・アプリーズ氏と共同発表）、First International Symposium on Information and Language Processing、京都大学、2005年2月21日～23日
4. 「日本語とアジア諸言語」、韓国日本学連合会・第三回国際学術大会「東アジア文化共同体の可能性」、南ソウル大学、2005年7月7日～10日

II. 自己評価

全体として、論文の数が多くないが、それぞれ時間の掛かる資料を対象としているので、無理のないところである。両足院本「毛詩抄」については従来の研究の継承であるが、その他の論文については、新しい視点で、だいたんな説を展開しており、これから学界でどのように評価されるのか楽しみなどところである。

講演については、これまでの研究の内容を概略述べているので、新味は少ない。ただ、「日本語とアジア諸語」は、日本国内で発表・講演を行うことのなかった日本語の起源、並びにアルタイ類型言語の特徴を述べたもので、注目すべき講演であった。このような研究が日本国内ではほとんど発表することができない現状は、日本語の起源論に対する学界の消極的な姿勢を示しているが、これからは出来る限りこの方面の論文を書きたいと思っている。

「日本語版 WINDOWS 上のアルタイ語系言語のワープロの作成」という発表は、これまでウイグル語の入力ソフトが無かったのを、新しく作り上げた経過を発表したものである。現在もこのソフトを用いて、資料の集積が進んでいるが、この成果が表にでるのは、10年後であろう。

大谷雅夫（国語学国文学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『漢詩文集』（新日本古典文学大系・明治編）（共著）、岩波書店、2004年3月
2. 『京都大学蔵実隆自筆和漢聯句譯注』（共著）、臨川書店、2006年2月
3. 『文明十四年三月二十六日漢和聯句譯注』（共著）、勉誠出版、2007年3月

【論文】

1. 「国文学と中国文学—鏡について—」、『文学と言語に見る異文化意識』、京都大学文学研究科、2004年2月
2. 「昔の人の袖の香ぞする」、『文学』第5巻第5号、2004年9月
3. 「形見の鏡」、『説話論集』14、清文堂出版、2004年10月
4. 「夢—歌語と詩語—」、『文学』第6巻第5号、2005年9月
5. 「日中比較文学的可能性」、『中国文学研究の新趣向』、台湾大学出版中心、2005年9月
6. 「講演「伊藤仁斎の詩歌と「学問」」、天理図書館報『ビブリア』第124号、2005年10月
7. 「歌と詩のあいだ」、『言語と文字』（『列島の日本史』第6巻、岩波書店、2006年3月
8. 「青頭巾の問い—江月照松風吹、永夜清宵何所為—」、『国語国文』、2006年9月
9. 「はじめての読者のために—和漢聯句ひろいよみ—」、『アジア遊学』、勉誠出版、2007年2月

【研究発表】

1. 「『蜻蛉日記』と漢文学」、和漢比較文学学会大会、2006年9月

II. 自己評価

この三年間の業績のすべては、国文学における中国文学の受容と変容の様相を分析するものである。古代においては、鏡や夢に関わる歌の発想、表現に漢詩文の影響がどのように及んだかを考え、それを手がかりとして、和漢の人の心にどのような相違点が見られるかを考察した。「歌と詩のあいだ」は、具体的な問題を取りあげながら、総論の意味をも持たせた論文である。中古では『蜻蛉日記』における漢詩文受容を見出すことによって、その本文校訂に新見を提出し、「昔の人の袖の香ぞする」は、世に知られた名歌の再解釈を試みた。さらに、COE 研究会における和漢聯句の輪読の成果として訳注を二冊完成させ、和漢聯句の概説をも世に問うたのは中世文学における業績である。近世においては、上田秋成『雨月物語』「青頭巾」のキーワードとなる禅句の解釈を試み、近代では成島柳北の詩の訳注とその解説を書いた。それぞれの業績は対象となった作品こそ、時代・ジャンルともにそれぞれに相異なるが、「国文学と中国文学」という主題では一貫しており、その主題に基づく一連の文学史研究としての意味をもつものと考えている。

大槻 信（国語学国文学専修助教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『京都大学蔵実隆自筆 和漢聯句譯注』（共著）、京都大学国文学研究室・中国文学研究室編、臨川書店、2006年2月、pp. 133-157

【論文】

1. 「書物と目録 一京都大学所蔵の高山寺本一」、『平成十五年度高山寺典籍文書綜合調査団 研究報告論集』、2004年3月、pp. 100-88
2. 「資料紹介 神護寺蔵金剛頂護摩儀軌頼尊点」（石塚晴通と共著）、『訓点語と訓点資料』第112輯、2004年3月、pp. 91-93
3. 「勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点」（石塚晴通と共著）、『勸修寺論輯』創刊号、2004年3月、pp. 23-30
4. 「倭名類聚抄の和訓 一和訓のない項目一」、『国語国文』第73巻第6号、2004年6月、pp. 1-24
5. 「平安時代の辞書についての覚書」、『國文學』（学燈社）第50巻5号「日本語の最前線」、2005年5月、pp. 108-116
6. 「辞書と材料 一和訓の収集一」、石塚晴通教授退職記念会編『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開 石塚教授退官記念論文集』、汲古書院、2005年5月、pp. 117-141
7. 「天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシユノシタイ』（釈迦如来念誦次第）一片仮名本の成立一」、『ビブリア』124号、2005年10月、pp. 3-26
8. 「天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシユノシタイ』（釈迦如来念誦次第）一影印と翻刻一」、『ビブリア』125号、2006年5月、pp. 37-109
9. 「『正法眼蔵』と日本語 付・両足院所蔵六十巻本『正法眼蔵』」、『正法眼蔵』（京都大学文学部国語学国文学研究室編、両足院叢書）臨川書店、2006年7月、pp. 933-953

II. 自己評価

著書『京都大学蔵実隆自筆和漢聯句譯注』は21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」による研究成果である。国文学研究・中国文学研究という近くて遠い研究者同士が一つのテキストに取り組むことができたことは有益であった。ただし、専門が異なるものの集合体であるため、討議に方法論的自覚が欠けており、解釈においても思いつきと偶然が支配することが少なくないという問題点があるように感じた。テキストをいかに読むかという方法論に対する根本的な議論を行う必要があるであろう。

専門分野に関しては、倭名類聚抄・類聚名義抄など、日本の古辞書を中心に研究を行った。「倭名類聚抄の和訓 一和訓のない項目一」、「平安時代の辞書についての覚書」、「辞書と材料 一和訓の収集一」がそれである。後二者において、これまでの研究を総括し、今後の展開を提示できたものと考えている。また、これらの研究において、京都大学が所有する資料を有効活用すること、並びに授業と有機的に連携させることを試みており、今後も継続する予定である。このテーマについては、科学研究費補助金・若手B「古代辞書の研究 一『図書寮本類聚名義抄』片仮名和訓を中心に一」（平成15-16年度）の補助を受けた。

また、京都大学に籍をおくもの任として、京都大学並びに京都周辺の古社寺・図書館等が有する学術的価値の高い資料についてその紹介と研究を行った。「書物と目録—京都大学所蔵の高山寺本—」、「資料紹介 神護寺蔵金剛頂護摩儀軌頼尊点」、「勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点」、「天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシユノシタイ』（釈迦如来念誦次第）—一片仮名本の成立—」、「天理図書館蔵『シヤカニヨライネンシユノシタイ』（釈迦如来念誦次第）—影印と翻刻—」、「『正法眼蔵』と日本語 付・両足院所蔵六十巻本『正法眼蔵』」などがそれぞれである。これらは高山寺・神護寺・勸修寺・建仁寺等における原本実地調査の成果である。調査では専門の異なるもの（日本史、仏教史、美術史など）が共同で作業にあたることが多く、相互に刺激と知識を与え合う効果がある。一方で、知識が共有されにくい面もあることから、科学研究費補助金・若手B「文献資料年代推定のためのガイドライン作成」（平成17-18年度）を得て、プラットフォームの確立に努めた。

川合康三（中国語学中国文学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「人生識字憂患始—中国読書人の憂愁—」、「『中国文学報』第67号、2004年12月、pp. 40-57
2. 「『桃花源記』を読みなおす」、「『説話論集』第14集、清文堂、2004年10月、pp. 3-33
3. 「唐代文学概説」（蒋寅訳）、「『南陽師範学院学報（社会科学版）』第4巻第2期、2005年2月、pp. 41-48
4. 「中国文学史的誕生：二十世紀日本の中国文学研究之一面」、葉国良・陳明姿編『日本漢学研究続探 文学篇』、台湾大学出版中心、2005年8月、pp. 237-248
5. 「平凡な幸せ—中国におけるもう一つの「楽園」—」、「『アジア遊学』、2005年12月、pp. 6-12
6. 「『紅旗破賊非吾事』をめぐって—白居易と呉元済の乱—」、「『白居易研究年報』第6号、2005年12月、pp. 1-22
7. 「中国の聯句」、京都大学国文学中国文学研究室編『京都大学蔵実隆自筆和漢聯句訳注』、臨川書店、2006年2月、pp. 1-18
8. 「広廈千万間—杜甫と白居易—」、「『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』、研文出版、2006年3月、pp. 510-523
9. 「和漢聯句の世界」、「『二松学舎大学人文論叢』77、2006年10月、pp. 1-20
10. 「一人で作った聯句—韓愈「石鼎聯句」をめぐって—」、「『アジア遊学』95、2007年1月
11. 「月と花—和漢対比の一側面—」、「『グローバル化時代の人文学(上)』、2007年3月、pp. 339-364
12. 「なぜ山に登るのか—「峴山」再考—」、「『清水凱夫教授退休記念論集』、2007年3月
13. 「友情の造型—管鮑故事をめぐって—」、「『若槻俊秀教授退休記念論集』、2007年3月

【学術講演】

1. 「人生識字憂患始」、中央研究院文哲研究所、2004年5月
2. 「人生識字憂患始」、台湾師範大学国文系、2004年5月
3. 「中国的自伝文学」、台湾大学中文系、2004年11月
4. 「和漢聯句の世界」、二松学舎大学人文学会、2006年6月
5. 「日本の花・中国の花」、お茶の水女子大学、2006年7月

6. 「岷山・うたげ再考」、六朝学会第15回例会、二松学舎大学、2006年9月
7. 「風景の誕生—集団から個へ—」、東方学会、2006年11月

II. 自己評価

この3年間の業績は、大別して以下の三つの分野にまとめることができる。1、中唐文学。2、テーマ・モチーフの変遷。3、日中比較文学。1、2がこれまでの研究の延長であるのに対して、3はCOEの共同研究を契機として新たに着手した領域である。対象はそれぞれ異なるものの、そこに通底する性質を求めるとすれば、古典文学の本質的な部分への関心といえようか。それは日中比較文学の場合のように、携わったばかりであるためもあって、はなはだ皮相な段階に留まるというきらいもあるが、細分化が進む今日の研究動向のなかにあっては、いささか意義を有するのではないか。たとえば日本で近年とりわけ活発な白居易研究は、未開拓の領域を求めてより細かな問題へと向かっているが、上記二篇は個別的問題を対象としながらも、詩はいかに研究すべきかという問題提起を含んでいる。文学を総体として捉え、その本質に迫ろうとするとところに特徴があるといえよう。

平田昌司（中国語学中国文学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「『事林廣記』音譜類“辨字差殊”條試釋」、『漢語史學報』第5輯、上海：上海教育出版社、2005年。
2. 「しゃべるな 危険—17-20世紀中国の女のことば」、村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代』、東京：東京大学出版会、2005年。
3. 「胡藍黨案、靖難之變與『洪武正韻』」、『南大語言學』第2編、北京：商務印書館、2005年12月。
4. 「黄公紹伝考」、『日本中国学会報』第58集、東京：日本中国学会、2006年10月。
5. 「遠ざかる猿の記憶」、『立命館文学』第598号、京都：立命館大学文学部人文学会、2007年2月。
6. 「中華文明の骨格—科挙の展開」、紀平英作編『グローバル時代の人文学—対話と寛容の知を求めて(上)』、京都：京都大学学術出版会、2007年3月。

【書評】

1. 「書評：丁邦新、張雙慶編『Min語研究及其周邊方言的關係』」、『漢學研究』第22巻第1期、2004年。

II. 自己評価

2004年度～2006年度の3年間に公刊したものは、論文6編、書評1編である。定められた期日どおりに完成したものが1編もなく、数ヶ月から1年以上遅延した原稿ばかりなのは、反省せねばならない。内容は、元代から明代の音韻学史について論文1・3・4の3篇、元代・明代の文化史について論文5、やや時代的範囲の広い論文2・6となる。

上記の研究の背景にあるのは、科挙と中国語(特に音韻)規範の歴史の関わりについての興味である。この問題を検討するうち、これまで実際に存在していた標準語の音韻体系だとされる

ことのあった『古今韻会挙要』字母韻や『洪武正韻』が、一種の理想としての「あるべき体系」に過ぎないのではないかという疑問を抱き、その前提としてこれらの文献の著者たちの伝記的事実の考証を行うに至った。私見が成立するならば、中国語の音韻規範の歴史に多少は寄与する可能性もあるが、関係する国内外の研究者が認めるほどに厳密な論証には未だ成功していない。

木津祐子（中国語学中国文学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「赤木文庫蔵『官話問答便語』校注（稿）」、『沖縄文化研究』31、法政大学沖縄文化研究所、2004年
2. 「琉球編纂の官話課本に見る「未曾」「不曾」「没有」—その課本間差異が意味すること—」、『中國語學』251、2004年
3. 「「官話」の漂着—乾隆年間八重山における「官話」の伝播」、『東と西の文化交流』、関西大学東西学術研究所、2004年
4. 「清代福建の官話-以琉球官話課本的語法為例」（中国語）、『「第五屆國際古漢語語法研會」「第四屆海峽兩岸語法史檢討會」論文集（II）」（予稿集）、2004年
5. 「清代琉球の官話課本にみる言語と文献」、『19世紀中国語の諸相』（関西大学アジア文化交流研究センター）、2007年

【学術講演】

1. 「琉球通事筆下の福州習俗」、台東大學南島文化研究所学術講演会（台湾）、2004年5月20日
2. 「清代福建の官話-以琉球官話課本的語法為例」、台湾・中央研究院「第五屆國際古漢語語法研討會」、2004年8月22日
3. 「日本漢學的歴史轉變—以江戸時代的新潮流和長崎通事談起—」、国立政治大学中文系学術講演会（台湾）、2004年12月29日
4. 「言語の接触と文献の接触—清代琉球編官話教科書を中心として」、国際シンポジウム「19世紀中国語の諸相」（関西大学アジア文化交流研究センター）、2005年12月2日
5. 「倭寇史籍再探」、第13回中国音韻学会（中国・南京市）、2006年8月24日
6. 「官話課本所反映的清代長崎、琉球通事的語言生活」、『東亞漢語漢文學的翻譯與流傳：十七世紀至廿世紀』（台湾・中央研究院中国文哲研究所）、2006年12月12日
7. 「家譜から探る通事の学統」、『アジア文化交流のなかの沖縄とベトナム』、沖縄・沖縄県公文書館、2007年2月17日

II. 自己評価

平成16年度は、台湾中央研究院の招聘より2ヶ月、本学COEの海外出張にて約5ヶ月間、当該研究所に滞在する機会を得た。その間は、文学研究科の日常においては、なかなか時間を

かけて読む機会をもてない資料をじっくり読む時間が与えられ、論文執筆よりも学問的体力をつけることに意をそそぐことができた。

平成16年度の業績は、前年までに定められたものと、台湾での学術講演が主である。新たな論文執筆よりも、資料収集と新知見獲得に精力を費やしたと言える。続く17年度は、前年に着手した文献整理と読解作業を継続したため、新たに論文を書くことはしていない。

18年度は、前2年間で蓄積した知識をもとにしての、論文執筆の段階に入ったところである。通常は、授業や日常業務の中で論文執筆に追われているのであるが、16年度に文学部を離れ、じっくり読書する機会を得られたことは、私にとって非常に有意義であったと考えている。

池田秀三（中国哲学史専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「後漢黄老学の特性」、『中国思想における身体・自然・信仰—坂出祥伸先生退休記念論集』、2004年8月
2. 「高誘覚書」、『東方学』第110輯(巻頭依頼論文)、2005年7月
3. 「韋昭之經學—尤以禮學爲中心」（金培懿訳）、『中国文哲研究通訊』第15巻第3期、2005年9月
4. 「日本京都大學的春秋學研究之傳統」（石立善訳）、『臺灣東亞文明研究学刊』第2巻第2期、2005年12月
5. 「鄭学の特質」、渡邊義浩編『兩漢における易と三礼』（汲古書院）、2006年9月
6. 「清朝考証学の開祖—顧炎武」、橋本高勝編『中国思想の流れ(下)』（晃陽書房）、2006年11月
7. 「黄侃〈禮學略説〉詳注稿(一)」、『中国思想史研究』第28号、2006年3月

【学術講演】

1. 「小島祐馬的学問」、中国・湖南大学嶽麓書院、2005年11月11日
2. 「日本京都大學的春秋学研究之傳統」、中国・湘潭大学、2005年11月12日
3. 「目錄学的理念与方法」、中国・西北大学図書館、2005年11月19日
4. 「校讐之難与輯佚之難」、中国・北京師範大学歴史系、2005年11月29日
5. 「訓詁的虚与実」、中国・清華大学国文系、2005年12月4日
6. 「礼と礼学」、大谷大学・中国文学会、2006年12月12日

II. 自己評価

私は近10年来、漢魏の經学、なかんずく礼学と春秋学を研究課題としてきた。それは經学こそが中国文化の根底であり、また漢魏の經学がそれ以降の經学すべての典範となっているからである。しかし、その主要な関心は、単なる学説史の叙述ではなく、様々な学説がどのような要素を取り込んでいるのか、そしてそれをどのような思考によって組み立てているのかを明らかにするにある。論文2、3および5はその研究成果の一端であり、とくに「鄭学の特質」はこれまでの鄭玄研究の集約といえるものである。その他の論文ならびに講演は必ずしも經学を直

接主題としたものではないものも含まれているが、基本的には上述の研究理念にもとづくものである。

研究者が自分の論文に 100%満足することはあり得ず、上掲の成果にもむろん飽き足りないところは多々あるが、上記の目的をある程度実現した、少なくとも他の研究者が読んで時間の浪費と後悔しないレベルの論文になっている自負はある。また、論文 2 および 3 は原稿依頼を受け、かつ編集委員会の承認を得て掲載されたものであるが、その母体は学術水準の高さで知られる著名な学会と研究機関であり、このことから学界において一定の評価を受けているものと考えている。

宇佐美文理（中国哲学史専修助教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『庭誥訳注』、科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 「六朝隋唐精神史研究」による研究成果の一部・科研分担者・協力者による共著、2005 年、pp. 1-119
2. 『山中人饒舌注上巻』、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「我國傳統中國學の獨自性を発信するためのシステム開発」による研究成果の一部・吉村、宮崎、筒井と共著、2005 年、pp. 1-48
3. 『山中人饒舌注下巻』、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「〈醜〉と〈排除〉の感性論否定美の力学に関する基盤研究」による研究成果の一部・宮崎、吉村、澤村、筒井、福土、村田と共著、2006 年、pp. 1-59

【論文】

1. 「液化する風景—蘇東坡詩の風景把握」、『中国思想における身体・自然・信仰』、2004 年、pp. 229-246
2. 「白居易と風景」、『六朝隋唐精神史の研究』（科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究報告書）、2005 年、pp. 247-260
3. 「小景画小考」、『四大の感性論』（科学研究費補助金基盤研究 (A) (1) 研究報告書）、2005 年、pp. 51-63
4. 「中国藝術理論史序説」、『哲学研究』第 580 号、2005 年、pp. 38-58
5. 「蘇東坡の信仰」、『三教交渉論叢』（京都大学人文科学研究所研究報告）、2005 年、pp. 623-651
6. “Form and Image in Chinese Theory of Art”、『Image and Interpretation』（COE 報告書）、2006 年、pp. 133-143
7. 「中国藝術論における「醜」の問題：序説」、『中國美術の圖像學』（京都大学人文科学研究所研究報告）、2006 年、pp. 1-26

【学会発表】

1. 「「形」についての小考」、日本中国学会第 58 回大会、2006 年 10 月 9 日

II. 自己評価

中国藝術理論史についての論文が 3 件、藝術論と密接な関係にある「風景」に特化した論文が 3 件、さらに藝術論に関わりの深い人物蘇東坡の思想に関わる論文 1 件、と、専門分野に関

わる研究は順調に進んでいると思われる。また、科研費による研究の副産物としての『庭誥譯注』は今後の六朝思想史研究に益するところ少なしとしない。さらに『山中人饒舌注』上巻・下巻、は、従来日本美術史が本格的に扱ってこなかった江戸時代の画論に注目し、日本美術史の新進研究者とともに研究会を行った成果であるが、今後の江戸画論研究には必須の文献の一つになると思われる。

なお、学会発表は、専門分野に関する主要学会である日本中国学会の全国大会におけるものである。

徳永宗雄（インド古典学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. “The Six Teachers of Bodhya”、『インド哲学仏教思想論集(神子上恵生教授頌寿記念論文集)』、2004年、pp.1007-1016
2. “Machine-readable text of Gunaratna’s Commentary Tarkarahasyadipika on Haribhadra’s Saddarshanasamuccaya with word segmentation”、Uploaded on Translation of the http://tiger.bun.kyoto-u.ac.jp/mtokunag/skt_texts, 2004.
3. “Saddarshanasamuccaya with Gunaratna’s Commentary Tarkarahasyadipika (1)”、『人文知の新たな総合に向けて(21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書』、京都大学大学院文学研究科、vol.5, 2004, pp.69-83
4. “On the Origin of the Leshyas”、*Journal of Philosophical Studies* (『哲学研究』) no. 580, 2005, pp.1-11. [paper read at the 214th annual meeting of the American Oriental Society, San Diego, California, USA, March 2004]
5. “Exploring the Original Discourse of Bhishma”、*Journal of Indological Studies*, vols.16-17, pp.195-200, 2004-2005 [paper read at the 29th Deutscher Orientalistentag (Conference of the Deutschen Morgenlaendischen Gesellschaft), Halle, Germany, August 2004.
6. “Udakakriya and the Shantiparvan, Epics, Khilas, and Puranas: Continuities and Ruptures”、*Proceedings of the Third Dubrovnik International Conference of the Sanskrit Epics and Puranas*, Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts, 2005, pp.169-181.
7. “Buddhacarita and Mahabharata: A new perspective”、*Journal of Indological Studies* (Kyoto), no. 18, 2006, pp.135-144. [paper read at the 14th Conference of the International Association of Buddhist Studies, SOAS, London, August-September 2005]
8. “Vedic Exegesis and Epic Poetry: A note on atrapy udaharanti”、*Proceedings of the Fourth Dubrovnik International Conference on Sanskrit Epics and Puranas*, Dubrovnik, Croatia, August 2005.
9. “Bhishma’s Discourse as a Shokapanodana”、*Proceedings of the 13th World Sanskrit Conference*, Edinburgh, U.K., July 2006.

【学術講演】

1. “Some Remarks on the Itihasas in the Mahabharata — A study of the textual development of the Shantiparvan”, International Congress of Asian and North African Studies XXXVII, Moscow 2004.
2. 「仏陀の出現 — 仏教の文化 —」、第 11 回光華セミナー、キャンパスプラザ京都、2006 年 10 月 21 日
3. 「インド人の思惟方法について」、京都経済同友会セミナー、リーガロイヤルホテル京都、2006 年 10 月 5 日

II. 自己評価

この三年間、世界最大の叙事詩『マハーバーラタ』第 1 2 巻の形成過程を解明し、同巻を古代インド文学史に位置づけるための作業を行ない、当初の目標以上の成果を挙げることができた。その成果は、2003 年にヘルシンキで開催された第 1 2 回国際サンスクリット学会、2004 年にサンディエゴで開催された第 214 回アメリカ東洋学会、モスクワで開催された第 37 回国際アジア・北アフリカ研究者会議、ドイツのハレで開催された第 29 回ドイツ東洋学会、2005 年にクロアチアで開催された第 4 回ドゥブロヴニク国際サンスクリット叙事詩・プレーナ学会、ロンドンで開催された第 14 回国際仏教学会、計 6 回の国際学会で順次発表した。

赤松明彦（インド古典学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『楼蘭王国—ロプ・ノール湖畔の四千年』、中央公論新社（中公新書）、平成 2005 年 11 月
2. 『グローバル化時代の人文学—(下)対話と寛容の知を求めて—人文学の未来』（共著）、京都大学学術出版会、2007 年 3 月（第六章「インド的寛容は寛容か」を執筆）

【論文】

1. “Crime and Punishment in Ancient India”, *A Study of Capital Punishments, JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research A: Law and Customes in East Asia*（平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書、研究代表者富谷至）、2004 年 8 月、pp. 56-61.
2. 「パーニニ文法の持つ力」、『月刊言語』第 401 号、平成 16 年 12 月、pp. 70-77.
3. 「空の言語学—仏教における「語りえぬもの」」、『月刊言語』第 405 号、2005 年 4 月、pp. 30-39.
4. 「根源の現れとしての文の意味と直観」、『哲学研究』第 580 号、2005 年 10 月、pp. 1-14.
5. 「キラムドラ（楔形木簡）に見る「法」の観念」、『西南アジア研究』第 63 号、2005 年 11 月、pp. 1-13
6. “Bhartrhari on Meaning and Form: The Second Book of the Vakyapadiya, Karikas 325-347”, *Acta Asiatica* 90（東方学会）、2006 年 2 月、pp. 1-13.
7. 「古代インド人の人々は死刑をどう見たか」、『東アジアにおける法と習慣—死刑をめぐる諸問題』（平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書 研究

代表者富谷至)、2006年3月、pp. 48-55。

8. 「インドにおける哲学誌の成立とパースペクティヴィズム」、『哲学研究』第582号、2006年10月、pp. 25-41。

【学術講演】

1. 「インド哲学としての自我と無我」、土井道子京都哲学基金主催シンポジウム、2004年9月6日
2. 「カローシュティー木簡に見る法と習慣」、第54回羽田記念館定例講演会、2005年6月4日
3. 「インドにおける哲学史の二つの系譜」、京都哲学会公開講演会、2005年11月3日
4. 「インド的寛容について」、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」シンポジウム、(グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて)、2006年12月2日

II. 自己評価

本研究者の研究は大きく三つに分かれる。一は個人研究で、インド古典期の言語哲学についての研究である。上記業績のうち、論文2、3、4、6、がそれである。5世紀の思想家バルトリハリの言語哲学、特にその文章論に焦点をあてた研究であるが、現在実施中の写本研究は、世界的な研究に一層の発展をもたらすものとなろう。また仏教の言語哲学に関わる「アポーハ論」の研究(論文3)についても国際的な評価を得ている。二に21世紀COEプロジェクトに関わった研究がある。著書2、論文8、学術講演1、3、4がそれである。「他者」の成立と「異意識」の形成をテーマとする研究を行う過程で、哲学的諸見解の成立と、インド的な「寛容」の実態とを明らかにする研究について成果を出すことができた。特殊なテーマを広く一般的な枠組み、特に西洋との比較のうちで、明晰に論じえたことは評価できる。三は、科学研究費による共同研究である。著書1、3、論文1、5、7、学術講演2がそれにあたる。近年の10年間、中国学関係者と共同研究を行いカローシュティー木簡研究と「法と刑罰」研究で成果を出している。特にカローシュティー木簡を第一次資料とした楼蘭史の解明は、従来中国史の側からしか論じられなかった「西域」を、インド学の視点から論じたものとして評価しうる。

横地優子 (インド古典学専修助教授)

I. 研究業績

【著書】

1. *The Rise of the Warrior Goddess in Ancient India: A Study of the Myth Cycle of Kausiki-Vindhyavasini in the Skandapurana*. Doctoral thesis (Univ. of Groningen), Groningen, December 2004. (Available at <http://irs.ub.rug.nl/ppn/270752684>)

【論文】

1. "The Relation between the Skandapurana and the Avantyakhanda", in: Bakker, Hans T.

(ed.), *Origin and Growth of the Puranic Text Corpus with Special Reference to the Skandapurana (Papers of the 12th World Sanskrit Conference, vol. 3.2)*, Motilal Banarsidass, Delhi, 2004, pp.79-109.

2. “The Mahisasuramardini icon, with special reference to the images made in the Vakataka realm”, in: Bakker, Hans T. (ed.), *The Vakataka Heritage, Indian Culture at the Crossroads*, Egbert Forsten, Groningen, 2004, pp.167-178.

【書評】

1. 「Shingo Einoo and Jun Takashima (eds.), *From Material to Deity: Indian Rituals of Consecration*, Japanese Studies on South Asia No. 4, Manohar, New Delhi, 2005.」、『南アジア研究』18、2006年10月、pp.192-198

【学会発表】

1. “Krsna as the Seventh Son of Devaki”, the Fourth Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Puranas, Dubrovnik, Croatia, Sept. 5-10, 2005.
2. 「サンスクリット古典文学からの問いかけ」、第18回日本南アジア学会分科会「南アジア研究へー文学からの問いかけ」、龍谷大学、2005年10月1-2日
3. “Local Goddess Worship in an early Shaiva Centre, Kotivarsa, Devikota or Sonitapura”, Internatinal Workshop on Tantrism, the Institute of Oriental Culture, Univ. of Tokyo, Oct. 3-5, 2005.
4. “From the Skandapurana to the Devimahatmya”, the 13th World Sanskrit Conference, Edinburgh, Scotland, July 10-14, 2006.
5. “Vindhyavasini Myth Cycle in the Skandapurana, with some geographical remarks”, International Seminar on Sacred Places, Sacred Journeys, Ardhha Kumbha Mela, Allahabad, Jan. 11-13, 2007.

II. 自己評価

現在の研究分野は以下の3つに分類できる。(1)スカンダプラーナの校訂研究を主とする叙事詩・プラーナ文献の文献学的研究、(2)(1)の成果と碑文・遺跡・図像などの研究とを総合した初期のヒンドゥー教史の研究、特に女神信仰史を中心とする、(3)カーヴィヤ(サンスクリット美文学、詩・戯曲等)及びその理論(詩論・演劇論等)の研究。このうち、(1)と(2)については、1995年から取り組んできた博士論文を完成することができたのが最大の成果である。現在、この博士論文を拡大・改訂中であり、最終的には2009年までに、単行本として Groningen Oriental Series より出版する予定である。2005年以降、この仕事と国際学会での研究発表に追われ、論文を執筆していないことは反省すべき点である。この間の研究発表については、現在論文にまとめる作業をしている。特に3については、2006年12月から2007年1月にかけて、ベンガル地方での現地調査を行った。また、(3)の分野については、2005年度から、水野善文氏(東京外国語大学)が主催する、南アジア文学史の編纂をめざした科研研究に加わり、南アジアの中世・近現代文学の研究者との研究協力体制が整ってきたが、古典文学の膨大な量に比して研究者が数えるほどしかいない状況で苦闘中である。

御牧克己（仏教学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. “*Bon sgo gsal byed (Clarification of the Gates of Bon)*”, *A Fourteenth Century Bonpo Doxographical Treatise*, The Graduate School of Letters, Kyoto University, 2007年3月

【論文】

1. “Les cinq sciences discutés par un auteur tibétain du 15e siècle -Le Rig gnas kun bes de sTag tsha ſ lo tsa ba Íes rab rin chen (1405-?) -”, *Annuaire de l’Ecole Pratique des Hautes Etudes, Section des Sciences religieuses*, tome 113, 2004-2005 (paru en décembre 2006).

【学術講演】

1. 招聘を受け Hamburg 大学（ドイツ）にて Gast-Professor としてセミナー、講演並びに研究打ち合わせ、2004. 4. 18～7. 31
2. 招聘を受け国立高等研究所（EPHE, フランス）にて directeur d’études invité としてセミナー、講演並びに研究打ち合わせ、2005. 3. 24～4. 28

II. 自己評価

専門の研究分野は、インド・チベット仏教思想史である。平成 16～18 年度中は、特に集中的にチベット仏教に於ける五明処（五つの学問分野：言語学、論理学、医学、美術・工芸学、仏教学）に関する文献、並びにチベットの土着宗教といわれるボン教の文献に研究の主眼を置いて研究を継続してきた。また、海外のトップレベルの研究者との学術交流、意見交換を絶やすことなく、常に国際的に高度なレベルの研究を継続出来たと言える。上記の研究内容は諸外国の研究者の評価を受け、平成 16～18 年度中には上記の（学術講演）欄に記した諸外国の大学または研究所より招聘を受け、客員教授として、講演、セミナー並びに研究打ち合わせを行った。

宮崎 泉（仏教学専修専任講師）

I. 研究業績

【論文】

1. 「アティシヤの家族に関する記述について—『中観優波提舍開宝篋』と『菩提心釈』の引用をめぐって—」、『日本仏教学会年報』69、2004、pp. 65-79
2. “The Gradualist Chapter of the *bSam gtan mig sgron* and the Teaching of Kamalaśīla、『印度学仏教学研究』52-2、2004、pp. (53)-(56)
3. 「アティシヤの論理学に対する立場」、『哲学研究』580、2005、pp. 15-37,
4. 「『禅定灯明論』漸門派章における「浄居天子会」の引用について」、『印度学仏教学研究』54-2、2006、pp. (17)-(23)
5. 「『中観宝灯論』にみられる *bdag gis bkod pa rtog ge 'bar* について」、『印度学仏教学

研究』55-1、2006、pp. (60)-(65)

II. 自己評価

なお不明な点が多い10-11世紀にかけてのインド・チベットの仏教を明らかにすることを目的に研究を行っている。インドについてはアティシヤを中心に、チベットは『禪定灯明論』を中心に研究を進めているが、アティシヤに関係が深いと考えられている『中観宝灯論』についても検討を加えた。成果は順調に蓄積されているが、学会にはアティシヤの思想的な立場についてなお議論があり、今後はアティシヤの研究を重点的に進めたい。

中務哲郎（西洋古典学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『世界昔話ハンドブック』（稲田浩二と共編）、三省堂、2004年4月、302頁
2. キケロー『友情について』、岩波文庫、2004年4月、144頁
3. 『ギリシア恋愛小曲集』、岩波文庫、2004年8月、222頁

【論文】

1. 「ホメロスと内陸アジアの英雄叙事詩」、『流域』56(26-2)（青山社）、2005年9月、pp. 28-35
2. 「夢で女と通ず」、『文学』隔月刊6-5（岩波書店）、2005年9月、pp. 52-58
3. 「古代ギリシアのシュララップエンラント」、『アジア遊学』82（特集 楽園 東と西）（勉誠出版）、2005年12月、pp. 32-43
4. 「ペリアンドロスの物語」、『平成15-17年度科研費研究成果報告書』、2006年3月、pp. 1-15
5. 「古代ギリシア人の世界意識と歴史記述」、『グローバル化時代の人文学(上)』、2007年3月、pp. 149-170

【学術講演】

1. 「プトレマイオス「世界図」とその時代」、21世紀COEプログラム「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班第4回国際シンポジウム「絵図・地図と人文学のあいだ」、京都大学、2004年7月11日
2. 「古代ギリシアに連歌はあったか」、21世紀COE第32研究班第16回乾の会「交錯する詩語—付合文学のひろがり—」、京都大学、2005年12月3日
3. 「イソップ寓話はどこの国のものか」、第21回京大サロントーク、京都大学百周年時計台記念ホール、2006年2月14日
4. 「古代ギリシアをきたる人びと—神話と文学の世界から」、同志社大学第33回外国文学週間「地中海—都市と文化の地層」、同志社大学寒梅館ハーディーホール、2006年2月14日

II. 自己評価

この3年間は21世紀COEプログラムに関わる研究活動に力を注ぎ結果を残したように思う。

まず、第34研究班「文学と言語を通して見たグローバル化の歴史」の班代表として研究会・国際シンポジウムを頻繁に開催し、また、他の研究班の活動にも積極的に参加して研究報告を行った。さらに、欧文による COE 最終報告書・文学部百周年記念出版としての *Humaniora Kiotoensia-On the Centenary of Kyoto Humanities*(2006) を編集刊行した。

科学研究費の課題「古代小説の発生と展開に関する研究」に関しては、二つの成果を上げた。本邦未紹介の四つの恋愛物語(集)に対して説話学・民俗学的な見地から注釈を施す作業を長年行ってきたが、それが訳書『ギリシア恋愛小曲集』という形で公刊された。論文「ペリアンドロスの物語」は古代小説発生の現場を再現しようとする試みである。

私の研究課題の四本柱はホメロス、ヘロドトス、ギリシア喜劇、古代説話であるが、ギリシア喜劇以外のテーマについては複数の著書あるいは論文を発表することができたので、懈怠なき3年間であったと評価したい。二度の公開講演により、社会貢献もある程度できたのではないかと思う。

高橋宏幸(西洋古典学講座教授)

I. 研究業績

【著訳書】

1. 『セネカ哲学全集5 倫理書簡集1』、岩波書店、2005年5月、390pp.
2. 『ギリシア神話を学ぶ人のために』、世界思想社、2006年3月、317+xxiv pp.
3. 『キケロー書簡集』、岩波文庫、2006年12月、578pp.

【論文】

1. 「もてなしの物語」、『創文』第482号、2005年12月、pp. 16-19
2. 「アケローオスのもてなしと物語—オウィディウス『変身物語』8.547-9.97—」、『平成15-17年度科学研究費補助金研究成果報告書「古代小説の発生と展開に関する研究」研究代表者：中務哲郎』、2006年5月、pp. 16-48頁
3. “Classical Tradition: a continuum from here to eternity”, *Kyoto-Cambridge International Symposium. Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy*. The Graduate School of Letters, Kyoto University, 2006, pp. 29-38.

【学術講演】

1. 「ウェルギリウス『アエネーイス』と永遠の都ローマ」、平成17年度選定文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業「Anglo-Saxon 語の継承と変容」平成18年度公開講座・講演会・シンポジウム「ヨーロッパ文学の源泉と発展」、専修大学、2005年6月18日・19日

II. 自己評価

平成16-18年度は「古典古代における書簡文学に関する研究」という課題で科学研究費補助金を受けており、上記の著訳書1と3はその成果の一部である。1は、平明で信頼できる訳を提供するとともに、解説において書簡形式がセネカの人生観を提示するための有機的な作

品構想の鍵として機能している点を指摘したこと、3は一般読者向けに、900通あまりの膨大なキケローの書簡から112通を選び、時代の証言を通観し、この偉大な文人の人間性に触れる契機を提供したことが評価できる。

2は平成12～15年度の科学研究費「ラテン文学におけるギリシア神話の受容と継承」での成果を読者対象として学部学生を念頭に本の形に著したものだが、これまでになかった形で、神話の「語り」に焦点を当て、語りの媒体、語る主体、語るための表現様式について原典に即して詳述したことが評価できる。

論文1と2は基本的に著訳書2と同じ研究関心のもとに個別の物語モチーフを取り上げたが、とくに2は『変身物語』の当該箇所にて作品性格の提示が織り込まれていることを論じた点で評価できる。

学術講演1は、『アエネーイス』の紹介として行われたが、英雄アエネーアースの資質ピエタースと「永遠の都」の理念を作品構想の二つの機軸とする独自の視点から総合的な理解を示したことが評価できる。

論文3は、著訳書1, 2、学術講演1に一部示されていた着想を「伝統の継続」という観点から整理統合したものだが、古典の伝統が個人の死を越えた創造的個の集積としての生にそれぞれ自身の意義を見出す自覚的表現をつねに行ってきたことをギリシア・ローマの作品を引用して辿った点が評価できる。

佐藤昭裕（スラブ語学スラブ文学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『中世スラブ語研究—『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語』（ユーラシア古語文献研究叢書3）、京都大学大学院文学研究科、2005年3月、vi + 411pp.

【論文】

1. 「『過ぎし年月の物語』—テキストの構造と生成—」、『ユーラシア古語文献の文献学的研究 NEWS LETTER』16（京都大学文学部）、2006年1月、pp. 7-11
2. 「正教の受容とキリル文字文化圏の成立—古ロシア文章語形成の一断面—」、『グローバル化時代の人文学(上)』（京都大学出版会）、2007年2月、pp. 365-390

【学術講演】

1. 「『過ぎし年月の物語』—テキストの構造と生成—」、第55回羽田記念館定例講演会、京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、2005年11月12日
2. 「スラヴィスト会議における研究動向—文献学部門—」、日本スラヴィスト協会研究集会、一橋大学、2006年1月28日
3. “Stil’ jazyka drevnerusskoj letopisi *Povesti vremennyh let* i jazyk *Žitija Kirilla: opyt sopostavitel’ nogo issledovanija*”, 日本スラヴィスト協会・マケドニアスラヴィスト協会学術交流の夕べ(第39回マケドニア語学・文学・文化国際セミナーの一貫として開催)、マケドニア ペシタン、2006年8月17日

II. 自己評価

佐藤は中世スラブ文献言語の研究を専門とする。著書1、論文1、講演1は12世紀初めのロシアで成立した年代記『過ぎし年月の物語』の言語を、テキストの構造と生成という観点から総合的に分析したものであり、とくに著書1は過去10年余の研究の集大成である。19世紀末から20世紀初めのロシアの文献学者による伝統的な研究の成果と20世紀後半に急速に発展したテキスト言語学の方法を統合し、中世ロシアにおける最も重要な文献の言語の特徴を余すところなく解明したものであり、学界でも高く評価されている。講演3および論文2は、次の段階として、自らが発見した、この『過ぎし年月の物語』テキストに特徴的な「語りのスタイル」の成立過程を明らかにすることを旨とする研究の最初の成果であり、古教会スラブ語福音書や南スラブ系の聖者伝といった中世スラブの文献言語を幅広く扱うことのできる佐藤の力量を良く表している。

西村雅樹（ドイツ語学ドイツ文学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『世紀末ウィーン文化探求』、晃洋書房、平成19年6月刊行予定
2. 『ドイツ文学と美術』（編著書）、日本独文学会研究叢書045、平成18年6月

【論文】

1. 「世紀末ウィーンにおける「異」意識」、『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—(上)』（京都大学学術出版会）、平成19年3月

【学術講演】

1. 「ヘルマン・バルと「ウィーン分離派」」、日本独文学会秋季研究発表会、同志社大学、平成17年10月10日、
2. 「忘れぬ絵の記憶—バルのクリムト評」、科学研究費補助金(基盤研究(A))「文学表現と〈記憶〉—ドイツ文学の場合」研究発表会、東京大学、平成17年12月16日

II. 自己評価

〔著書1〕は、世紀末ウィーン文化に関して近年探求してきた二つのテーマ、すなわちキリスト教を基盤とする西欧文明へのユダヤ系知識人の同化の問題、ならびに文学者や画家たちの西洋文化への批判的意識に基づく日本文化への関心という問題に関する論文を再構成して一書にまとめたものである。その内容を凝縮し多くの新たな知見も盛り込み異なる観点から論じたものが、〔論文1〕である。この論を執筆する過程で、上述の二つのテーマは、言語表現不可能な根源的事態の言語表現化という私にとっての最重要課題につながるという見通しが明確に得られた。この言語表現の可能性と不可能性という課題に関わるものとして目下取り組んでいるのは、世紀末ウィーンの作家ヘルマン・バルの同時代の分離派の美術への批評である。このテーマに関しては、シンポジウム報告集〔著書2〕にその草稿を収録した〔学術講演1〕、ならびに〔学術講演2〕において、それぞれの時点での研究成果を報告し、問題の所在を明らかにすることができた。

松村朋彦（ドイツ語学ドイツ文学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「書記と詩人—ドイツロマン主義と書くことの自己反省」、『希土』第29号、2004年4月
2. 「インクルとヤリコの子供たち—ドイツ文学のなかのカリブ海」、『希土』第30号、2005年4月
3. 「小説の中の絵—ゲーテからケラーまで」、西村雅樹編『ドイツ文学と美術』（日本独文学会研究叢書045）、2006年6月
4. 「切り取られた耳—クラウディウス、ゴッホ、ハーンの日本」、『希土』第31号、2006年8月
5. “Die Kinder von Inkle und Yarico—Die Karibik in der deutschen Literatur”, *Humaniora Kiotoensia. On the Centenary of Kyoto Humanities.* 2006年12月
6. 「ローマのカーニヴァルとドイツ文学—ゲーテとE. T. A. ホフマン」、『京都大学文学部研究紀要』第45号、2007年3月

【学術講演】

1. 「小説の中の絵—ゲーテからケラーまで」、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「ドイツ文学と美術」、2005年10月

II. 自己評価

この3年間は、「近代ドイツ文学と異文化の表象」というテーマについて研究活動をおこなっており、論文(2)、(4)、(5)、(6)はその成果である。論文(2)、(5)では、ヨーロッパ人男性とアメリカ先住民女性とのあいだの恋にまつわる文学的モチーフが、18世紀以降のドイツ文学においてどのように変形されてゆくかを追跡した。論文(4)では、広く西洋の文学や芸術にみられる日本像を、「切り取られた耳」というモチーフとの関連で考察した。論文(6)では、異文化としてのイタリアのカーニヴァルが、18・19世紀のドイツ文学に受容されてゆく過程を、ゲーテとE. T. A. ホフマンのテキストにそくして解明した。以上の論考は、異文化との出会いという観点から近代ドイツ文学を読み直す試みとして評価に値するものであるが、今後さらに研究の視野を広げてゆくことが望まれる。とりわけ、ドイツ文学におけるオリент像にかんする研究は、ドイツ本国においてもまだほとんどなされておらず、日本のドイツ文学研究者としての視点から、このテーマについて引き続き研究を進めてゆきたい。

宮内 弘（英語学英米文学専修教授）

【論文】

1. 「ラーキン詩における文体的特質—「教会に行く」と「ビル」における迂言的表現と韻をめぐって」、『京都大学文学部研究紀要』第44号、2005年
2. 「ラーキンのエレジーと死に関わる詩をめぐって」、『京都大学文学部研究紀要』第45号、

2006年

II. 自己評価

科学研究費（基盤研究 C）の助成を受け、従来からの研究テーマである「フィリップ・ラーキンを中心とする現代英詩の文体論研究」を行ってきた。20世紀後半の代表的詩人の一人であるラーキンの草稿をイギリスのハル大学で調査し、それを基にして彼の文体的特色を明らかにしようと試みた。これまでの調査で、彼はとりわけ韻に強い関心をいだき、それに関してさまざまな技巧を凝らしていることが分かったので、詩のテーマと韻の技巧との関係を他の文体的特質と絡めて考察した。これに詩人の伝記的事実なども考慮に入れて、より広い視点から文体的考察を試みたものが上にあげた2つの論文である。これまで日本で論じられることの無かった作品を多く取り上げたこと、刊行されたテキストだけでなく、直接詩人の草稿をも扱ったこと、また従来あまり顧みられなかった韻の技巧及び形式と内容との微妙な関係をかなりの程度明らかにすることができた点で少なからぬ意義があったように思われる。ただ2つの論文の続編とも言うべき第3の論文がまだ完成していないのが残念である。自己評価としては少し甘いかもしれないが80点くらいではなかろうか。

若島 正（英語学英米文学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編訳書】

1. トマス・M・ディッシュ『アジアの岸边』（編訳）、国書刊行会、2004年12月15日、364 pp.
2. 『ナボコフ＝ウィルソン往復書簡集』（共訳）、作品社、2004年12月20日、490 pp.
3. 『乱視読者の新冒険』、研究社、2004年12月25日、365 pp.
4. ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』（翻訳）、新潮社、462 pp.
5. 『ベータ2のバラッド』（編訳）、国書刊行会、2006年5月30日、364 pp.
6. G・カブレラ＝インファンテ『煙に巻かれて』（翻訳）、青土社、2006年5月30日、530 pp.
7. 『殺しの時間—乱視読者のミステリ散歩』、バジリコ、2006年10月1日、348 pp.
8. ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』（翻訳・新たに注釈を付す）、新潮文庫、2006年11月1日、623 pp.
9. 『狼の一族』（異色作家短篇集18 アンソロジー/アメリカ篇）（編訳）、早川書房、2007年1月31日、262 pp.
10. 『棄ててきた女』（異色作家短篇集19 アンソロジー/イギリス篇）（編訳）、早川書房、2007年3月31日
11. 『エソルド座の怪人』（異色作家短篇集20 アンソロジー/世界篇）（編訳）、早川書房、2007年3月31日
12. 『ナボコフ訳注『エヴゲーニイ・オネーギン』注解』（共著）、京都大学大学院文学研究科21世紀COE「翻訳の諸相」研究会、2007年3月31日、520 pp.

【論文】

1. 「霜の針、蝋燭のしみ—『アンナ・カレーニナ』を読み直す」、『中京英文学』第25号（中京大学英文学・国際英語学会）、2005年3月19日、pp. 1-16
2. 「翻訳という越境—『ロリータ』をめぐる」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学(上)』（京都大学学術出版会）、2007年3月15日、pp. 443-465

【学術講演】

1. 「文学再入門—『アンナ・カレーニナ』を読み直す」、中京大学英文学・国際英語学会平成16年度秋季大会（特別講演）、2004年11月27日
2. 「ロリータとの出会い」、日本英文学会九州支部年次大会（特別講演）、2005年10月30日
3. 「『ロリータ』の翻訳をめぐる」、東北学院大学英語英文学研究所学術講演会、2006年9月20日
4. 「ナボコフと自由間接話法」、立教大学文学部百周年事業公開講演会、2006年12月2日
5. 「『ロリータ』と暴力」、中央大学人文学研究所公開研究会講演、2006年12月22日

II. 自己評価

研究内容は大きく分けると、ウラジーミル・ナボコフの研究と、それ以外の研究に二分できる。前者では、『ロリータ』の新訳を完成したことが一つの成果として挙げられる。『ロリータ』については上記のように、いろいろな場で論じてきたが、今年の9月に出版を予定している『ロリータ』論でとりあえずの区切りをつけたい。後者では、<乱視読者>のシリーズ本を二冊上梓した。また、長年の懸案であったG・カブレラ＝インファンテの『煙に巻かれて』の翻訳を10年がかりでようやく出すことができた。

佐々木徹（英語学英米文学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編訳書】

1. 『ディケンズ鑑賞大事典』（共編著）、南雲堂、2007年3月
2. マイケル・スレイター『ディケンズの遺産』（翻訳）、原書房、2005年3月
3. エドモンド・ウィルソン『エドモンド・ウィルソン批評集1 社会・文明』（共訳）、みすず書房、2005年5月
4. エドモンド・ウィルソン『エドモンド・ウィルソン批評集2 文学』（共訳）、みすず書房、2005年9月

【論文】

1. “Listening to Dickens” *The Dickensian* Vol. 101 Part 1, 2005年6月, pp. 39-45
2. 「小説から映画へ—『オリヴァー・トゥイスト』」、『英語青年』第152巻4号、2006年7月、pp. 22-4
3. 「ヘンリー・ジェイムズの『視点』」、『英語青年』第152巻6号、2006年9月、pp. 5-7
4. “We Ask for More: A Note on Polanski’s *Oliver Twist*”, *The Dickensian* Vol. 102 part3, 2007年1月, pp. 240-42

【学術講演】

1. 「トランスアトランティック——英米交流文学論」、日本英文学会シンポジウム、2004年5月
2. 「ディケンズを聴く」、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会、2005年6月
3. “Edmund Wilson’s ‘The Two Scrooges’ Reconsidered”, 国際ディケンズ・フェロウシップ、アムステルダム大会、2006年7月

II. 自己評価

従来英国小説を専門に研究活動を続けてきたが、ここ数年の関心は特にディケンズに集中している。その研究成果を二度にわたって国際的な専門誌上で問うことができたこと、また、アメリカの著名な評論家ウィルソンの名高いディケンズ論を翻訳する機会に恵まれ、さらにそれについて考察した結果を国際会議で披露することができたのは大きな収穫であった。現在はその発表原稿を活字にする作業を行っており、これも国際誌に発表する予定である。このところディケンズに基づいた映画やディケンズ作品の朗読など、どちらかと言えば周縁的なものを対象にした研究に傾いた観があるので、より本格的な作品研究に腰を据えて取り掛かるべきだと反省される。なお、ジェームズの「視点」は以前からの研究テーマである小説における物語論の一部を成すが、これも近いうちにまとめた形にせねばならない課題である。

廣田篤彦（英語学英米文学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. “Forms of Empires: Rome and its Peripheries in *Cymbeline*,” *The International Shakespearean Yearbook*, 4, ed. Graham Bradshaw, Tom Bishop, and Mark Turner (Aldershot: Ashgate), 2004, pp. 279-93.
2. 「イングランドの中のフランス—『ヘンリー六世・第一部』における英仏二項対立の破綻」, *Shakespeare News* (日本シェイクスピア協会会報) Vol. 45 No. 3, March 2006, pp. 12-22
3. “‘I’ the Heart of London: Language, Protestantism, and English Identity in *A Chaste Maid in Cheapside*,” *Humaniora Kiotoensia: On the Centenary of Kyoto Humanities* (Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006, pp. 101-15
2. “The Partner of Empire: Literacy and Imperialism in *Titus Andronicus*”, *The Shakespearean International Yearbook* 6, ed. Graham Bradshaw, Tom Bishop, and Peter Holbrook (Aldershot: Ashgate), 2007年1月, pp. 311-28
3. 「アエネアスとデイドの変容—『オセロー』における文学的伝統」, 『シェイクスピアとその時代を読む』日本シェイクスピア協会編 (研究社)、2007年3月、pp. 167-189

II. 自己評価

最近3年間の研究の中心となるのはシェイクスピアの演劇作品に表されたエリザベス朝、ジェームズ朝における国民ならびに国家意識の探求である。特にイングランドにおける非イング

ランド人、ローマ帝国における被征服民族、非嫡出子といった周縁的な地位に置かれた登場人物に焦点を当てた分析はこの問題の研究に新しい展望を拓いてきた。この研究に関しては、論文1や4のように、国際的な批評を仰ぐことのできる形での成果が出ているが、2のような国内で発表したものと合せて著書の長さの研究成果を完成し、発表することが今後の課題である。

上記に加えて、シェイクスピア以外の劇作家の作品における国民、国家意識の探求(3)、シェイクスピアの劇作品と非演劇的文学伝統、特に古典古代以来の文学的伝統、との関係の考察(5)という二つの研究を進めているが、どちらも初期の成果が出始めた段階である。

家入葉子 (英語学英米文学専修助教授)

I. 研究業績

【編著書】

1. Yoko Iyeiri (ed.) *Aspects of English Negation*. Amsterdam: John Benjamins; Tokyo: Yushodo Press. 2005年

【論文】

1. “The Use of the Auxiliary Do in Negation in Tom Jones and Some Other Literary Works of the Contemporary Period”, *New Trends in English Historical Linguistics: An Atlantic View*, ed. Isabel Moskowich-Spiegel Fandiño & Begoña Crespo García (Coruña: Universidade da Coruña), 2004, pp. 223-40.
2. Michiko Yaguchi, Yoko Iyeiri & Hiroko Okabe, “Style and Gender Differences in Formal Contexts: An Analysis of *sort* of and *kind* of Appearing in the Corpus of Spoken Professional American English”, *English Corpus Studies* 11, 2004, pp. 63-79.
3. Yoko Iyeiri, Michiko Yaguchi, & Hiroko Okabe, “*To be different from* or *to be different than* in Present-day American English: A Study of Style and Gender Differences Using the Corpus of Spoken Professional American English”, *English Today* 20(3), 2004, pp. 29-33.
4. Yoko Iyeiri, Michiko Yaguchi, & Hiroko Okabe, “Gender and Style: The Discourse Particle *like* in the Corpus of Spoken Professional American English”, *English Corpus Studies* 12, 2005, pp. 37-51.
5. 「ことばと歴史—動詞 *forbid* の用法の変化」、菅山謙正(編)『変容する英語』(世界思想社)、2005年、pp. 15-35
6. Michiko Yaguchi, Yoko Iyeiri & Hiroko Okabe, “Style and Gender Distinctions in Public Speech: An Analysis of Attributive/Predicative Adjectives in the Corpus of Spoken Professional American English”, 『摂南大学国際言語文化部 撰大人文学』13, 2005, pp. 39-54.
7. “‘I not say’ Once Again: A Study of the Early History of the ‘not + finite verb’ Type in English”, *Aspects of English Negation*, ed. Yoko Iyeiri (Amsterdam: John Benjamins; Tokyo: Yushodo Press), 2005, pp. 59-81.
8. 「18世紀英語の否定文における助動詞 *do* の発達」 *The Kyushu Review* 10, 2005年、pp. 23-38
9. 「『パストン家書簡集』における *any* の使用について」、田島松二編『ことばの楽しみ—東西

の文化を越えて』(南雲堂)、2006年、pp.126-37

10. “The Development of Non-assertive any in *The Paston Letters*”, *Textual and Contextual Studies in Medieval English: Towards the Reunion of Linguistics and Philology*, ed. Michiko Ogura (Frankfurt am Main: Peter Lang), 2006, pp.19-33.
11. “Decline of Some Middle English Features of Negation in the Fifteenth Century: A Study of *The Paston Letters*”, *Language and Beyond: A Festschrift for Hiroshi Yonekura on the Occasion of his 65th Birthday*, ed. Mayumi Sawada, Larry Walker, and Shizuya Tara, pp.249-63, Tokyo: Eichosha, 2007年(3月)

【学術講演】

1. “Old and Middle English in Japan”. The 5th Annual Wenshan International Conference: English Studies in Asian Countries, 国立政治大学(台北), 2005年3月19日
2. 「英語史教育と英語史研究—英語史を取り巻く環境の変化と今後の方向性—」、英語史研究会第14回大会シンポジウム「日本における英語史教育」、九州大学六本松キャンパス、2005年9月24日
3. 「史的コーパスを利用した英語史研究—中英語後期の文献の分析例から—」、日本英文学会第78回大会シンポジウム「中世文献の電子ファイル化とその利用」、中京大学名古屋キャンパス、2006年5月21日

II. 自己評価

2004年度～2006年度の研究成果は、2つの領域に分けられる。第一番目は、英語の否定の史的発達を扱うものであり、ここには否定構文の発達に加えて、否定構文中に現れる any などの非断定形、否定構文に関連する助動詞 do の発達、否定的な意味合いをもつ語彙(たとえば forbid) などの研究が含まれている。長期的に取り組んでいる分野であるので、研究方法がかなり確立し、安定的に研究を続けている。ただし、この3年間はやや中英語後期の研究に傾斜した感があるので、次年度以降はもう少し扱う時代の幅を拓けていきたいと考えている。

第二番目は、現代アメリカ英語のスピーチスタイルの研究である。この研究は、学外の研究者との共同研究である。書き言葉としての現代英語研究が盛んである一方で、話し言葉についての研究は比較的少ない。この3年間の研究業績はパイロット調査的なものが多いが、扱っている言語資料の全体像を明らかにするための一定の成果は得られたものとする。2006年からは統計数理研究所の研究者も加えて、本格的な研究を始めたところである。

田口紀子(フランス語学フランス文学専修教授)

I. 研究業績

【編著書】

1. 『身体フランス文学—ラブレーからブルーストまで』(吉田城と共編)、京都大学学術出版会、2006年11月

【論文】

1. 「小説における人物の portrait について — 語り手との関連から」、『平成13-17年度科

学研究費（基盤研究A2）研究成果報告書（代表吉田城）』、2005年3月、pp.45-57

2. « Le moi fictif de l' autobiographie — le cas de Benjamin Constant », *Acte de Colloque franco-japonais « L' Écriture du moi comme dialogue : à qui s' adresse l' autobiographie ? »* (Kyoto, les 15 et 16 avril, 2005), à paraître.
3. 「カタログ的身体から記号的身体へ—小説における登場人物のポルトレをめぐって」、『身体フランス文学—ラブレールからプルーストまで』（京都大学学術出版会）、2006年11月、pp.327-345
4. « Des romans historiques aux romans de mœurs — la situation littéraire en France dans les années 1820-40 », *Humaniora Kiotoensia : On the Centenary of Kyoto Humanities* (Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006, pp.137-153.
5. 「フィクションとしての旅行記—メリメの『カルメン』に見る「スペイン性」の表象」、『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて（上）』（京都大学学術出版会）、2007年3月、pp.391-419

【学術講演】

1. « Le moi fictif de l' autobiographie — le cas de Benjamin Constant », Colloque franco-japonais « L' Écriture du moi comme dialogue : à qui s' adresse l' autobiographie ? », Kyoto, les 15 et 16 avril 2005
2. 「地誌小説としての『カルメン』—そのスペイン性はどのように演出されたか」、国際高等研究所企画委員会、2006年2月18日
3. 「フランスの言語政策とそのナショナリズム的機能」、日本学術会議 言語・文学委員会、2006年8月28日

II. 自己評価

文学研究科のCOEプログラムの終了時期であったこともあり、自分の本来の専門であるフランス語学の研究というよりは、より広い観点からの、近隣領域にまたがるテーマでの仕事が多かった。そのためにこれまでより広いパースペクティブの中で、今後の自分の仕事を方向付けることが可能になり、その意味では大きな収穫をもたらしてくれたと言って良い3年間であった。

これからの3年間は、この新たな知見をベースに、より専門に密着した仕事をしていきたい。具体的には、フランス19世紀における歴史のテキストと小説のテキストの比較考察による、歴史とフィクションとの関係の検証を考えている。

吉川一義（フランス語学フランス文学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『プルースト「スワンの恋」を読む』、白水社、2004年4月、144p.
2. *Dictionnaire Marcel Proust* (rédaction de 43 entrées), sous la direction d' Annick Bouillaguet et de Brian Rogers, Champion, octobre 2004, 1098p.

【論文】

1. « Proust and Painters », *Approaches to Teaching Proust's Fiction and Criticism* (New York, MLA), 2004.
2. 「プルーストと「エルー所蔵のボルディーニの『レダ』」」、『現代文学』70号、2004年12月
3. « Un exemple de la critique génétique : les brouillons de la *Recherche* confrontés aux lettres de Proust », *L' Histoire littéraire à l' aube du XXIe siècle, cotroverses et consensus* (PUF), mars 2005.
4. « Tableaux désignés, suggérés et cachés dans la *Recherche* », *Marcel Proust 5* (Lettres modernes Minard), mars 2005.
5. « Vision et style dans les marines d' Elstir », *Bulletin d' informations proustiennes* (Presses de l' École normale supérieure) n°35, mai 2005.
6. « La correspondance de Proust et l' utilité de son index », *Correspondances et manuscrits* (Société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray), février 2007.
7. « Proust et Rembrandt », *Marcel Proust 6* (Lettres modernes Minard), mars 2007.
8. « L' idolâtrie artistique chez Proust », *Marcel Proust 6* (Lettres modernes Minard), mars 2007.

【学術講演】

1. 「エルスチールの海洋画におけるヴィジョンとスタイル」、プルースト研究会、白百合女子大学、2004年5月29日
2. 「プルースト『失われた時を求めて』における自然描写」、日本比較文学学会シンポジウム「文学と自然」、東洋大学、2004年6月26日
3. « Du *Contre Sainte-Beuve* à la *Recherche* », journée d' études sur «Manuscrits de Proust : approches critiques et problèmes éditoriaux», Maison franco-japonaise, 16 juillet 2004.
4. 「プルーストの美術の旅」、横浜市立大学、2004年10月8日
5. « Proust et les collectionneurs de tableaux », Université de Paris-Sorbonne, 24 février 2005.
6. « Apollinaire et Picasso », Université de Paris-Sorbonne, 7 mars 2005.
7. « Vision et style dans les marines d' Elstir », Université de Paris-Sorbonne, 7 mars 2005.
8. « Proust et Rembrandt », Université de Paris-Sorbonne, 8 mars 2005.
9. « Proust et la peinture », Université de Paris-Sorbonne, 17 mars 2005.
10. 「プルースト『失われた時を求めて』と印象派の画家たち」、ブリヂストン美術館、2006年6月18日
11. « Proust, critique d' art », Université de Paris III, 18 novembre 2005.
12. « La correspondance de Proust et l' utilité de son index », colloque sur «La correspondance et les manuscrits au Musée Marcel Proust», Maison de tante Léonie, Illiers-Combray, 20 novembre 2005.
13. « Les cahiers de Proust éclairés par sa correspondance », journée d' études consacrée

à «La publication des cahiers de Marcel Proust conservés à la Bibliothèque nationale de France», École normale supérieure, 1er mars 2006.

14. 「プルーストと絵画コレクター」、追悼シンポジウム「吉田城先生とプルースト」京都大学、2006年6月24日
15. 「プルースト—批評から創作へ」、科学研究費「フランス文学における総合的生成研究」報告会、京都大学、2006年12月16日
16. « Du *Contre Sainte-Beuve* à la *Recherche du temps perdu* », Collège de France, 20 mars 2007.
17. « Manet et les impressionnistes dans les salons de la *Recherche du temps perdu* », 23 mars 2007.

II. 自己評価

長年の研究課題であったプルーストと絵画について、ひと通りの調査結果を公表することができたが、総合的著作にまとめるには至らなかった。また、作家の絵画受容の歴史的背景については、まだ十分な調査ができていない。ともに今後の課題としたい。もうひとつの課題であるプルースト草稿帳出版は、進捗が遅れている。共同研究者の協力をえて、これもできるだけ早く実現できるようにしたい。

増田 真 (フランス語学フランス文学専修助教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「ルソーの言語論と音楽論における国民とアイデンティティ」、京都大学文学研究科『人文知の新たな総合に向けて』（21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書IV〔文学編1 論文〕）、2004年3月、pp. 165-187.
2. 「語る主体としての身体—ディドロにおける身体と自己—」、『フランス文学における身体—その意識と表現』（平成13-16年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者吉田城）、2005年、pp. 85-101（吉田城、田口紀子共編著『身体のフランス文学—ラブレーからプルーストまで—』京都大学学術出版会、2006に再録）
3. 「共同体における法と演劇—『ダランベールへの手紙』とルソーの政治思想—」、『政治と詩学：ルソー『ダランベールへの手紙』とジュネーヴ共和国』（平成15-16年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者佐藤淳二）、2005年、pp. 17-32
4. 「ルソーにおける余談のレトリック」、*In memoriam Jo Yoshida* 『仏文研究』吉田城先生追悼特別号（京都大学フランス語学フランス文学研究会）、2006年、pp. 95-107
5. « Lois et spectacles dans la communauté - La *Lettre à d' Alembert* et la pensée politique de Rousseau - », *Humaniora Kiotoensia. On the Centenary of Kyoto Humanities*, Graduate School of Letters, Kyoto University, 2006, pp. 117-135.

【翻訳】

1. ジャック・プルースト「十八世紀におけるヨーロッパと極東の間の文化の伝達者について」、

中川久定、ヨッヘン・シュローバハ編著『十八世紀における他者のイメージ —アジアの側から、そしてヨーロッパの側から—』、河合文化教育研究所、2006、pp. 3-18。

2. ヨッヘン・シュローバハ「ヴォルテールから得られる教訓—十八世紀研究の真の普遍性に向けて」、同上、pp. 19-36

【研究発表】

1. 「ルソーにおける法と共同体—『ダランベールへの手紙』—を中心に」、18世紀フランス研究会、白百合女子大学、2004年5月29日
2. « Argumentation philosophique et mise en scène autobiographique chez Rousseau - La rhétorique de l'intimité dans la « Profession de foi du vicaire savoyard », Colloque franco-japonais de Kyoto « L'écriture du moi comme dialogue - À qui s'adresse l'autobiographie? », Institut franco-japonais du Kansai, le 15 avril 2005. (「ルソーにおける哲学的論述と自伝的演出—「サヴォワ人助任司祭の信仰告白」における親密さのレトリック—、京都日仏シンポジウム「対話としてのフランス自伝文学—自伝はだれに向けて書かれるのか?」、関西日仏学館、2005年4月15日)
3. « Physiocratie et spiritualisme chez Le Mercier de La Rivière - La religion dans *L'Heureuse nation ou Gouvernement des Féliciens* (1792) - », Colloque international « Lumières et religion », Centre interdisciplinaire de recherches sur les Lumières en Europe, Halle, Allemagne, 2005. (「ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエールにおける重農主義と心霊論—『幸福な国民またはフェリシー人の政体』(1792)における宗教—、国際18世紀学会シンポジウム「啓蒙と宗教」、ドイツ、ハレ、ヨーロッパ啓蒙学際研究所、2005年9月22日)
4. 「18世紀における旅行文学の多面性」、日本フランス語フランス文学会2006年春季大会ワークショップ「旅とエクリチュール」、慶應義塾大学三田キャンパス、2006年5月20日
5. 「音楽論から記憶と夢想の詩学へ—ルソーの文学美学の形成の一側面—」、科学研究費補助金研究「フランス文学における総合的生成研究—理論と実践」研究会、京都大学文学部仏文研究室、2006年9月16日
6. 「ルソーを読むデリダー『グラマトロジーについて』をめぐって—」、京都大学人文科学研究所「啓蒙の運命」研究会、2006年12月1日

II. 自己評価

過去3年間は主たる研究テーマであるルソーの思想の研究を続けるかたわら、その周辺の領域(18世紀フランスのほかの作家・思想家)も扱った。

上掲の論文のうち1, 2, 4, 5はルソーに関するものである。中心的なテーマとして研究を行っている「言語論と政治思想」という問題と直接関連しているものは1だけであるが、ほかのものもその問題の延長に属するものと見なすことができる。口頭発表のうち、5, 6, もやはりルソーの言語論の周辺に位置する問題を扱ったものである。

そのほか、論文2, 研究発表3, 4, のようにルソー以外の作家・思想家について研究発表する機会があったことは重要な成果であった。

過去3年間の研究活動の状況は、特に輝かしいとは言えないにしても、少しずつ進捗している。ルソーの言語論に関する研究はできれば今後数年でまとめることを目指すと同時に、その

周辺の領域の研究も深めていきたい。

永盛 克也 (フランス語学フランス文学専修助教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『身体フランス文学—ラブレールからプルーストまで』 (共著、吉田城・田口紀子編)、京都大学学術出版会、2006年

【論文】

1. 「シェイクスピアとフランス・ロマン主義」、『*Trans*, 21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第35班「翻訳の諸相—異文化翻訳と受容」ニューズレター』No.18、2006年
2. 「両大戦間のフランス演劇におけるギリシア神話の翻案について」(共著)、『人文知の新たな総合に向けて』21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第4回報告書(京都大学大学院文学研究科)、2006年、pp.452-457
3. 「フランス絶対王政と古典悲劇—「王の身体」をめぐる」、『フランス文学における身体—その意識と表現』H13-16年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2)研究代表者・吉田城)研究成果報告書、2005年、pp.59-69
4. 「シェイクスピアとヴォルテール」、『人文知の新たな総合に向けて』21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第3回報告書(京都大学大学院文学研究科)、2005年、pp.603-605
5. 「ロラン・バルトと演劇」、『人文知の新たな総合に向けて』21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第2回報告書IV文学篇1(京都大学大学院文学研究科)、2004年、pp.25-35

【学術講演】

1. «L'écriture du moi dans le discours moraliste au XVIIe siècle», Colloque international «L'écriture du moi comme dialogue : à qui s'adresse l'autobiographie?», 関西日仏学館、2005年4月
2. 「16-17世紀フランスにおける翻訳の諸相—ユマニスムから古典主義へ」、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第35班「翻訳の諸相—異文化翻訳と受容」第2研究班第7回研究会、京都大学、2005年1月

II. 自己評価

COEプログラム(「翻訳の諸相」研究班)に参加することで、自分の専門分野(フランス古典悲劇、古典主義美学)以外の問題あるいは専門分野と隣接する問題について調査・研究することができたこと、またその成果を発信することができたことは肯定的に評価できると思う。「自伝文学」をテーマとする国際シンポジウムで行った研究発表についても同様に自身の研究の幅を広げる結果となり、評価できると考える。今後の研究においては、専門性の高い論文を十分な時間をかけて執筆することを課題としたい。

齊藤泰弘 (イタリア語学イタリア文学専修教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「アンシャン・レジーム下の庶民像—ゴールドーニの作品に見られる地方の農漁民と都市の下層民の描き方—」、『平成 12～14 年度科研基盤研究研究成果報告書』、2004 年 3 月、pp. 39-50 (報告書)、pp. 50-112 (資料集)
2. 「ゴールドーニの解説を通して見た彼の喜劇の自己評価について—1756 年の『別荘生活』の場合—」、『イタリア学会誌』 54、2004 年 10 月、pp. 28-58
3. 「ゴールドーニの作劇法の変遷について—ジャチンタのメタテアトロ的言辞は何を示唆するのか—」、『京都大学文学部紀要』第 44 号、2005 年 3 月、pp. 1-39
4. 「ゴールドーニの『イギリスの哲学者』をめぐる論争について (その 1) —ヤコッベ・モンドウィルは高貴な哲学者か、それとも卑しい家庭教師なのか—」、『京都大学文学部紀要』第 45 号、2006 年 3 月、pp. 27-60

【学術講演】

1. 「サン・ルーカ劇場時代のゴールドーニの作劇法について」、イタリア学会大会での研究発表 (東北大)、2004 年 10 月 23 日
2. 「『ダ・ヴィンチコード』の謎」、日本イタリア京都会館、2005 年 5 月 7・14・21 日、6 月 15 日
3. 「モナリザの謎を解く—ダ・ヴィンチの手稿に記された宇宙論を手掛かりに—」、大阪国際サイエンスクラブ、2005 年 6 月 14 日
4. 「ダ・ヴィンチからのメッセージ (幼年期から青年期)」、日本イタリア京都会館梅田校、2006 年 1 月 14・21・28 日、2 月 4・18・25 日
5. 「『ダ・ヴィンチコード』の裏側」、日本イタリア京都会館、2006 年 5 月 20 日、27 日
6. 「ダ・ヴィンチからのメッセージ (青年期から壮年期)」、日本イタリア京都会館梅田校、2006 年 4 月 15 日、5 月 6 日、6 月 3・17 日、7 月 1 日

II. 自己評価

私の研究分野は 2 つに分かれる。その 1 つは、レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿の翻訳出版活動 (すべて岩波書店から出版) と、その手稿に基づいたダ・ヴィンチの芸術思想や科学思想の解明と、その思想解明に基づいた彼の絵画作品の解読である。これは京大助教授時代の 1996 年までの、およそ 20 年間にわたって行なってきた研究であり、現在その成果をまとめているところである (博士論文として提出予定)。学術講演の②-⑥は、すべて以上の研究成果に基づいて、レオナルドの思想や生涯を詳しく解説した講演で、そのほとんどは、私が理事長を務めている日本イタリア京都会館で行なったものである。

もうひとつの研究分野は、京大教授になった 1997 年から現在まで行なっている 18 世紀ヴェネツィアの劇作家カルロ・ゴールドーニと当時のヴェネツィア文化の研究である。この場合も、

彼の作品の翻訳出版活動（イタリア政府の出版助成を受けて、ゴルドーニ生誕 300 年に当たる 2007 年の夏に名古屋大学出版会から出版予定）と、彼の作品研究とを並行して行なっている。論文の①は、科研の報告論文と資料集であり、いわば彼の演劇世界の全体像をラフになぞったスケッチである。②は『別荘生活』、③は『別荘狂い』（講演の①はその口頭発表）、④は『イギリスの哲学者』についての研究論文で、そのうち②は、レフリー制度のある学会誌投稿論文であるが、③と④を発表した『京都大学文学部紀要』には、レフリー制度がない（ここへの投稿理由は、この伝統ある研究誌では、通常の学会誌に優る質の高さが求められることと、さらにとりわけ枚数制限がなく連載も許可してくれることによる）。

自分の業績の自己評価は難しいが、論文②は、日本のイタリア文学研究誌として最も権威ある『イタリア学会誌』に掲載を許可されたものであり、③と④は、それ以上の質の高さを求められる研究誌に発表した論文であるので、学界においても一定の評価を受けられるものと考えている。

天野 恵（イタリア語学イタリア文学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「ボルツ・デステとその時代（7）」、『イタリアーナ30号』、2005年3月
2. 「ベンボとアルドゥス版『カンツォニエーレ』」、『イタリア学会誌第56号』、2006年10月

【学術講演】

1. 「終着点としてのアリオスト —『狂えるオルランド』前史—」、専修大学、2006年6月17日—18日
2. 「ベンボの《規範》と fascicolo B」、第54回イタリア学会、静岡文化芸術大学、2006年10月21日

II. 自己評価

上記の研究業績中、テーマ、内用ともに国際的に通用するものは、イタリア学会誌第56号に掲載された論文「ベンボとアルドゥス版『カンツォニエーレ』」と第54回イタリア学会における発表「ベンボの《規範》と fascicolo B」の二つである。いずれも、イタリア文学語の形成にとって重要な16世紀の《言語問題》とアリオスト、カスティリオーネ等による実作品の関連を追及する天野の一連の研究に属するもので、現時点におけるイタリア本国における研究の最新成果を踏まえた上で、たとえわずかではあれさらに先に進もうとする試みであり、また口頭で発表したものも論文の形での公刊を予定している。こうした研究のクオリティは十分に高いものと判断しているが、問題は進捗の速度であり、予定どおりに進行しているとは言いがたい。一次資料を扱う純粋なオリジナル研究であり、作業が成果に直結しないことがその主因ではあるが、遅滞は過度であると判断される。

〔思想文化学専攻〕

伊藤邦武（哲学専修教授）

I. 研究業績

【著書・訳書】

1. ウィリアム・ジェイムズ『純粹経験の哲学』（翻訳）、岩波文庫、2004年7月
2. 『パースの宇宙論』、岩波書店、2006年9月

【論文】

1. 「ヴィジョンとしての宇宙論（1）」、『PROSPECTUS』7、2004年12月
2. 「宇宙における時間の誕生」、『現代思想』33-11、2005年10月
3. 「ヴィジョンとしての宇宙論（2）」、『PROSPECTUS』8、2005年12月
4. 「チャールズ・パースの「アガペー主義」」、『宗教哲学研究』23、2006年3月
5. 「唯名論から実在論へ」、『大航海』60、2006年10月
6. 「ジエムズと西田幾多郎—その経験概念」、『日本の哲学』7、2006年12月
7. 「ケインズ・ハイデガー・間主観的確率」、『大航海』61、2007年1月

【学術講演】

1. 「有限の時間と無限の時間—哲学的宇宙論の観点から」、日独文化研究所主催公開シンポジウム、京都大学芝蘭会館、2005年11月12日
2. “Introduction” to Kyoto-Cambridge International Symposium “Integrating the Humanities: Roles of Classics and Philosophy”, Faculty of Classics, Cambridge University, 2006年9月25日
3. 「パースの宇宙論」、関西哲学会、神戸大学文学部、2006年10月21日

II. 自己評価

この3年間の研究の主要な成果は、著書『パースの宇宙論』であり、この間の論文発表、講演等は主としてこの成果の集約される個別研究である。『パースの宇宙論』で扱った主題は、19世紀後半のアメリカにおける思弁的、宇宙論的形而上学の歴史的な位置づけと、現代の宇宙論から見られたその意義についてであるが、この主題はより一般的に言えば、「現代の宇宙論の哲学的意義」というテーマに結びついており、その意味ではこの3年間研究は、これまで私が発表してきた著書『コスモロジーの闘争』（1997年）と『偶然の宇宙』（2002年）の延長上にある。現代の宇宙論の哲学的意義とは、歴史的には、カント以来の宇宙論の不可能性というテーゼにたいして、現代の哲学・科学はどのように答えるのかという問題であり、理論的には、思弁と経験、形式的分析と宗教的、文学的思念との関係についての現代的な反省はいかなるものであるのか、という問題である。これらの問題は、今日の日本の哲学界においてあまり真剣に取り上げられていないテーマであり、その意味で独創的な研究であると考えることができる。しかしながら、こうした研究の継承や発展が学界においていまだ少ないという事実は、この問題意識についての啓蒙、発表の蓄積が不足しているためだとも考えられる。その意味では、成果の公表、公刊のための一層の努力が必要であろうと思われる。

出口康夫（哲学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「臨床からの問い：「統計学の哲学」序説」、『京都大学文学部研究紀要』44、2005年、pp. 41-84
2. 「構成・可視化・アルゴリズム：カント数学論のコンテクストと現代性」、『京都学派の伝統とカント：カント没後200周年記念学会 公開講演シンポジウム』、2006年、pp. 2-35
3. 「モンテカルロ法とベイズ・ルネッサンス」、『偶然性と確実性に関する哲学的・理論的研究』科研費研究報告書（基盤研究B）研究代表：服部裕幸、2006年、pp. 50-60
4. 「カオスの実証はなぜ、そしていかに困難なのか?」、『実証段階におけるカオス研究の哲学的考察』科研費研究報告書（基盤研究C）研究代表：出口康夫、2006年、pp. 1-13
5. “Some Pioneer Cases of Simulation in Japan” (with Chigusa Kita)、『実証段階におけるカオス研究の哲学的考察』科研費研究報告書（基盤研究C）研究代表：出口康夫、2006年、pp. 30-39
6. “Break philosophy through internally”, *Topoi* (Springer), vol. 25, No. 1-2, no. 2, 2006, pp. 33-38.
7. “Neo-Nishitanian Dialetheic Monism: Towards a more pluralistic view on art and religion”, Tetsuro Nakatsukasa et al. (eds.) *Humaniora Kiotoensia On the Centenary of Kyoto Humanities*, 2006, pp. 53-77.
8. 「ゲーデルとスコレーム—「完全性定理」をめぐる—」『現代思想』vol. 35-3：総特集ゲーデル（青土社）、2007年2月、pp. 164-178.

【学術講演】

1. “On Some Pioneer Cases of Simulation in Japan”, with Chigusa Kita, 4S and EAST joint conference, Ecole des Mines de Paris, 2004年8月27日
2. 「構成・可視化・アルゴリズム—カント数学論のコンテクストと現代性—」、日本カント協会第29回大会（京都大学大学院文学研究科COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」Canone研究会共催）公開講演会、京都大学、2004年11月13日
3. 「カオスと社会科学の実証可能性」、科研費研究「実証段階におけるカオス研究の哲学的考察」（代表：出口康夫）研究会発表、北海道大学、2005年1月5日
4. 「スコレーム・プログラム」、科研費研究「計算の哲学：計算概念の原理的再構築」（代表：三好博之）、京都産業大学、2005年3月11日
5. 「カントの「構成」について—そのコンテクストと現代性—」、京都哲学史研究会、大会館、2005年7月23日
6. 「「和」と'wa'のあいまに—西洋哲学から見た「和」—」、日本印度学仏教学会第56回大会公開シンポジウム、四天王寺国際仏教大学、2005年7月30日
7. 「臨床からの問い—無作為臨床治験の倫理と方法論—」、京都生命倫理研究会（京都大学大学院文学研究科COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」PaSTA研究会・科研費研究「応用倫理学各分野の基本的概念に関する規範倫理的及びメタ倫理学的研究」（代表：坂井昭宏）共催）、京都大学、2005年9月25日

8. “Examples of Dialetheism: Nishida’s ‘contradictory self-identity’ and Keron arithmetic”, The inaugural meeting of BILAP (Buddhism in Logic and Analytic Philosophy), Westminster Collage, Cambridge, 2005年11月20日
9. 「「確率」の「あいまいさ」」、日本科学哲学会第38回大会ワークショップ「不確実性の論理—確率と曖昧性—」、東大駒場キャンパス、2005年12月4日
10. 「統計学の哲学への招待」、第23回地球研セミナー、総合地球環境研究所、2006年1月16日
11. “Scientific and Religious Evidence”, 「日本仏教と自然科学における思索と想像」龍谷大学プロジェクト「浄土仏教思想と自然科学」公開シンポジウム、龍谷大学、2006年5月11日
12. “An transcendental character of scientific evidence”, Melbourne Colloquium for philosophy, University of Melbourne, 2006年8月
13. “Japanese Philosophy: Zen, Hua-yen Buddhism, and their Influence”, A Special Lecture, University of Melbourne, 2006年8月9日
14. “In Defense of Realism: a case from measurements”, Melbourne Logic Group Seminar, The University of Melbourne, 2006年8月11日
15. 「統計学ビフォー&アフター：統計学は科学に何をもたらしたのか」、京都大学大学院文学研究科COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」PaSTA研究会「統計学の哲学と推論」、京都大学、2006年12月16日
16. “In Defense of Realism: Views from Measurements of the Speed of Light”, 京都大学大学院文学研究科COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」PaSTA研究会「現代物理学における実在と論理」、京都大学、2007年3月3日

II. 自己評価

(一) 過去3年間、私は、従来の行ってきた研究の深化とともに、研究範囲の拡大にも努めた。具体的には、これまで取り組んできた数理哲学の諸研究（確率・統計学の哲学、カントの数学論、カオス・複雑系研究の哲学的意義など）に加え、現代分析哲学・哲学的論理学の観点からの東洋思想研究に関する種々の研究成果（学術論文2篇、学術講演3回）をも発表した。

(二) さらに科研費研究や21世紀COEプログラムといった、競争的資金に基づく共同研究にも積極的に参加し、多数の研究発表を行うとともに、その成果を5篇の学術論文として公刊した。

(三) またこの間、英語での論文執筆・学術講演を積極的に行い、研究の海外発信にも努めた。具体的には、学術論文9篇中4篇が英語論文（2篇は海外の著名学術雑誌に掲載ないし掲載予定）、16回の学術講演のうち5回は海外の学会・研究集会における英語発表である。

中畑正志（西洋古代哲学史専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『イリソスのほitori—藤沢令夫先生献呈論文集』（内山勝利と共編）、世界思想社、2005年
【論文】

1. 「ファンタシアーの変貌—現われ・表象・想像—」、『思想』962号（2004年6月号）、2004年、pp. 4-26
2. 「もう一つの原点—アリストテレスのファンタシアー論」、『西日本哲学会年報』12号、2004年、pp. 59-87
3. 「志向性—現在状況と歴史的背景—(3)」、『哲学研究』577号、2004年、pp. 32-55
4. 「アリストテレス」、『東洋大学哲学講座 哲学をつくる』東洋大学哲学科編（知泉書館）、2005年、pp. 3-34
5. 「アリストテレスの心の哲学の変容—新プラトン主義者による註解から」、『新プラトン主義研究』4号、2005年、pp. 5-27頁
6. 「ロゴス—「理性」からの解放」、内山勝利・中畑正志編『イリソスのほitori—藤沢令夫先生献呈論文集』（世界思想社）、2005年、pp. 407-428
7. 「<自然>を読む—アリストテレスにおける素材概念の導入」、『アルケー（関西哲学会年報）』13号、2005年、pp. 175-194
8. 「オッカムへの「脚注」の試み」、『創文』483号、2006年、pp. 24-26
9. “Image and interpretation: a historical introduction”, *Image and Interpretation: Papers given at a Symposium held at the Graduate School of Letters, Kyoto University, September 10-11, 2005* (Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006, pp. 119-131.
10. “Intentionale Inexistenz: an ambiguous heritage from Aristotle”, *Kyoto - Cambridge International Symposium "Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy"* (Kyoto: The Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006, pp. 127-136.

【学術講演】

1. 「現われとイメージ—想像力の系譜」、国際シンポジウム「イメージと解釈」、京都大学文学部、2005年9月10日
2. “Intentionale Inexistenz: an ambiguous heritage from Aristotle”, *Kyoto - Cambridge International Symposium "Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy"*, Cambridge University, 25th Sept. 2006.

II. 自己評価

この期間には、主として心にかかわる基礎概念の成立と変容をめぐる歴史的分析を遂行した。具体的には、まず<想像> (phantasia, imagination) の概念が、その重要な歴史的源泉であるアリストテレスにおいて感覚内容を構成するという局面をもつことを確認した上で、感覚と

は対照的な「非実在的なものの心象形成機能」へと変容する経緯をたどった。また<志向性>概念について、その導入者ブレンターノはアリストテレスの魂論にその主要な源泉を求めたが、この概念を要請するブレンターノの理論的背景および彼のアリストテレス解釈には反アリストテレス的な内在主義が強く影響していることを論証し、この概念の歴史的問題性を明らかにした。そのほか<ロゴス>や<素材>（質料）などの概念についても、その重要な用例について従来の解釈の不備とより適切な理解を提示し、さらにこれらの研究と平行して、アリストテレスの哲学全般について新プラトン主義者によるテキストの註解による影響を跡づけた。

以上の試みは、それに対するコメントや応答などから、文献学的規範を守りつつそれぞれの概念の歴史に新たな光を投げるとともに、現在自明のように受け入れられている主要な概念の成立根拠を反省する重要な手がかりを与えるものと信じる。

川添 信介（西洋中世哲学史専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「西洋中世の「正義」概念と戦争—トマス・アクィナスの立場から」、『グローバル化時代の人文学（下）』紀平英作編（京都大学学術出版会）、2007年
2. 「大学をめぐる知の構造—中世パリ大学の場合」、『知と学びのヨーロッパ史』南川高志編（ミネルヴァ書房）、2007年
3. 「心の哲学」、『中世哲学を学ぶ人のために』中川純男／加藤雅人編（世界思想社）、2005年

【学術講演】

1. “The Classical Traditions in Medieval Scholastic Philosophy”, Kyoto-Cambridge International Symposium “Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy”, the Faculty of Classics, Cambridge University, 25 Sep. 2006.
2. 「トリビアはなぜトリビアなのか—宗教と哲学のめざすもの」、光華女子大学宗教講座、光華女子大学、2006年5月26日
3. 「認識・自然本性・神」、中世哲学会シンポジウム提題報告、筑波大学、2005年10月31日

II. 自己評価

COEプロジェクトの終盤にあたった平成16年から18年の研究は、当該プロジェクトに関わる研究領域が中心となった。そのため、従前からの研究領域より広範囲なテーマについて考究することができた。また、狭い意味での理論的考察を離れて、人文学（とりわけ哲学）が現代の抱える諸問題に対してなし得る応答とは何なのかについて思索をめぐらすことともなった。この点は哲学的営為の根本的特質に相応しい研究内容と態度であったと思われる。しかしその反面、プロジェクト研究というあり方に避けがたいことであるが、この期間の研究は眼前の研究目的にかなった成果を提示したにとどまり、哲学的思索が持つべきもう一方の特質である徹

底性と根源性からは乖離した成果となってしまったことは反省すべき点である。哲学が持つべき上記二つの特質をより調和的なものとし、哲学の存在意義をいっそう明瞭なものとする必要があると思われる。

小林道夫（西洋近世哲学史専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『デカルト入門』、ちくま新書、筑摩書房、2006年4月、219 pp

【論文】

1. 「野田又夫先生とカント」、『京都学派の伝統とカント』（カント没後200周年記念学会公開講演・シンポジウム、Canone[規範性と多元性の歴史的諸相]、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」）、2005年3月、pp. 72-83
2. “La philosophie de Descartes et son intuitionisme”, *Philosophie des mathématiques et théorie de la connaissance-L’Oeuvre de Jules Vuillemin*, éd. par R. Rashed et P. Pellegrin (Albert Blanchard, Paris), novembre, 2005, pp. 311-328.
3. 「ライプニッツにおける数理と自然の概念と形而上学」、『哲学研究』第581号（京都哲学会）、2006年4月、pp. 1-28
4. 「ライプニッツにおける数理と自然の概念と形而上学（下）」、『哲学研究』第582号（京都哲学会）、2006年10月、pp. 1-24

【学術講演】

1. 「野田又夫先生とカント」、カント没後200周年記念学会公開講演・シンポジウム「京都学派の伝統とカント」（日本カント協会・京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム共催）、京都大学大学院文学研究科、2004年11月
2. 「デカルトとライプニッツにおける数理と自然の概念」、京都哲学会、京都大学大学院文学研究科、2005年11月

II. 自己評価

2004年から2006年にかけては、第一に、カント没後200周年記念学会公開講演・シンポジウム「京都学派の伝統とカント」における発表「野田又夫先生とカント」のために、野田又夫のカント研究全般をカント自身の体系と平行して辿り、その解釈の特質を明らかにした。第二に、ライプニッツの数理思想と自然概念を取りあげ、それらと彼の形而上学との関係の解明を行った。そこで、まずライプニッツの数理思想とりわけ微積分法の形成過程を追求し、その形成と展開において「連続律」の形而上学が大きな役割を果たしていることを明らかにした。ついで、ライプニッツの自然哲学の研究に進み、ここでは「連続律」とともに「動力学」の概念が中心的役割を担っていることを論究し、最後に、ライプニッツの宇宙観と「モノドロジー」の形而上学との関係を明らかにした。第三に、これまで特に行ってきた、デカルト哲学の体系すなわちその形而上学・数学・自然学・道徳論についての研究をさらに推進するとともに、デ

カルトの生涯と思想形成を改めて追求し、それらの成果を、一般読者にも関心を持ってもらうべく『デカルト入門』としてまとめた。

福谷 茂（西洋近世哲学史専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「形而上学としてのカント哲学—前批判期から『遺稿』へ」、日本哲学会『哲学』第55号、2004年4月、pp. 56-73
2. 「カントにおける神の問題」、関西哲学会『アルケー』第12号、2004年6月、pp. 111-124
3. 「カントの《Opus postumum》の哲学史的位罫について」、京都哲学会『哲学研究』第578号、2004年10月、pp. 121-145

II. 自己評価

論文1は日本哲学会での共同討議「カント 哲学の核心—没後 200 年を記念して」に際して提出されたもので、カント哲学の全体を形而上学への歩みとして捉えうることを示したものである。私のカント 解釈の到達点を手短かに述べることを目指したが、反響としては、特にカントの『遺稿 Opus postumum』を論じた部分に質問と議論が集中した。これに反し、『遺稿』が『純粹理性批判』と直結しているという論点に関しては十分に理解されな かった憾みがある。この点は最も重要であると考えているので、より徹底した論考を期している。次に論文2では同じ問題意識に基づき、カントにおける神の問題を『純粹理性批判』において考えることで、『遺稿』との連続性を明らかにする作業を行った。また、論文3では、『遺稿』に関する最近の研究状況を紹介しつつ、いかなる意味でカントが形而上学の系譜に属しえたのかを考えた。カントとスピノザとの関係付けに関して反響が多かったので、スピノザの受容史を踏まえて再論したいと考えている。

藤田正勝（日本哲学史専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. “Questions posed by Nishida’s Philosophy”, *Synthesis philosophica*, Vol. 37 (Zagreb), 2004/7, pp. 7-17.
2. “Logos and Pathos: Miki Kiyoshi’s Logic of the Imagination”, *Synthesis philosophica*, Vol. 37 (Zagreb), 2004/7, pp. 117-128.
3. 「「近代」成立の現場—福沢諭吉の「自由」概念を中心に—」、西村清和・高橋文博編『近代日本の成立—西洋経験と伝統』（ナカニシヤ書店）、2005年1月、pp 210-238
4. 「西田幾多郎の哲学と日本語 (Nishida Kitaro’s Philosophy and Japanese Language) 」, *Bulletin of the Association for Japanese Literary Studies (AJLS)*, Vol. 5, 2005/2,

pp. 459-469.

5. “Kiyozawa Manshi and Nishida Kitaro”, *The Eastern Buddhist, New Series*, Vol. 35, No. 1 & 2, 2005/3, pp. 42-56.
6. 「哲学と詩歌をつなぐもの—西田幾多郎の「悲哀」をめぐる—」、『点から線へ』第 46 号、2005 年 3 月、pp. 2-18.
7. “Pitanjya postavljena Nishidinom filozofijom”, *Filozofska Istrazivanja*, Vol. 96 (Zagreb), 2005/4, pp. 5-14.
8. “Logos i pathos, Logika imaginacije Mikija Kiyoshija”, *Filozofska Istrazivanja*, Vol. 96 (Zagreb), 2005/4, pp. 101-111.
9. 「異文化間の対話（翻訳）の可能性をめぐる—」、藤田正勝／B・デービス編『世界の中の日本の哲学』（昭和堂）、2005 年 6 月、pp. 101-119
10. 「清沢満之における学問と信仰」、『名古屋教学』第 14 号、2005 年 6 月、pp. 149-170
11. 「哲学史とは何か—明治期における哲学史受容の歴史に触れて—」、『明治哲学與東亜近代哲学的転型・国際学術会議論文集』（中華日本哲学会）、2005 年 8 月、pp. 30-38
12. 「哲学史は什麼？—論明治時代哲学史輸入の歴史—」、『明治哲学與東亜近代哲学的転型・国際学術会議論文集』（中華日本哲学会）、2005 年 8 月、pp. 39-45
13. 「西田哲学と歴史・国家の問題」、『日本哲学史研究』第 2 号、2005 年 9 月、pp. 73-111
14. 「シェリングとヘーゲル」、『ドイツ観念論を学ぶ人のために』（世界思想社）、2005 年 12 月、pp. 40-50
15. 「後期西田の思惟—「行為的直観」をめぐる—」、『日本の哲学』第 6 号、2005 年 12 月、pp. 112-128
16. 「ヘーゲルとシェリング」、『ヘーゲル哲学研究』第 11 号、2005 年 12 月、pp. 16-27
17. 「近代日本哲学のポテンシャル—「哲学」の意味をめぐる—」、『哲学』第 57 号、2006 年 4 月、pp. 4-17
18. 「哲学と世界認識—西田幾多郎における「東洋」と「世界」—」、『岩波講座「帝国」日本の学知』第 8 巻「空間形成と世界認識」（岩波書店）、2006 年 10 月、pp. 77-110
19. 「二一世紀の哲学」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学(下)』（京都大学出版会）、2007 年 3 月、pp. 390-404
20. 「対話とは何か—「聴くこと」と「語ること」—」、片柳栄一編『ディアロゴス』（晃洋書房）、2007 年 3 月、pp. 159-174

II. 自己評価

この 3 年間で次の点に力点を置いて研究する計画を立てた。第一の点は、COE の拠点形成のための研究の趣旨に沿って、グローバル化する現代において、人文学が、また哲学がどのような役割を果たしうるかを明らかにするという点である。次に、科学研究補助金による共同研究を組織し、第 1 次世界大戦以後に、日本とヨーロッパの哲学者のあいだでどのような思想的な交流があり、どのような仕方でヨーロッパの哲学が受容されたか、またそれを踏まえて、日本の哲学者によりどのような仕方で独自の思想形成が行われたのかを明らかにすることである。さらに、日本哲学史研究室を中心に、国際的な規模での日本哲学研究のネットワーク化を図り、世界の哲学の議論の場で、日本の哲学がどのような貢献を果たしうるか、その可能性を

探ることである。以上の三つの点に関して、当初計画した通りの成果が挙げられたと考えている。

水谷雅彦（倫理学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『岩波 応用倫理学講義<3> 「情報」』（編著）、岩波書店

【論文】

1. 「情報としての遺伝子」、奥野卓司他編『市民のための「遺伝子問題」入門』、岩波書店、2004年
2. Mizutani, M., Moor, J. & J. Dorsey, “The Internet and Japanese Conception of Privacy”, *Ethics and Information Technology*, vol.6, No.2, 2004, pp.121-128.
3. 「コミュニケーションと倫理学・上」、京都哲学会『哲学研究』第579号、2005年、pp.29-48
4. 「コミュニケーションと倫理学・下」、京都哲学会『哲学研究』第580号、2005年、pp.109-129
5. 「倫理学にとって現実とはなにか」、関西哲学会『アルケー』第15号、2007年3月

【学術講演】

1. 「インターネット時代の情報倫理学」、高崎経済大学経済学会招待講演、2004年7月14日
2. 「コミュニケーションと倫理学」、京都哲学会公開講演会、2004年11月3日
3. 「コミュニケーション的自由の条件—科学技術的議論における「素人」の位置」、ハーバースマス京都賞受賞記念シンポジウム「自由と決定論—自由意志は幻想か?」講演、2004年11月12日
4. 「「こころを伝え広げる」ということに関して哲学は何を言えるか」、京都文化会議 2005 ワークショップ「こころを伝えひろげる」、2005年10月30日
5. 「人権問題としてのプライバシー」、京都教育大学人権教育講演会、2005年12月13日
6. 「倫理学にとって現実とはなにか」、関西哲学会シンポジウム「倫理と現実」講演、2006年10月21日
7. 「医療情報とプライバシー」、市立長浜病院人権研修講演会、2006年11月13日

II. 自己評価

2004年度は前年度まで継続された情報倫理学に関するプロジェクトの事後処理を兼ねた研究が遂行されるとともに、プロジェクト期間中は中断していたコミュニケーション理論をめぐる研究を再開した。前者に関しては、ダートマス大学のムーア教授との共同研究を情報倫理学に関する国際誌に投稿し掲載された。後者のまづもつての成果は、2005年度に論文「コミュニケーションと倫理学」として公刊された。これ以降の課題は、同論文で展開された「会話の哲学」をいかに規範倫理学に接続するかということであるが、2006年度論文において、それに着手した。

応用倫理学的研究としては、2006年度より「健康の倫理学」に関する共同研究を開始しており、科学研究費（申請中）による「健康概念の哲学的倫理学的総合研究」として2007年以降も

継続して比較的大規模の研究を行う予定である。

氣多雅子（宗教学専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「宗教における古さと新しさと他性」、『宗教学研究室紀要』vol.1（京都大学大学院文学研究科宗教学専修）、2004年6月、pp. 2-12
2. 「日本仏教者と平和思想」、Journal of the Institute of Asian Area Studies (Pusan University of Foreign Studies), 2004年12月、pp. 19-38.
3. 「京都学派と宗教哲学—西田幾多郎から西谷啓治へ—」、『哲学研究』第581号（京都哲学会）、2006年4月、pp. 29-53
4. 「事実と事実性—ハイデッガーとアレントを中心に—」、『京都大学文学部研究紀要』第45号、2006年4月、pp. 1-31
5. 「日本仏教者と平和問題」（論文2「日本仏教者と平和思想」を加筆修正したもの）、芦名定道編『比較宗教学への招待—東アジアの視点から—』第八章（晃洋書房）、2006年4月、pp. 170-193
6. 「日本近・現代における悪の理解—西谷啓治を中心として—」、『倫理学年報』第56集（日本倫理学会）、2007年3月
7. 「空と根源的構想力—西谷啓治「空と即」をめぐって—」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学(下)』（京都大学文学部創立百周年記念論集）第一三章（京都大学出版会）、2007年3月、pp. 333-364
8. 「対話的探求というロゴス性の創出」、片柳榮一編『ディアロゴス—手探りの中の対話—』第IV部第四章（晃洋書房）、2007年3月、pp. 300-322
9. 「宗教の多元的状況と仏教」、芦名定道編『多元的世界における寛容と公共性』第1部第1章（晃洋書房）、2007年3月、pp. 2-18

【学術講演】

1. 「「表明すること」と「秘匿すること」」、第58回公共哲学京都フォーラム：『おのずから』と『みずから』のあわい—日本思想の動性、リーガロイヤルホテル京都、2005年2月20日
2. 「西谷啓治の空の哲学の展開」（パネルのコーディネイトとコメント）、第19回国際宗教学宗教史会議世界大会(IAHR)、高輪プリンスホテル、2005年3月27日
3. 「総括2：宗教間対話と対話のプラクシス」、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム：グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成「新たな対話的探究の論理の構築」部会第2回研究会、京都大学、2005年6月30日
4. 「事実と事実性—ハイデッガーとアレントを中心に—」、土井道子記念京都哲学基金主催シンポジウム「事実と事実性」、京都ガーデンパレス、2005年9月6日
5. 「記憶と事実と公共性」、日本宗教学会第64回大会、関西大学、2005年9月10日
6. 「宗教の多元的状況と仏教」、国際セミナー「宗教の多元的状況と仏教」、釜山グランドホテル（韓国）、2005年11月24日

7. 「京都学派と宗教哲学」、京都学派問題研究会、東京経済大学、2006年1月14日
8. 「こころの未来フォーラム「未来を生きるこころに向けて：私たちの課題」基調報告」、京都大学こころの未来フォーラム実行委員会、京都大学、2006年3月
9. 「東西宗教学会の特質とその意義—宗教哲学の視点から—」、東西宗教交流学会第25回学術大会、南山宗教文化研究所、2006年7月27日
10. 「宗教は環境問題とどのように切り結ぶのか」、宗教倫理学会第6回研究会、キャンパスプラザ京都、2006年9月22日
11. 「日本近・現代における悪の理解—西谷啓治を中心として—」、日本倫理学会第57回大会、東京大学、2006年10月15日
12. 「宗教の事柄について自分はどこから語るか」、講演会「対話をめぐる繋がりや裂け目—宗教性・共同性・歴史性の観点から—」、京都大学大学院教育学研究科 院生による研究開発コロキウム主催、芝蘭会館、2006年11月17日

II. 自己評価

平成16～18年度の研究内容は大きく次の三つに分かれる。(1) ハイデッガーや西谷啓治の思想研究を手掛りとして、現代世界における宗教的境位の可能性を探るという課題に関するもの、(2) 対話(特に宗教間対話)や環境破壊の問題を中心として、現代社会の宗教的状況が内包する諸問題に関して宗教哲学の立場から考察するもの、(3) その他、である。(1)については論文4点、研究発表6点、(2)については論文5点、研究発表6点である。(3)については業績表には現れていないが、Martin Heidegger, *Phänomenologie des religiösen Lebens* (Gesamtausgabe Bd. 60) の翻訳を行ってきた。

(2) は私の元来の研究テーマであったが、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」と密接に関わるものであり、COEの二つの部会に参加したことによって、研究が大きく進展した。(1)についてもそれなりの成果を挙げることができた。しかし(3)については非常に時間のかかる作業であり、いまだ完成に至っていないため、19年度以降の重要課題としたい。

杉村靖彦(宗教学専修助教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 《Le témoignage comme "passage originaire" chez Jean Nabert》, Ph. Capelle (ed.), *Le souci du passage* (Paris, Cerf), 2004, pp. 382-393.
2. 「哲学者の神」、『岩波講座宗教4 根源へ—思索の冒険』(岩波書店)、pp. 133-160
3. [辞典項目] 《Histoire/Historicité》; 《Volonté》, in: *Encyclopaedia Universalis, Notionnaires* vol.1 : Notions (Paris, Editions Encyclopaedia Universalis), 2004, pp. 478-480 ; pp. 1071-1072.
4. 「人間の「手前」へ—特異性の問いの行方」、『アルケー』第15号(関西哲学会)、2005、pp. 15-29

5. 「無力における責任—「人権」の手前へ」、『哲学』第 56 号（日本哲学会）、2005、pp. 82-97
6. 「責任原理と「アウシュヴィッツ以降の神」」、『宗教学研究紀要』第 2 号（京都大学文学研究科宗教学専修編）、2005、pp. 45-49
7. 《 Pour une philosophie du témoignage: Ricoeur et Heidegger autour de l'idée d' "attestation" 》, *Etudes Théologiques et Religieuses*, Tome 80, 2005, pp. 483-498.
8. 「リクールの哲学史的位置づけ—「フランス反省哲学」からの由来とその展開」、渡邊二郎 監修・哲学史研究会編『現代の哲学—西洋哲学史二千六百年の視野より』（昭和堂）、2005、pp. 267-309
9. 「「現代の宗教哲学」とフランスの kantisme」、『京都学派の伝統とカント』（カント没後 200 周年記念学会公開講演・シンポジウム、CANONE 編）、2006、pp. 36-53
10. 「ナベールの自我はいかに証しされるか—証言の解釈学に向かって」、『宗教学研究紀要』第 4 号（京都大学文学研究科宗教学専修編）、2006、pp. 2-17
11. 《 Du mal au pardon - derniers débats entre Ricoeur et Derrida 》, *Rue Descartes, Hors série : L' homme capable*, Autour de Paul Ricoeur (Collège International de Philosophie), 2006, pp. 131-139.
12. 《 Dieu ambigu : vers une « philosophie de la religion » aujourd' hui 》, *Humaniora Kiotoensia. On the Centenary of Kyoto Humanities* (Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006, pp. 79-100.
13. 「悪・赦し・贈与—リクールとデリダの最後の論争」、『宗教学会報』第 15 号（大谷大学宗教学会）、2006、pp. 33-65
14. 「生の自己証言からの対話—ヨナスとアンリ」、片柳栄一編『ディアロゴス—現代における対話的探究の諸可能性』、晃洋書房、2007、pp. 135-155

【学術講演】

1. 《 Pour une philosophie du témoignage: Ricoeur et Heidegger autour de l'idée d' "attestation" 》, パリプロテスタント神学部 Fonds Paul Ricoeur, 2004 年 1 月
2. 「人間の「手前」—特異性の問いの行方」、関西哲学会 シンポジウム「人間は特異な存在か」、2004 年 10 月
3. 「「現代の宗教哲学」とフランスの kantisme」、日本カント協会 カント没後 200 周年記念 公開講演、2004 年 11 月
4. 「科学技術時代における哲学と宗教—ハンス・ヨナス『責任原理』再考」、第 19 回国際宗教学宗教学史会議世界大会、共同パネル主宰および発表、2005 年 3 月
5. 「無力における責任—「人権」の手前へ」、日本哲学会 共同討議「責任と人権」、2005 年 5 月
6. « L' auto-attestation du moi nabertien. Vers une herméneutique du témoignage », 国際会議「ジャン・ナベールとともに倫理を考える (Penser l' éthique avec Jean Nabert)」、パリカトリック学院哲学部、2005 年 9 月
7. « Du mal au pardon - derniers débats entre Ricoeur et Derrida », 国際会議「為しうる人間—ポール・リクールをめぐって (L' homme capable - Autour de Paul Ricoeur)」、パリ国際哲学コレージュ、2005 年 11 月
8. « L' être humain comme témoin du « néant absolu » d' après la philosophie de TANABE

Hajime 》、国際会議「人間であることー世界の諸哲学における人間学 (Esse umanità. L' anthropologia nelle filosofie delle mondo)」、イタリア・マチェラータ大学、2006年5月

9. 「悪・赦し・贈与ーリクールとデリダの最後の論争」、大谷大学・大拙忌記念公開講演会、2006年7月
10. 「透明化する媒介ー長谷先生の思索と現代フランス哲学」、京都宗教哲学学会シンポジウム「長谷正當先生の思想」、2006年12月

II. 自己評価

この三年間の研究で目標としてきたのは、(1) 現代フランス哲学 (リクール、ナベール、レヴィナス、アンリ、デリダ等々) に関してこれまで行ってきた研究を「証言」というテーマを軸にまとめ上げること、(2) それを通して、「現代の宗教哲学」と呼ぶにふさわしい思索のあり方を描き出すこと、であった。また、(3) この作業を西洋哲学の「輸入」という一方向的なものに終わらせず、フランスを始め海外へと発信し続け、その反響を取り入れて研究を進展させていく、ということを実感的に心掛けてきた。上に掲げた業績表からも分かるように、以上の三点については、ほぼ目標通りに研究を遂行することができたと考えている。ただ、題材と主題の両面で、論及する事柄の範囲をいささか広げすぎた感もあり、今後は集約の作業が必要である。今後二年を目処にしてその作業を行い、一冊の著作にまとめることを計画している。

片柳榮一 (キリスト教学専修教授)

I. 研究業績

【論文】

1. 「「存在」と「存在の彼方」」、『哲学は何を問うべきか』武市明弘他篇 (晃洋書房)、2005年10月、pp. 3-21
2. 「アウグスティヌスの「知ある無知 docta ignorantia」」、『基督教学研究』第25号、2005年12月、pp. 1-19
3. 「アウグスティヌスと西田幾多郎」、2006年

【学術講演】

1. 「アウグスティヌスとカント」、カント協会、2004年
2. 「アウグスティヌスと西田幾多郎」、西田田辺記念会、京大文学部、2006年6月3日

II. 自己評価

これまでアウグスティヌスの思想、殊に彼の「神の似像」理解における人間存在論的分析を中心に研究してきたが、現在アウグスティヌスのこうした思想とその後の思想との比較を通して、彼の思想の持つ現代的意義を探っている。平成16年度の学術講演「アウグスティヌスとカント」はそのような観点から、カントの超越論的統覚の問題をデカルトの cogito、そしてアウグスティヌスの cogito と比較し、カントの厳しい批判にもかかわらず、カントがアウグスティヌスと問題意識を共有していたことを明らかにした。「アウグスティヌスの「知ある無知」

はニコラス・クザーヌスとの比較、「アウグスティヌスと西田幾多郎」は西田幾多郎との比較を通して、彼らの思想も直接間接に、アウグスティヌスの人間存在論的思惟の影響のもとにあったことを示した。こうした研究を通して、アウグスティヌスという千五百年前の北アフリカ人の思想が近現代の我々の問題の先を見据えていたことを明らかにしえたと考えている。

芦名定道 (キリスト教学専修助教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『科学時代を生きる宗教—過去と現在、そして未来へ』 (共編著)、北樹出版、2004年3月
2. 『比較宗教学への招待—東アジアの視点から』 (共編書)、晃洋書房、2006年4月
3. 『自然神学再考—近代世界とキリスト教』、晃洋書房、2007年2月
4. 『多元的世界における寛容と公共性』 (共編書)、晃洋書房、2007年3月

【論文】

1. 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、*Journal of the Institute of Asian Area Studies* (釜山外国語大学・アジア地域研究所)、2004年12月、pp. 1-18
2. 「キリスト教思想と形而上学の問題」、『基督教学研究』 (京都大学基督教学会) 第24号、2004年12月、pp. 1-23
3. 「アジア・キリスト教研究に向けて (1) —その視点と方法—」、『アジア・キリスト教・多元性』 (現代キリスト教思想研究会) 第3号、2005年3月、pp. 71-88
4. 「ティリッヒとフィヒテ」、『ティリッヒ研究』 (現代キリスト教思想研究会) 第9号、2005年3月、pp. 45-62
5. 「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」、『基督教学研究』 (京都大学基督教学会) 第25号、2005年12月、pp. 21-41
6. 「ティリッヒとカント—近代キリスト教思想の文脈から—」、『ティリッヒ研究』 (現代キリスト教思想研究会) 第10号、2006年3月、pp. 1-16
7. 「アジア・キリスト教研究に向けて (2) —方法と適用—」、『アジア・キリスト教・多元性』 (現代キリスト教思想研究会) 第4号、2006年3月、pp. 43-62
8. 「キリスト教と進化論」、金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・いのち—新しい対話の道を求めて』 (新教出版社)、2006年7月、pp. 102-123
9. 「東アジア世界における宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—』 (下) 『共生への問』 (京都大学学術出版会)、2007年3月、pp. 279-301
10. 「ティリッヒと宗教社会主義」、『ティリッヒ研究』 (現代キリスト教思想研究会) 第11号、2007年3月、pp. 1-19
11. 「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、『アジア・キリスト教・多元性』 (現代キリスト教思想研究会) 第5号、2007年3月、pp. 1-21

【学術講演】

1. 「日本の宗教状況とキリスト教—過去・現在・未来—」、西部連合長老会・改革長老教会協

議会関西地区会講演、日本キリスト教団小阪教会、2004年8月23日

2. 「組織神学の可能性ー＜宗教と科学＞関係論の観点からー」、日本組織神学会、日本バプテ
スト教会 目白ヶ丘教会、2004年10月7日
3. 「キリスト教と科学ー新しい関係を求めてー」、プール学院大学・後期アセンブリー・講演、
2004年10月12日
4. 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、釜山外国語大学・国際シンポジウム「東アジア
における宗教間対話の意義ー日韓キリスト教の役割ー」、2004年10月22日(21世紀COE
プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」における「多元的世界における
寛容性についての研究」研究会と釜山外国語大学アジア地域研究所の共催による、コーディネ
ーター：金文吉)
5. 「科学と宗教の対話ーその現状と課題ー」、南山大学宗教文化研究所・懇話会、2004年11
月11日
6. 「現代を生きるキリストの顔ーキリスト教と環境論ー」、真生会館・学習センター(土曜日
午後のシリーズ講座)、2005年1月24日
7. 「ティリッヒとカントー近代キリスト教思想の文脈からー」、日本宗教学会第64回学術大会、
関西大学、2005年9月10日
8. 「平和の神学は可能か?」、日本基督教学会第53回学術大会(関西学院大学)・シンポジウ
ム「平和の実現ー21世紀神学の課題ー」の発題、2005年9月24日
9. 「ティリッヒと宗教社会主義」、日本宗教学会第65回学術大会、東北大学、2006年9月18
日
10. 「宗教的多元性の諸問題ー東アジアのキリスト教の比較研究ー」、COE研究会・国際シン
ポジウム:「多元的世界における宗教的寛容と公共性ー東アジアの視点からー」パネル提題
発表、京都大学文学部、2006年11月18日
11. 「日韓キリスト教神学と土着化ー民族をめぐって」、日韓神学フォーラム2006「民族主
義」を超えてー日韓の和解のためのアジア神学の模索」、キャンパスプラザ京都、2006年11
月25日
12. 「宗教的多元性とキリスト教ー東アジアを中心にー」、京都大学21世紀COEプログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」シンポジウム「グローバル化時代の人文学
ー対話と寛容の知を求めてー」における基調報告、京都大学文学部、2006年12月2日

II. 自己評価

平成16-18年度の研究は、京都大学21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人
文学の拠点形成」などとの関わりにおける「宗教的多元性・東アジアのキリスト教・公共性」、
学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて行われた「宗教と科学の関係論」、そして「ティ
リッヒを中心とした近代キリスト教思想」という三つの研究テーマにおいて進められ、その成
果はそれぞれ著書、論文、学術講演として公にされた。平成16-18年度は、一定の期間をかけ
て集中的に行ってきた個人研究の集大成の時期にあっており、もちろんさらに補足すべき点、
不備な点は散見されるものの、個人研究としてはかなりの水準の研究成果を挙げることで
きた。特に、COEプログラムとの関連を含めて、国際的な共同研究を推進する中で、学会レベ
ルや研究会レベルにおける研究者のネットワークを構築することができた点は、今後のさら

る研究のレベルアップの基盤として評価できる。

中村俊春（美学美術史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『ルーベンス 絵画と政治の間で』、三元社、2006年8月

【論文】

1. 「ルーベンス工房と模写のマーケティング」、『西洋美術研究』11、2004年10月、pp. 144-166
(解説と注釈を担当。翻訳：平川佳世)
2. “Rembrandt’s Blinding of Samson: A Work for Artistic Emulation with Rubens?”, *Rembrandt and Dutch History Painting in the 17th Century*, ed. Akira Kofuku (The National Museum of Western Art, Tokyo), October 2004, pp. 123-138.
3. 「ヴァン・ダイクとチャールズ1世の宮廷 —イギリス時代を概観して—」、『西洋美術研究』、2006年4月、pp. 47-67
4. 「1603年のルーベンスのスペイン行と2点の絵画」、小佐野重利編『旅を糧とする芸術家』(三元社)、2006年12月、pp. 121-164
5. 「近世ヨーロッパにおける平和と戦争のイメージ —80年戦争の時代のネーデルラントを中心に—」、『グローバル化時代の人文学』第2部・第8章、2007年3月、pp. 197-224

【学術講演】

1. 「失われた古代絵画を再生させる —ルーベンスとティツィアーノ—」、京都大学春秋講義、京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール、2004年10月12日
2. 「画家たちの競演 —ルーベンスの時代のアントウェルペンの絵画—」、ベルギー王立美術館展記念講演会、国立西洋美術館講堂、2006年11月4日

II. 自己評価

ルーベンス、ならびにレンブラントを中心に17世紀のフランドルおよびオランダ絵画に関する研究を進めた。ルーベンスについては、外交の分野における彼の活動を視野に入れながら、主として1620年代末以降の重要な作品を総合的に論じた研究書を刊行した。これにより、ルーベンス芸術の特質を明らかにすることができたと考えている。レンブラントに関しては、国立西洋美術館で開催された国際シンポジウムの発表に基づいて、レンブラント初期の代表作品に関する論文を公刊した。この論文では、ルーベンスとの関連を指摘することによって、新しい作品解釈を提示することができた。また、ヴァン・ダイクの研究にも着手し、この画家のイギリス時代の活動を検討した論文を発表した。ヴァン・ダイクは、画家としての活動をアントウェルペンのルーベンス工房において開始している。今後は、ヴァン・ダイクを始めとして、スネイデルス、ヤン・ブリューゲルといった画家たちとルーベンスとの関係を探ることにより、その工房の実態の解明を試みる予定である。

根立研介（美学美術史学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第3巻（水野敬三郎ほかとの編著）、中央公論美術出版、2005年3月、解説冊218pp.、図版冊237pp.
2. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第4巻（水野敬三郎ほかとの編著）、中央公論美術出版、2006年2月、解説冊238pp.、図版冊232pp.
3. 『安祥寺の研究Ⅱ—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」成果報告書、第14研究会「王権とモニュメント」）（編著）、京都大学大学院文学研究科、2006年3月、68pp.
4. 『日本中世の仏師と社会—運慶と慶派・七条仏師を中心に—』、塙書房、2006年5月、447pp.
5. 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』第5巻（水野敬三郎ほかとの編著）、中央公論美術出版、2007年2月、解説冊263pp. 図版冊188pp.

【論文】

1. 「東福寺の彫刻—南北朝・室町時代の遺品を中心に—」、『MUSEUM』591号、2004年8月、pp. 49-77
2. 「十世紀前半頃の仏師動向」、『京都美学美術史学』4号、2005年3月、pp. 27-58
3. 「遼代出土木彫真容偶像と日本の肖像彫刻—立石寺木造頭部の問題を中心として—」、『遼文化・慶陵一帯調査報告書』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」、京都大学大学院文学研究科）、2005年3月、pp. 177-192
4. 「御衣木加持をめぐる小論」、『平成13～16年度科学研究費補助金 基盤研究研究(A)(1) 研究代表者 京都大学大学院文学研究科教授 岩城見一 研究成果報告書 四大（地・水・火・風）の感性論—思想・アート・自然科学の関わりについての基盤研究—』、2005年5月、pp. 157-166
5. 「南都再興造仏における慶派仏師の「中国」美術の受容をめぐる」、『講座日本美術史』第2巻（東京大学出版会）、2005年5月、pp. 67-99
6. 「院政期の僧綱仏師をめぐる仏像制作の場—仏師賢円を中心にして—」、『講座日本美術史』第4巻（東京大学出版会）、2005年9月、pp. 227-256
7. 「歴史教科書と美術工芸品の図版をめぐる」、『美術フォーラム21』12号、2005年9月、pp. 141-146
8. 「「頂相彫刻」再考—肖似性と理想化の問題を中心にして—」、『國華』1321号、2005年11月、pp. 3-15
9. 「仏師の世界」、『列島の古代史5 専門技能と技術』（岩波書店）、2006年2月、pp. 129-164
10. 「日本美術史研究における「中国」」、『京都と北京—日中を結ぶ知の架橋』（角川学術出版）、2006年12月、pp. 151-169
11. 「安祥寺の仏教彫刻をめぐる諸問題—創建期彫像の国際性と新奇性の問題を中心にして—」、『皇太后の山寺—山科安祥寺創建の背景をさぐる—』（柳原出版）、2007年3月、pp. 263-292

【学術講演】

1. 「日本の木彫像の造像技法—特に割刳造りと寄木造りの問題を中心に—」、京大生生存圏研究所「木の文化と科学—自然科学と人文科学の接点を探る—」、2005年2月14日
2. 「安祥寺の仏教彫刻—新発見の下寺仏像を中心に—」、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム第 14 研究会「王権とモニュメント」シンポジウム『皇太后の山寺—山科安祥寺創建の背景をさぐる—』、2005年11月20日
3. 「彫刻の修理と保存」、平成 18 年度京都国立博物館夏期講座、2006年7月26日
4. 「和様彫刻の成立と対外美術の受容」、京都哲学会公開講演会、2006年11月4日
5. 「丹波の仏像」、大阪大谷大学文化財学科公開講座「大和・山城周辺国の仏像」、2006年11月25日

II. 自己評価

この三カ年間は、COE プログラムに参加していることもあって、この関連の論文等の発表が多くなっており（「著書」3、「論文」3, 10, 11、「学術講演」2）、また依頼を受けて執筆した叢書類に掲載された論文（「論文」5, 6, 9）の数も比較的多くなっている。こうした関係もあって、学会誌等の論文（「論文」1, 2, 7, 8）が多少減少したところがあるが、論文の掲載数は、専門の日本美術史の分野では、かなり数が多い方と思われる。また、論文ではないが、日本彫刻史の基本資料に関するデータ公表を目指す『日本彫刻史基礎資料集 鎌倉時代 造像銘記篇』（「著書」1, 2, 5）の出版に編纂者の一人として携わり、これを毎年刊行している。

なお、研究テーマの一つである仏師研究については、10年以上にわたって執筆した論考を取りまとめ、改稿及び新稿を加えて著書（「著書」4）の出版を昨年5月に行われた。これについては、一定の評価が与えられ、日本・東洋美術の優れた著作等を対象とする國華賞が昨年10月25日に授与されている。

吉岡洋（美学美術史学専修教授）

I. 研究業績

【編著書】

1. 『光速スローネス —京都ビエンナーレ 2003—』、青雲社、2005年4月

【論文】

1. 「流体生命論へ向けて」、日本記号学会編『記号学叢書セミオトポス第一巻〈流体生命論〉』、2005年4月
2. 「ヘルシンキ・ヒューマン・ミュージアム」、『美術フォーラム』（醍醐書房）、2005年
3. 「大学の溶解、文化の自殺」、日本記号学会編『記号学叢書セミオトポス第三巻〈溶解する[大学]〉』、2006年5月
4. 「応用芸術学としての美術企画 —「岐阜おおがきビエンナーレ 2006」について—」、『〈いま〉を読む—消費至上主義の帰趨』川田都樹子編（人文書院）、2007年2月

【学術講演】

1. 「To Take Play Seriously」、Haute École d' art appliqué, Genève (ジュネーヴ応用美術大学)、2004年4月23日
2. 「Japan in Media Arts and Subculture」、Kunstuniversität, Linz (リンツ美術大学)、2004年9月4日
3. 「On Kyoto Biennale 2003」、Kunsthochschule für Medien, Cologne (ケルンメディア芸術大学)、2004年11月17日
4. 「京都ビエンナーレ2003をめぐって」、ソウル歴史博物館、2004年12月13日
5. 「Cool Interaction」、Haus der Kulturen der Welt, Berlin (ベルリン世界文化会館)、2005年2月8日、Goldsmith College, London University (ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ)、2月12日
6. 「Art and its social context」、Cankarjev dom, Ljubljana (リュブリャナ市文化ホール)、2005年4月14日、Akademie der bildenden Künste, Wien (ウィーン造形芸術大学)、4月18日
7. 「ヴァーチャルなもの、不気味なもの」、日本美学会全国大会シンポジウム、慶応義塾大学、2005年10月9日
8. 「日本におけるメディアアート教育」、韓国・議政府市国際デジタルアートフェスティバル、2005年10月22日
9. 「Art and its social context in Japan」、Shristi school of Art and Technolgy, Bangalore/India (インド・バンガロール市シュリスティ芸術工科大学)、2006年3月13日
10. 「Toward Ogaki Biennale 2006」、Art Gallery at Ateneo de Manila University (マニラ・アテネオ大学美術ギャラリー)、2006年4月7日、LASALLE-SIA College of the Arts, Singapore (シンガポール、ラサール・シア美術大学)、2006年4月12日
11. 「岐阜おおがきビエンナーレ2006のテーマについて」、岐阜県大垣市・ソフトピアジャパンセミナーホール、2006年10月7日

II. 自己評価

平成16～18年度の研究活動としては、まず15年10月に総合ディレクターとして企画にあたった、京都芸術センター主催の総合芸術祭「京都ビエンナーレ2003」に基づく出版物の執筆・編集と、主として国外において行った当ビエンナーレに関連する講演をはじめ、現代美術、メディアアート、大学教育に関する論文執筆、そして2006年10月にディレクターとして企画した「岐阜おおがきビエンナーレ2006」にかかわる講演・執筆が中心となった。美術展企画という実践とそれにかんする出版物編集、国外における学術講演、そして平成18年9月まで勤務していた情報科学芸術大学院大学を拠点とする、メディアアート、デジタルアートに関係する仕事の面では、きわめて多忙な3年間であったといえるが、その反面、そうした社会的実践についての反省的考察や理論的研究のための時間が不足していたことは否定できず、今後はそうした面にも力を入れてゆきたい。

〔歴史文化学専攻〕

藤井讓治（日本史学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『時慶記』第2巻（共編）、臨川書店、2005年3月
2. 『江戸幕府領知判物・領知朱印状の基礎的研究』（科研報告書）、2005年3月
3. 『清水山城館現況調査報告書Ⅱ―清水山城館周辺古文書調査―』（共編）、2006年3月
4. 『北野天満宮史料』宮仕記録続四（共編）、北野天満宮、2007年2月

【論文】

1. 「徳川将軍領知朱印状の古文書学的位置」、『古文書研究』59、2004年9月
2. 「一六・一七世紀の生産・技術革命」、『講座日本史』5（東大出版）、2004年10月
3. 「秀忠親政期の領知朱印状」、『京都大学文学部研究紀要』44、2005年3月
4. 「17世紀京都の武士」、『平安京―京都の都市図・都市構造に関する比較統合研究とデジタルデータベースの構築』（金田章裕科研）、2005年3月
5. 「回顧と展望 近世総説」、『史学雑誌』114-5、2005年5月
6. 「一七世紀京都の都市構造と武士の位置」、『平安京―京都 都市図と都市構造』（京都大学学術出版会）、2007年2月
7. 「一六世紀末における日本人の地理認識の転換」、『グローバル化時代の人文科学』（京都大学学術出版会）、2007年2月
8. 「二つの正保日本総図」、『大地の肖像』（京都大学学術出版会）、2007年3月

II. 自己評価

個別研究論文としては、日本古文書学会での講演をもとにした「徳川将軍領知朱印状の古文書学的位置」を『古文書研究』の誌上に公にし、また歴史学研究会・日本史研究会共編の『講座日本史』の編集委員として編集にかかわり、かつ自らも論文執筆に当たった。基礎的史料集としては、近世書記の公家の日記『時慶記』、北野天満宮所蔵の日記を刊行した。また、科学研究費の交付を受けての研究、江戸幕府領知判物・朱印状に関する研究に取り組み、COE研究活動の成果報告を共編で『大地の肖像』編集かつ論文執筆にもあたった。また高島市の国指定史跡にかかわる古文書調査を大学院生の協力をえて実施し、その報告書を刊行した。全体として、研究活動は順調になされていると自己評価する。

勝山清次（日本史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『三重県史 資料編中世2』（共著・田中繁三氏旧蔵文書以下21点の文書群を担当）、三重県、2005年9月

2. 『新修彦根市史 通史編古代・中世』（共著・中世編解説と同第2章を担当）、彦根市、2007年3月

【論文】

1. 「中世伊勢神宮における触穢と祭主」、八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに』、2004年5月
2. 「伊勢内宮祭神の中世的変容」、『京都大学文学部研究紀要』46号、2007年3月

【学術講演】

1. 「宗廟と国主神」、中世史研究会（名古屋）例会、2005年9月3日
2. 「国主神としての天照大神」、読史会大会、2005年11月3日
3. 「平安時代の伊勢神宮と斎宮」、斎宮博物館特別展記念講演会、2006年10月15日

II. 自己評価

ここ数年、伊勢神宮の中世的変容、すなわち中世的な権門勢家への転身を解明する課題に取り組んできた。国家的な祭祀を担う権門勢家の形成とその特質を究明することにより、権門体制論の問題点を明らかにし、中世国家史研究に寄与することができると考えたからである。具体的な検討にあたり、焦点をあてたのは神宮に君臨する祭主とその権力であり、これまで祭主権力の形成、中世における祭主裁判のあり方および公家裁判との関係、さらには祭主のもとで行われた神郡の再編成をとりあげた。期間中はこれらをうけて、まず祭主権力の一部をなす「触穢沙汰権」の実態を論じた。ついで伊勢内宮祭神の性格の変容の問題をとりあげ、神宮宗廟観と天照大神国主神観について、それぞれの形成過程を明らかにした。計画しながらも実現できなかったのは、伊勢神宮の問題を通じて権門体制論を相対化することであり、これが目下の課題となっている。

吉川真司（日本史学専修助教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『列島の古代史』全8巻（上原真人・白石太郎・吉村武彦との共編）、岩波書店、2005年10月～06年10月

【論文】

1. 「律令体制の形成」、歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座1 東アジアにおける国家の形成』（東京大学出版会）、2004年5月、pp. 201-240
2. 「オオヤマト地域の古代」、オオヤマト古墳群シンポジウム実行委員会編『オオヤマト古墳群と古代王権』（青木書店）、2004年7月、pp. 134-151
3. 「七世紀宮都史研究の課題」、『日本史研究』507、2004年11月、pp. 61-75
4. 「税の貢進」、平川南他編『文字と古代日本3 流通と文字』（吉川弘文館）、2005年7月、pp. 34-62
5. 「王宮と官人社会」、上原真人他編『列島の古代史3 社会集団と政治組織』（岩波書店）、2005年11月、pp. 155-196

6. 「〈社会集団と政治組織〉総説」、上原真人他編『列島の古代史3 社会集団と政治 組織』(岩波書店)、2005年11月、pp. 1-9
 7. 「〈信仰と世界観〉総説」、上原真人他編『列島の古代史7 信仰と世界観』(岩波書店)、2006年5月、pp. 1-10
 8. 「中世の明日香」、『続明日香村史・下巻 現勢編』(明日香村)、pp. 13-39、2006年9月
 9. 「律令体制の展開と列島社会」、上原真人他編『列島の古代史8 古代史の流れ』(岩波書店)、2006年10月、pp. 133-202
 10. 「秋田・胡桃館遺跡」(高橋学・榎本剛治・山本崇との共著)、『木簡研究』28、2006年12月、pp. 197-203
 11. 「国際交易と古代日本」、紀平英作・吉本道雅編『京都と北京』(角川学芸出版)、2006年12月、pp. 170-190
 12. 「大極殿儀式と時期区分論」、『国立歴史民俗博物館研究報告』134、2007年3月、pp. 7-26
 13. 「近江京・平安京と山科」、上原真人編『皇太后の山寺』(柳原出版)、2007年、pp. 53-83
- 【学術講演】
1. 「平安京変遷史」、日本書籍出版協会京都支部文化講演会、ウイングス京都、2004年4月
 2. 「東大寺成立史論争」、奈良歴史地理の会講座、奈良県中小企業会館、2005年6月
 3. 「秋田県胡桃館遺跡と出土木簡」(榎本剛治・高橋学・山本崇と)、木簡学会大会、奈良文化財研究所、2005年12月
 4. 「日本における宮都の形成」、岩波書店古代史シンポジウム、明治大学アカデミーホール、2005年12月
 5. 「国際交易と古代日本」、21世紀COEプロジェクト「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」国際シンポジウム、京都大学百周年時計台記念館、2005年12月
 6. 「七世紀の王宮とミサト」、古代都城制研究シンポジウム、大阪歴史博物館、2006年7月
 7. 「女真海賊事件の前後」、読史会大会、京都大学百周年時計台記念館、2006年11月
 8. 「行基寺院石凝寺と地域交通」、共同研究「摂河泉古代寺院の総合的研究」全体報告会、大阪府立近つ飛鳥博物館、2007年2月

II. 自己評価

日本古代史の総合的把握を長期的目標としているが、この3年間は古代諸段階論・古代諸地域論について中間的総括を行なった。総説的論考である「律令体制の形成」「律令体制の展開と列島社会」において日本7~10世紀史の時期区分と各時期の特徴を論じ、大和・山城・出羽などの地域史的考察を発表した。また王宮論・国際関係論を基軸とする古代政治史、租税・交易を中心とする古代経済史、さらに古代寺院史に関する個別研究も積み重ねた。古代王宮論については一書にまとめる段階に到達しつつある。このほか『為房卿記』『東大寺続要録』の校訂作業を進め、平成19年度は出版準備に入る予定である。ただし、研究のもう一つの柱である古代荘園論については、特殊講義で興福寺・東大寺領荘園の個別考証を展開し、現地踏査と古文書調査を実施し、地域史研究に知見を盛り込んだが、総説・モノグラフとして成果を公表することはできず、今後の重要課題となった。

夫馬進（東洋史学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『中国善会善堂史研究』（中国語訳）、北京 商務印書館、2005年6月
2. 『中国東アジア外交交流史の研究』（編著）、京都大学学術出版会、2007年3月

【論文】

1. 「日本明史研究述評」、『明清論叢』第5輯（北京 紫禁城出版社）、2004年8月
2. 「訟師秘本与悪訟師の形象」、『明清司法運作的権力与文化』（台北 中央研究院歴史語言研究所）、2005年10月
3. 「中国明清時代における官箴書・公牘書目—上海図書館・北京大学図書館—」（伍躍と共著）、『東アジア出版文化の研究 研究成果報告書』別冊4（東北大学東北アジア研究センター）、2005年3月
4. 「朝鮮通信使による日本古学の認識—朝鮮燕行使による清朝漢学の把握を視野に入れて—」、『思想』2006-1、2006年1月
5. 「一七六四年朝鮮通信使と日本の徂徠学」、『史林』第89巻第5号、2006年9月
6. 「조선통신사와 일본의 서적—古学派校勘학의 저작과 古典籍을 중심으로— 朝鮮通信使と日本の書籍—古学派校勘학の著作と古典籍を中心に—」、『奎章閣』29、2006年12月
7. 「明清中国の対朝鮮外交における「礼」と「問罪」」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』（京都大学学術出版会）、2007年3月
8. 「明清中国による対朝鮮外交の鏡としての対ベトナム外交—冊封問題と「問罪の師」を中心に—」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—(下)』（京都大学文学部創立百周年記念文集）（京都大学学術出版会）、2007年3月

【学術講演】

1. 「中国史における「善挙」と「慈善事業」」、東京・国際文化会館「比較視野のなかの社会公益事業」、2004年9月24日（報告書『比較視野のなかの社会公益事業報告集』、澁沢栄一記念財団、2004年10月）
2. 「訟師秘本与悪訟師の形象」、台北・中央研究院歴史語言研究所「明清司法運作的権力与文化」、2005年10月13日、（論文集『明清司法運作的権力与文化』、2005年10月）
3. 「中国善会善堂史—從“善挙”到“慈善事業”的發展」、天津・南開大学、2005年9月9日（要旨『中国社会歴史評論』第7巻、2006年10月）
4. 「朝鮮燕行使与朝鮮通信使」、天津・南開大学、2005年9月8日（要旨『中国社会歴史評論』第7巻、2006年10月）
5. 「從善挙到慈善事業」、台北・台湾師範大学、2005年12月23日
6. 「조선통신사와 일본의 서적—古学派校勘학의 저작과 古典籍을 중심으로— 朝鮮通信使と日本の書籍—古学派校勘학の著作と古典籍を中心に—」、서울대학교 개교 60 주년 및 규장각 창립 230 주년 기념 한국학 국제학술회의 조직위원회編「21세기 한국학의 진로 모색」、2006年5月31日（報告書『21세기 한국학의 진로 모색』ソウル大学校開校六十周年・奎章閣創立二二〇周年記念韓國学国際学術會議組織委員会編『21世紀韓國学の進路模索』、ソウル、2006年5月）

7. 「關於在中国明清時代的訟師」、重慶・西南大学、2006年9月7日

II. 自己評価

著書の一つは日本語版『中国善会善堂史研究』の中国語訳であり、現在中国ではこれをベースにして討論が進み、この種の研究が盛んに行われるに至っている。論文のうち「朝鮮通信使による日本古学の認識」以下の3作は、近年とり組んでいる朝鮮燕行使および朝鮮通信使をもとにした韓国・中国および韓国・日本交流史研究の一環である。これらはこれまでの通説を破るとともに、従来の研究の欠を補うものとして、特に日本と韓国の学界ですでに影響を及ぼしつつある。韓国語に翻訳された論文は、シンポジウム報告をソウル大学奎章閣の求めに応じて改稿・転載したものである。

これまで私は「訟師」と呼ぶ訴訟幫助者の存在を中国訴訟史上において重視すべきことを主張してきており、この観点はすでに日本のみならず、たとえばアメリカ、中国、台湾でおおよそその共通認識となっている。さらにこの研究を進めるため、国外研究協力者7名を含め合計16名の参加をえて、2006年度から4年計画で科学研究費補助金研究（基盤研究A）「東アジア史上における中国訴訟社会の研究」を始めた。

2002年から2007年までの5年間、私はCOEプログラムによる一研究会「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」を率いてきた。その研究報告書として、『中国東アジア外交交流史の研究』を編集し、まもなく出版されようとしている。

国際的な活動としては、台北、天津、ソウル、重慶において講演またはシンポジウムで報告した。このほか、ここ百年におよぶ日本での明史研究の状況を中国語で発表した。

ここ3年間にわたる研究活動は、まずまずのものであったと評価する。

杉山正明（東洋史学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『歴史学の最前線』（共著）、東京大学出版会、2004年11月
2. 『遼文化・慶陵一帯調査報告書2005』（編著）、京都大学文学研究科、2005年3月
3. 『流沙の記憶をさぐる』林梅村原著（編著）、NHK出版、2005年3月
4. 『国際関係を「見つめる」』（共著）、財団法人アジア太平洋研究会、2005年8月
5. 『疾駆する草原の征服者』講談社、2005年10月
6. 『中国歴史研究入門』（編著）、名古屋大学出版会、2006年1月
7. 『モンゴルが世界史を覆す』、日本経済新聞社、2006年3月

【論文】

1. 「帝国史へのデッサン—緒論の緒論として」、『歴史学研究』794号、2004年10月
2. 「後醍醐天皇の謎」、『隠岐学セミナー講演録』、2004年10月
3. 「歴史を知ることと環境を考えること」、『子どもたちに語るこれからの地球』（講談社）、2006年7月
4. “Mongol-Period Geographical Knowledge: A 15th Century Map of the World”, *Humaniora*

Kiotensia on the Centenary of Kyoto Humanities (Graduate School of Letters, Kyoto University), 2006

5. 「ユーラシア世界史から人類史へ—モンゴル時代から始まるなにか」、『グローバル化時代の人文—実りある多様性と人類知への射程』上 (京都大学学術出版会)、2007年2月
6. 「東西の世界図が語る人類最初の大地平」、『大地の肖像』 (京都大学学術出版会)、2007年2月

【学術講演】

1. 「蒙元時代東西方地図顕示の世界像」、北京大学歴史系、2004年5月14日
2. 「アジアがつくった世界地図」、司馬遼太郎記念講演会、2004年5月22日
3. 「帝国史へのデッサン」、歴史学研究大会、一橋大学、2005年4月9日
4. “Conquest Dynasties and China”, International Symposium: The Rise of China in the Historical Perspective, Seoul University, 5 November, 2004.
5. 「モンゴル時代の世界—日本文化の基層形成をもとめて」、国際高等研究所、2005年7月7日
6. 「モンゴルが開く世界史」、神戸市立博物館、2005年5月20日
7. “Geographical Knowledge during the Mongol Period: A World Map of the 15th Century”, International Symposium: Mongolei—Das Erbe der Steppenvölker Asiens, Bonn, Juni 19, 2005.
8. 「蒼き狼チンギスカンの生涯とモンゴル帝国」、沼津市立図書館、2005年9月29日
9. “Mongol-Period Geographical Knowledge”, Peking Forum, Peking, Nov. 17, 2005.
10. 「ユーラシアから日本へ—歴史と現在を眺める」、沼津御用邸、2006年1月7日
11. 「モンゴル時代の世界地図」、東方学会・京都、2006年5月27日
12. 「モンゴル帝国とアメリカ」、日本経済新聞社・大阪、2006年6月23日
13. 「モンゴルの過去・現在・未来」、福岡アジア文化賞シンポジウム、アクロス福岡、2006年9月16日
14. 「モンゴル帝国とは何だったか」、日本経済新聞社・大阪、2006年10月27日
15. 「世界史を変えたモンゴル時代—東西の地図が語る新地平」、国際高等研究所、2006年11月18日

II. 自己評価

この三年間の研究成果として、著書7点(単著2点、編著3点、共著2点)と論文7点を公刊し、国内外における学術講演15回をおこなった。このほか、①京都大学文学研究科・21世紀COEプログラムのうち、とくに「絵図・地図プロジェクト」の推進とそれに関連する国際シンポジウムにおける発表2回、②中国内モンゴルを中心とする遼文化・慶陵一帯現地学術調査2回、③京都大学文学研究科と北京大学歴史系との国際交流協定締結にかかわる共同開催国際シンポジウム「京都と北京—光のまじわるころ」の企画・実行、④総合地球環境学研究所における「オアシス・プロジェクト」の企画・実行・共同研究、および来年度からの「天山・イリ調査プロジェクト」のための企画・立案とその予備調査としての中国・新疆における学術踏査、⑤国際高等研究所における企画委員としての活動・共同研究、⑥『国際政治事典』(弘文堂、平成17年12月)・『中央ユーラシアを知る事典』(平凡社、平成17年4月)における事典項目の執筆14件、

⑦『シルクロード紀行』全50冊(朝日新聞社、平成17-18年)の企画・編集と執筆30件、⑧NHK・中国中央電視台による国際共同製作特別番組『新シルクロード』10回の企画・協力、⑨福岡アジア文化賞選考委員としての国際シンポジウムの企画・実行、⑩佛教大学四条センターにおける文化講座(月1回、年12回、平成16-17年度)24回、および各地における講演会5回などの活動をおこなった。

吉本道雅 (東洋史学専修教授)

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『中国古代史論叢 続集』(共著)、立命館東洋史学会、2005年3月
2. 『中国先秦史の研究』、京都大学学術出版会、2005年9月、596 pp.
3. 『中国古代史論叢 三集』(共著)、立命館東洋史学会、2006年3月
4. ロータール・フォン・ファルケンハウゼン著『周代中国の社会考古学』(翻訳解題)、京都大学学術出版会、2006年12月
5. 『京都と北京一日中を結ぶ知の架橋—』(紀平英作と共編)、角川書店、2006年12月
6. 『中国古代史論叢 四集』(共著)、立命館東洋史学会、2007年3月

【論文】

1. 「西周紀年考」、『立命館文学』586(立命館人文学会)、2004年10月、pp. 57-18
2. 「窮達以時考」、『中国古代史論叢 続集』(立命館東洋史学会)、2005年3月、pp. 1-26
3. 「中国戦国時代の天下観念」、『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究 ニューズレター』3(京都大学文学研究科夫馬研究室)、2005年4月、pp. 3-5
4. 「孟子章次考」、『金啓琮先生逝世周年紀念文集』(東亜歴史文化研究会)、2005年4月、pp. 132-149
5. 「春秋卿大夫考」、同上、pp. 191-201
6. 「緇衣小考」、同上、pp. 202-218
7. 「先秦」、『中国の歴史』上(昭和堂)、2005年4月、pp. 43-82
8. 「春秋時代」、『中国史研究入門』(名古屋大学出版会)、2006年1月、pp. 37-44
9. 「禮縣秦西垂文化研究會・禮縣博物館編『秦西垂文化論集』」(紹介)、『東洋史研究』(東洋史研究会)、2006年3月、pp. 64-4
10. 「夏殷史と諸夏」、『中国古代史論叢 三集』(立命館東洋史学会)、2006年3月、pp. 1-30
11. 「史記匈奴列伝疏証」、『京都大学文学研究科紀要』45(京都大学文学研究科)、2006年3月、pp. 33-83
12. 「中国戦国時代における「四夷」観念の成立」、『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究 ニューズレター』4(京都大学文学研究科夫馬研究室)、2006年4月、pp. 11-14
13. 「春秋紀年表」、『東亜文史論叢』2006(東亜歴史文化研究会)、2006年12月、pp. 5-16
14. 「中国古代における華夷思想の成立」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』(京都大学学術出版会)、2007年3月、pp. 4-30
15. 「中国古代の世界観」、藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る

世界一』（京都大学学術出版会）、2007年3月、pp. 2-14

16. 「弱水考」、井上充幸・加藤雄三・森谷一樹編『オアシス地域史論叢—黒河流域二〇〇〇年の点描—』（松香堂）、2007年3月、pp. 1-17
17. 「『左伝』と西周史」、『中国古代史論叢 四集』（立命館東洋史学会）、2007年3月、pp. 1-40
18. 「山海経研究序説」、『京都大学文学研究科紀要』46（京都大学文学研究科）、2007年3月、pp. 27-68

【学術講演】

1. 「肅慎考 首届中国満学高峰論壇」、大連・遼寧師範大学、2006年9月21日

II. 自己評価

①『中国先秦史の研究』を刊行した。先秦期を通時的に記述した稀少かつ最新の著作であり、今後の研究の出発点となろう。先秦史一般および資料論・年代学に関する個別的論考も引き続き刊行している。② L.v.Falkenhausen “Chinese Society in the Age of Confucius (1000-250B.C.)” を翻訳し、解題を附して刊行した。考古資料に基づく先秦社会史研究であり、文献・出土文字資料に基づく『中国先秦史の研究』と相補う。この分野における日本と英語圏の交流を活性化する契機となろう。③平成16年度よりCOE「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」の「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班および総合地球環境学研究所オアシス・プロジェクト歴史班に参加し、平成18年度より文部科学省科学研究費基盤研究(C)「内蒙古東部における青銅器文化関係資料の調査に基づく先秦時代北方民族の研究」の交付を受け、関連の個別的論考を刊行しつつある。『中国先秦史の研究』で提示した中原から見た先秦史を主に北方から見直すことで相対化した。

中砂明德（東洋史学専修助教授）

I. 研究業績

【著書】

1. 『中国歴史研究入門』（共著）、名古屋大学出版会、2006年1月

【論文】

1. 「荷蘭国の朝貢」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』（京都大学学術出版会）、2007年3月
2. 「マルティニ・アトラス再考」、藤井讓治編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』（京都大学学術出版会）、2007年3月

【学術講演】

1. 「イエズス会士の眼で世界を見る」、文学研究科と北京大学歴史系共催のシンポジウム「京都と北京」（講演内容を増補して、『京都と北京』（角川書店、2006年12月）に「イエズス会の世紀」の日本と中国」と題して収録）

II. 自己評価

著書 1 では巻末の「付録」を担当した。1980 年代に出た『アジア歴史研究入門』以来の 20 年間に中国史研究をとりまく状況は、史料へのアクセス方法・工具書の増大など激変している。新たな入門書の出現が待たれていたこともあって、本書は好評のうちに迎えられている。私が担当した項目では、現在の学生のニーズに対応した記述を心がけたが、毎年 3 回生対象に行っている実習授業における経験を生かすことができたと思っている。しかし、インターネットの利用については、能力不足のため極めて不十分な記述しかできなかった。論文 1、2 はいずれも文学研究科の COE プロジェクトの成果報告書に載せるもの。論文 1 では従来無視されてきた史料を取り上げ、論文 2 ではよく知られている地図の来源を再検討した。とくに、論文 2 は従来の定説に大きく修正を迫るものである。学術講演 1 ではかつて世界的規模で展開していたイエズス会の存在が今日のグローバル化時代において改めて注目を集めつつあるものの、実際には依然として種々のローカリズムが研究を支配していることを指摘した。見通しを述べるにとどまり、イエズス会士の眼を 17 世紀の世界史記述において具体的にどう生かしていくかは今後の課題である。

高嶋 航（東洋史学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「近代中国における女性兵士の創出—武漢中央軍事政治学校女生隊」、『人文学報』90、2004 年 4 月、pp. 79-111
2. 「天足会与不纏足会」、李喜所主編『梁啓超与近代中国社会文化』（天津古籍出版社）、2005 年 1 月、pp. 581-600
3. 「1920 年代的徵婚広告」、「近代中国的城市・郷村・民間文化—首届中国近代社会史国際学術研討会」提出論文（青島）、2005 年 8 月
4. 「極東選手権競技大会と YMCA」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史』（京都大学学術出版会）、2007 年 3 月、pp. 460-504

【学術講演】

1. 「女伝教士与反纏足運動」、婦女史報告会、北京大学歴史学系、2006 年 10 月 25 日

II. 自己評価

2004 年は 1 月から 11 月にかけて刊行された共訳書（丁文江著、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』全 5 巻、岩波書店）に精力を注いだため、個人的研究はできなかった。その後は、2002 年以来研究してきた女性史の研究を中国語で発表することに意を用いた。上掲 2 の論文は 2003 年に発表した論文を基にしており、上掲の学術講演は 2004 年初に執筆した論文を基にしている。このほか、上掲 3 論文は国際シンポジウムのために執筆した論文で、まもなく論文集として出版される予定である。2006 年 3 月から 2007 年 1 月まで北京の中国社会科学院近代史研究所に滞在し、学術交流および資料収集をおこなった。2005 年夏以来、しばらく成果がないのは、全く新しいテーマに取り組み始めたことに起因する。新しいテーマでの最初の成果が上掲 4 の論

文である。ここ三年、中国の学界との交流を進めてきたが、まだ十分とはいえない。また学術論文の執筆が年平均1本強というのはやはり少ない。質を維持しつつも、もう少し積極的に研究成果を社会に還元していくことが今後の課題ではないかと考える。

濱田正美（西南アジア史学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. ユーラシア古語文献研究叢書4『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」事業実施委員会、2006 年

【論文】

1. “Le pouvoir des lieux saints dans le Turkestan oriental”, *Annales Histoire, Sciences Sociales*, 59^e année-n^o 5-6, septembre-décembre 2004.
2. 「天山の岩と泉と聖者の墓と」、松原正毅他編『ユーラシア草原からのメッセージ』（平凡社）、2005 年
3. 「湖南・樸学・「内」と「外」」、『史林』89 卷1号、2006 年
4. 「『帰真総義』：中央アジアにおけるその源流」、『中国宗教文献研究』（京都大学人文科学研究所）、2006 年
5. 「テュルク人とイスラーム—王権の観念をめぐって」、『グローバル化時代の人文学(上)』、2007 年

久保一之（西南アジア史学専修助教授）

I. 研究業績

【書評】

1. 「Jo-Ann Gross & Asom Urunbaev, *The Letters of Khwaja Ubayd Allah Ahrar and His Associates*」、『オリエント』第47 卷第1号、2004 年9月、pp. 177-188

II. 自己評価

まとまった研究成果を発表できなかった反省が残るが、史料研究については若干の成果があった。タシケント東洋学研究所に所蔵される極めて稀なペルシア語写本（ティムール朝末期の書簡現物を集成したもの）の写真版と校訂テキストおよびその英訳と研究が一書として公刊されたので、校訂や英訳の質ならびに研究内容の妥当性を検討した。その結果、多少の技術的問題はあるものの、緻密な校訂は十分に信頼でき、英訳も良質なものであることが判明した。研究編については、不明瞭な術語使用や人物の取り違いに加えて、誤植・誤記も散見され、また、なぜかテキスト引用部（英訳）に誤訳が見られたが、この稀有な写本の予備考察として、十分に有用なものであった。この成果は書評として発表した。当該写本の史料価値が明瞭となるよ

う工夫した。書評以上の利用価値があると考えている。なお、このほかの成果としては、依頼により、中央アジア史関係史料の部分訳を寄稿したが、今のところ公刊未定である。

服部良久（西洋史学専修教授）

I. 研究業績

【編著書・訳書】

1. 『大学で学ぶ西洋史』（共編著）、ミネルヴァ書房、2006年8月
2. 『紛争のなかのヨーロッパ中世』（編訳）、京都大学学術出版会、2006年7月

【論文】

1. 「中世ヨーロッパにおける紛争と秩序—紛争解決と国家・社会—」、『史林』88-1、2005年1月
2. 「中世ヨーロッパにおける紛争解決とコミュニケーション—ゲルト・アルトホーフの研究にふれて—」、笠谷和比古編『公家と武家の比較文明史』（思文閣出版）、2005年3月
3. 「中世ヨーロッパの公権力と地域社会」、『西洋史研究』新号第34号、2005年11月
4. 「中・近世のアルプス地方農村社会に於ける紛争・紛争解決と共同体」、『科学研究費補助金成果報告書（基盤研究C-2）』、2005年6月
5. 「13世紀のドイツ北西部における紛争解決と政治秩序」、『京都大学文学部研究紀要』45、2006年3月
6. 「歴史叙述とアイデンティティ—中世後期・人文主義時代のドイツにおけるその展開—」、南川高志編『知と学びのヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房）、2007年3月
7. 「中・近世農村社会における紛争と紛争解決—日・欧の比較—」、『京都大学文学部研究紀要』46、2007年3月

【学術講演】

1. “Konflikte und Konfliktaustragung in der ländlichen Gesellschaft—Japan und Tirol”, ドイツ・ミュンスター大学初期中世研究所、2005年5月24日
2. 「中・近世農村社会における紛争と紛争解決—日・欧の比較—」、史学研究会大会、京都大学文学部、2006年11月2日

II. 自己評価

数年来進めているヨーロッパ中・近世における紛争の研究について、この3年間に一定の成果を挙げることができた。それは、広く最近の欧米における研究状況を展望し、現状と課題を示した動向論文、関連する重要な論文を編訳した訳書、中世盛期のドイツ北西部における貴族、諸侯の紛争と政治的ネットワークを考察した論文、そして農村社会の紛争をオーストリアの山岳地方（ティロル）と日本中世について比較考察した論文がそれである。これらの業績はいずれも紛争・紛争解決と社会・政治秩序の相互関係を明らかにすることをめざし、類似する研究は欧米でも殆ど見られない。とくにティロルの村落間紛争については、幾度かの現地文書館における未刊行文書の調査により実証的な考察を行い、さらに日本中世の村落間相論との比較によって、日欧の農村社会・文化の比較考察への可能性を示すことができた。こうした紛争研究

の成果は、まもなく一冊の研究書にまとめる予定である。

南川高志（西洋史学専修教授）

I. 研究業績

【編著書・訳書】

1. *Continuity and Change of the Humanism in the Modern Europe: Political Culture, Classical Studies and University, Proceedings of the International Symposium, March 2005* (小山哲と共編著), Kyoto University, 2005年3月、191 pp.
2. P・サルウェイ著『古代のイギリス』（翻訳・解説）、岩波書店、2005年12月、177 pp.
3. アエリウス・スパルティアヌス他著『ローマ皇帝群像2』（桑山由文・井上文則と共訳）、京都大学学術出版会、2006年6月、347 pp.
4. 『大学で学ぶ西洋史—古代・中世—』（服部良久・山邊規子と共編著）、ミネルヴァ書房、2006年8月、359 pp.
5. 『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開—』（編著）、ミネルヴァ書房、2007年3月、344 pp.

【論文】

1. 「テオドル・モムゼンと古代史研究の確立」、『歴史と地理：世界史の研究』204号、2005年8月、pp. 1-17
2. 「ローマ皇帝権力の本質と変容」、笠谷和比古編『国際シンポジウム 武家と公家の比較文明史』（思文閣出版）、2005年8月、pp. 215-222
3. 「『生きた研究史』をめざして—ヴェルナー・エック教授の講演に寄せて—」、『西洋古代史研究』第5号、2005年10月、pp. 17-22
4. 「ローマ帝国西方属州の都市化と文化変容に関する研究」、『科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書』（京都大学）、2006年3月、pp. 1-26
5. 「古代ギリシア・ローマ史研究の発展と東洋人学者の立場」、紀平英作・吉本道雅編『京都と北京一日中を結ぶ知の架橋—』（角川書店）、2006年12月、pp. 228-249
6. 「リッチバラとポートチェスター—遺跡から古代が見えるか—」、『西洋古代史研究』第6号、2006年12月、pp. 41-54

【学術講演】

1. “Aspects of Social and Cultural Change in the Ancient World: Hellenization, Romanization and Christianization: General Introductions”, 国際シンポジウム International Symposium on Ancient Mediterranean World, 東京大学山上会館、2004年4月17日
2. 「造り上げられた『古代ギリシア文明』—最近の歴史学研究成果から—」、京都大学春秋講義、京都大学時計台・百周年記念ホール、2004年11月8日
3. 「近代イギリス・ドイツの大学における古代史研究の発展とその背景」、21世紀COEプログラム：グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」研究会 研究会大会「近代ヨーロッパにおける人文学研究・教育と大学の意義」、

京都大学大学院文学研究科・文学部、2005年1月9日

4. 「『帝国』としてのローマ—最盛期のローマ帝国の実態—」、伊丹市立中央公民館、2005年5月8日
5. 「『幻想の帝国』ローマ—近・現代ヨーロッパ人にとってのローマ帝国—」、伊丹市立中央公民館、2005年5月15日
6. 「ドイツの起源—古代と近代から現代ドイツを考える」、芦屋市民センター、2005年9月7日
7. 「西洋古代史研究の発展と東洋人学者の立場」、国際シンポジウム：京都と北京：光の交わるところ—学問知から人類知へ—、京都大学時計台・百周年記念ホール、2005年12月17日
8. “Ancient History in Japan”, 国際シンポジウム Kyoto-Cambridge International Symposium: Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy, イギリス、ケンブリッジ市、ケンブリッジ大学古典学部、2006年9月25日

II. 自己評価

1995年の『ローマ皇帝とその時代』（創文社）の刊行後、ローマ帝国を中核たる地中海地域ではなく境界属州から再考する研究に移行し、2003年出版の『海のかなたのローマ帝国』（岩波書店）でその中間報告をおこなったが、ここ数年の研究はその発展であり、古代のイギリスからドイツなど大陸諸地域の古代へと調査の枠を広げた。ローマ帝国史研究における多文化主義的、ポストコロニアル的な議論をわが国では初めて本格的に紹介するとともに、歴史学と考古学との新たなリンクを踏まえて、欧米学界とは異なる、東洋人学者に相応しい視角での考察を試みており、学界に少なからざる貢献をしていると自負している。

COE プログラムでは、「人文学」の本質と課題を、学問とそれを支える精神や思潮、そして社会的背景の歴史学的分析を通じて考察する研究班を3年間主宰してきた。このプロジェクトにより、欧米の学者との交流を積極的に進め、2006年にはケンブリッジ大学古典学部で国際シンポジウムを開催するところまでこぎつけた。ただ、この間ギリシア・ローマ史研究の進んだ英・独の学者との交流は大いに深まったが、アジア・太平洋地域の諸大学との交流は充分ではなく、今後の大きな課題となっている。

小山 哲（西洋史学専修教授）

I. 研究業績

【編著書】

1. *Continuity and Change of the Humanism in the Modern Europe: Political Culture, Classical Studies and University, Proceedings of the International Symposium, March 2005* (南川高志と共編), Kyoto: Kyoto University, 2005.

【論文】

1. 「人文主義と共和政—ポーランドから考える」、小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西—共和政の理念と現実』（山川出版社）、2004年11月、pp. 18-44
2. “Latin as a medium of cultural communication in the Polish-Lithuanian Commonwealth

in the sixteenth and the seventeenth centuries” , *Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy: Kyoto - Cambridge International Symposium, 25 September, 2006, Faculty of Classics, Cambridge University* (Kyoto: The Graduate School of Letters, Kyoto University, 2006, pp.75-92

3. 「シュラフタ文化論序説—近世ポーランド貴族の世界」、『歴史と地理 世界史の研究』第601号、2007年2月、pp.1-14
4. 「大学の発展と宗教—近世ポーランドにおけるイエズス会の学校教育とクラクフ大学」、南川高志編『知と学びのヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房）、2007年3月、pp.247-277
5. 「近代ヨーロッパの自画像—ポーランドからのまなざし」、京都大学文学部創立百周年記念論集『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—(上)』（京都大学学術出版会）、2007年3月、pp.83-117
6. 「近世ヨーロッパのフロンティアとしてのウクライナ—ギョーム・ル・ヴァスール・ド・ポーランの地図と地誌をめぐって」、藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』（京都大学学術出版会）、2007年3月、pp.141-161
7. “The Polish-Lithuanian Commonwealth as a political space: its unity and complexity” , Tadayuki Hayashi (ed.), *Regions in Central and Eastern Europe: Past and Present* (Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University), 2007年, pp.137-153

【学術講演】

1. 「サルマチア—《ヨーロッパ回帰》と《ヨーロッパ化》のあいだ」、フォーラム・ポーランド 2005年度会議「「ヨーロッパへの回帰」をめぐって」、駐日ポーランド共和国大使館、2005年10月29日
2. “The Polish-Lithuanian Commonwealth as a political space: its unity and complexity” , 中・東欧=日本 21世紀フォーラム 2005年度冬季国際シンポジウム「中・東欧の地域—過去と現在」、北海道大学スラブ研究センター、2005年12月14日
3. 「近世ヨーロッパのフロンティアとしてのウクライナ」、歴史家協会 2006年度大会、関西学院大学、2006年6月18日
4. “Latin as a medium of cultural communication in the Polish-Lithuanian Commonwealth in the sixteenth and the seventeenth centuries” , Kyoto - Cambridge International Symposium “Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy”, Cambridge University, 25 September, 2006
5. 「「我らは異なる信仰のために血を流さない」—近世ポーランドにおける諸宗派共存体制をめぐって」、京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」シンポジウム「グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて」、京都大学、2006年12月2日

II. 自己評価

平成16年度から18年度にかけての研究成果は、16世紀から現代に至るポーランド史上の諸問題を文化史的な視角から考察するものがかなりの部分を占めている。これは、文学研究科21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の枠内で行われた共同研

究に関連する領域で研究を進めた結果である。とくに平成 16 年 4 月より活動を開始した研究班「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」においては、平成 17 年 3 月 6 日に国際シンポジウム「近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容」を開催したほか、平成 18 年 9 月にはケンブリッジ大学でのシンポジウムで報告を行う機会をえた。他方で、共同研究から離れた個人研究がややペース・ダウンしていることは反省点である。

上原真人（考古学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『奈良時代の富山を探る—「奈良時代の富山を探る」フォーラム全三回の記録—』富山市教育委員会編（共著）、2004 年 3 月（特別講演「瓦からみた北陸の古代寺院の様相」（pp. 113-126）を分担執筆）
2. 『安祥寺の研究 I—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」成果報告書・第 14 研究会「王権とモニュメント」編（共著）、京都大学大学院文学研究科、2004 年 3 月（「はじめに」と報告編第 1・2 章「安祥寺の歴史と環境」「安祥寺上寺跡の測量調査成果」（pp. 3-30）を共著で分担）
3. 『遼文化・慶陵一帯調査報告書』京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」成果報告書（共著）、京都大学大学院文学研究科、2005 年 3 月（序文「遼文化慶陵考察訪 中団長として」（pp. 7-9）、論考「慶州城「白塔」覚書(1)」（pp. 83-111）を分担執筆）
4. 『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成 14～平成 16 年度科学研究費補助金(B) (2) 研究成果報告書（共著）、京都大学考古学研究室、2005 年 3 月（監修、序言）
5. 『徳一菩薩と慧日寺』（共著）、磐梯町、2005 年 7 月「慧日寺「戒壇」とは何か」（pp. 125-168）を分担執筆）
6. 『列島の古代史 2 暮らしと生業』（白石太一郎・吉川真司・吉村武彦と共編）、岩波書店、2005 年 10 月（「暮らしぶり」（pp. 43-82）を分担執筆）
7. 『日本の考古学』（共著）、奈良文化財研究所、2005 年 12 月（「仏教伝来」（pp. 603-611）を分担執筆）
8. 『シリーズ都市・建築・歴史 1 記念的建造物の成立』鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編（共著）、東京大学出版会、2006 年 2 月（「2 寺院造営と生産」（pp. 85-150）を分担執筆）
9. 『列島の古代史 5 専門技能と技術』（白石太一郎・吉川真司・吉村武彦と共編）、岩波書店、2006 年 2 月（「総説」（pp. 1-9）を分担執筆）
10. 『遼文化・遼寧省調査報告書』京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」成果報告書（共著）、京都大学大学院文学研究科、2006 年 3 月（序文および「遼寧省博物館にて」（pp. 21-30）を分担執筆）
11. 『古代の工房—豊かなる都・寺のきらめき—』平成 18 年度春季特別展図録（共著）、大阪

府立近つ飛鳥博物館、2006年4月(「恭仁宮造営に際して稼働した西山瓦屋の工人達」(pp. 66-71)を分担執筆)

12. 『院政期の内裏・大内裏と院御所』高橋昌明編(共著)、文理閣、2006年6月(「院政期平安宮一瓦から見た一」(pp. 18-54)を分担執筆)
13. 『列島の古代史1 古代史の舞台』(白石太一郎・吉川真司・吉村武彦と共編)、岩波書店、2006年7月(「総説」(pp. 1-10)を分担執筆)
14. 『三ツ塚廃寺跡史跡指定30周年記念講演会の記録—故高井悌三郎先生を偲んで—』、(共著)、(旧)丹波三ツ塚遺跡発掘調査団、2006年(「双塔伽藍の系譜」(pp. 21-32)を分担)
15. 『列島の古代史8 古代史の流れ』(白石太一郎・吉川真司・吉村武彦と共編)、岩波書店、2006年10月(「平城京・平安京時代の文化」(pp. 203-265)を分担執筆)
16. 『皇太后の山寺—山科安祥寺創建の背景をさぐる—』21世紀COE「王権とモニュメント」研究会(共著)、柳原書店、2007年3月(編集および序論を担当)

【論文】

1. 「周防から東寺へ運ばれた瓦—あの頃からの課題—」、『山口県史の窓(資料編・考古2)』第14回配本(山口県生活環境部県史編さん室)、2004年3月
2. 「仏舎利信仰の日本的展開—失われた仏舎利—」、『かにかくに—八賀晋先生古稀記念論文集—』、2004年5月、pp. 521-541
3. 「飛鳥仏教の考古学—撰津四天王寺と百済尼寺を中心に—」、『大阪の歴史を掘る2004』((財)大阪市文化財協会・大阪歴史博物館)、2004年8月、pp. 10-15
4. 「古代寺院の湯屋」、『宝菩提院廃寺湯屋跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第64冊(第2分冊)(向日市教育委員会)、2005年3月、pp. 119-134
5. 「アジアのなかの日本列島」、『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—(上)』(京都大学文学部百周年記念事業・共同研究)、2007年3月、pp. 30-52
6. 「平安時代前期における離宮造営」、『考古学論究—小笠原好彦先生退職記念献呈論文集—』(滋賀大学考古学研究室)、2007年3月、pp. 597-624
7. 「西西郷廃寺出土の幾何学紋軒平瓦について」、平田市埋蔵文化財調査報告書 第6集『山根垣古墳・西西郷廃寺』(島根県平田市教育委員会)、2007年3月刊行(ただし奥付は1998年度)、pp. 17-28

【書評・その他】

1. 「(書評と紹介)横山浩一『古代技術史攷』岩波書店」、『日本歴史』第676号(吉川弘文館)、2004年9月
2. 「編集後記」、『佛教藝術』279号:特集・宇治の考古学、藤原別業の世界(毎日新聞社)、2005年3月
3. 「解説」、『佐原真の仕事2 道具の考古学』(岩波書店)、2005年5月
4. 学界動向「安祥寺研究の新たな展開」、『古代文化』第57巻第8号((財)古代学協会)、2005年8月 pp. 39-43
5. 「主旨説明」、『皇太后の山寺—山科安祥寺創建の背景をさぐる—』(京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』シンポジウム資料、第14研究会「王権とモニュメント」)、2005年11月、pp. 2-3
6. 共同研究の現在「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」、『日本歴史』第692号(新

年特集号：共同研究の成果とゆくえ)、吉川弘文館、2006年1月、pp.17-19

7. 「コメント・考古学から見た〈国境〉〈境界〉」、『史林』第90巻第1号(史学研究会)、2007年1月、pp.210-217

II. 自己評価

とにかく忙しい日々であった。書いた本数だけはやたら多いが、a)共同研究の代表となったための義務(著書2, 3, 4, 10, 16, 他4, 5, 6)、b)編集委員となったための義務(著書6, 9, 13, 15, 他3)、c)講演会や研究会にともなう印刷物作成(著書1, 11, 14, 論文3, 他7)が目について、自分でも研究の体系性が認めにくくなっている。それでも、長年積み上げてきた研究成果の一端をまとめたものが一本でもある(著書12)のは救いだし、講演会のネタがふくらんで、新しい提言ができた論文(論文2, 6, 著書5)は、それなりに愛着がある。また、発掘現場の指導を通じた提言(論文1, 4, 7)も、小品ながら、各分野の研究に益するところがあったと信じる。義務で書いたものの中にも、いくつか重要な提言ができたと思うもの(著書6, 15)があるが、研究者の間でどう評価されるかが問題で、それも数年待たねば結果は出ないだろう。自己評価など鳥滸がましい限りだ。おもに依頼されて、大先輩たちの業績についても、論評する立場になった(他1, 4)のも、年による巡り合わせだろうか。

泉 拓良(考古学専修教授)

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『滋賀県安土遺跡資料 山内清男考古資料 15』(共編)、『奈良文化財研究所史料』、第70冊、2005年3月
2. 『新修 豊中市史』第4巻考古、(共著)、「第1章旧石器時代」「第2章縄文時代を執筆」、2005年9月
3. 『レバノン・ティール遺跡での横穴墓・地下墓の発掘調査 平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書』、京都大学文学研究科、2006年3月

【論文】

1. 「中東におけるヘレニズム都市の成立と展開」、『シルクロードを翔る アレキサンドロス大王～その夢と実像、そしてヘレニズム文化の東漸～』pp.89-96、シルクロード学術研究センター、
2. The Establishment and Development of Hellenistic Cities in the Middle East, *Soaring over the Silk Road Alexander the Great: Nara International Symposium 2003*, Record No.7 The Silk Roads-Nara International Symposium, pp.73-82, 2005年3月
3. 「考古班」(碓井照子と共著)、『人文社会科学の空間情報科学』pp.36-72、財団法人統計情報研究開発センター、2005年3月
4. 「レバノン共和国ティール遺跡の学術調査2004」(西山要一と共著)、『平成16年度 今よみがえる古代オリエント』pp.76-82、2005年3月

5. 「ティール遺跡から出土したタニット女神記号のいみするもの」、『日本西アジア考古学会 第10回総会・大会要旨集』、2005年6月、pp. 39-45
6. 「世界の発掘調査・西から東からレバノン共和国」、『文化遺産の世界』Volume18、2005年8月、pp. 22-23
7. 「トフェトの考古学」（宮坂朋と共著）、『第12回ヘレニズム～イスラム考古学研究』ヘレニズム～イスラム考古学研究会、2005年10月、pp. 36-39
8. 「縄文時代集落研究の課題」、『史林』89-1、2006年1月、pp. 22-45
9. “A Laser-Scanner System for Acquiring Archaeological Data: Case of the Tyre Remains” (with Ryosuke Shibasaki,) , *GIS-Based Studies in the Humanities and Social Sciences*, Boca Raton, London and New York, 2006年5月

【学術講演・学会発表】

1. 「レバノン国ティール市郊外ローマ時代壁画地下墓の環境」（西山要一・島田守らと共同発表）、『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』、2004年、pp. 34-35、
2. 「レバノン・ティール出土ガラスの製作技法」（島田守と共同発表）、『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』、pp. 22-23
3. 「ティール市郊外出土のタニット女神記号付分銅の研究」、『日本オリエント学会第48回大会発表要旨』、2006年10月

II. 自己評価

平成16年度からの3年間の研究業績は主として2課題に分かれる。平成11年度から開始した中東レバノンでの考古学的調査研究と、西日本を中心とした縄文時代研究である。レバノンでの考古学的調査研究は、フェニキアを中心都市テュロス（現在の南レバノン県Tyre市）及びその周辺で行った遺跡確認踏査と発掘調査、その成果と関わる出土遺物の研究、文献研究、空間情報科学的手法の考古学への応用とからなっていた。その成果は、『レバノン・ティール遺跡での横穴墓・地下墓の発掘調査、平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書』で公刊した。中東での調査研究によりここ数年、縄文時代研究はやや停滞したが、長年関わってきた滋賀県安土遺跡の整理報告書を刊行し、「縄文時代集落研究の課題」『史林』89-1により研究の現状を整理し、新たな研究への出発点を準備したと評価する。

吉井秀夫（考古学専修助教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「土器資料を通してみた3～5世紀の百済と倭の交渉関係」（韓国語）、『漢城百済の物流システムと対外交渉』（ハンシン大学校学術院）、2004年7月、pp. 191-216
2. 「扶蘇山城出土『會昌七年』銘文字瓦をめぐって」、『古代文化』第56巻第11号（古代学協会）、2004年11月、pp. 13-25
3. “Die Kulturimporte der Kofun-Zeit aus der Perspektive der auswärtigen Beziehungen” ,

Zeit der Morgenrote Japans Archaeologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern (REM), 2004, pp. 346-350

4. 「朝鮮半島原三国・三国時代の又鋤について—紫金山古墳出土又鋤を理解するために—」、『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』、2005年3月、pp. 347-350
 5. 「朝鮮半島西南部における古代国家形成過程の諸問題」、『国家形成の比較研究』（学生社）、2005年5月、pp. 120-138
 6. 「対外交渉からみた古墳時代の外来系文化」、『日本の考古学』下（学生社）、2005年12月、pp. 519-525
 7. 「考古学から見た百済の国家形成とアイデンティティ」、『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』（すいれん舎）、2006年4月、pp. 166-186
 8. 「釜山考古会と博物館建設運動」、『喜谷美宣先生古稀記念論集』（喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会）、2006年6月、pp. 675-684
 9. 「釜山考古会とその活動について再考—1935年以降の活動を中心に—」、『有光教一先生白寿記念論叢』（財団法人高麗美術館）、2006年11月、pp. 341-354
 10. 「東アジア世界からみた武寧王陵の木棺」、『日中交流の考古学』、2007年3月、pp. 406-415
- 【学術講演】
1. 「大阪府茨木市紫金山古墳の墳丘発掘調査」（森下章司・阪口英毅と共同）、日本考古学協会第71回総会研究発表会、2005年5月22日（発表要旨は『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』pp. 150-152に掲載）
 2. 「日本の古代王京と韓半島文化」（韓国語）、第5回博物館文化講座『古代の王京と王宮』、国立公州博物館、2005年8月9日、（発表要旨は『古代の王京と王宮』（2005年8月 国立公州博物館）pp. 15-232に掲載）
 3. “Re-examination of the archaeological investigation in Colonial Korea : focusing on the researchers by Kousaku Hamada and Sueji Umehar”, World Archaeological Congress Inter-Congress: Osaka, 12-15 January 2006（発表要旨はプログラム・要旨集のpp. 103-104に掲載）
 4. “Nationalism and Defining a ‘Royal Tomb’ ; A Comparative Approach to the Study of Ancient Burials (Kofun) in Japan and Korea”, 58th Annual Meeting of the Association for Asian Studies: San Francisco, 8 April 2006
 5. 「日本における武寧王陵研究史」（韓国語）、武寧王陵発掘35周年記念及び新報告書発刊のための武寧王陵学術大会、国立公州博物館、2006年11月24日
 6. 「日帝強占期慶州新羅古墳の発掘調査」（韓国語）、国立慶州文化財研究所学術シンポジウム 新羅古墳発掘調査100年、国立慶州文化財研究所、2006年12月8日（発表要旨は『国立慶州文化財研究所学術シンポジウム 新羅古墳発掘調査100年』pp. 9-20に掲載）

II. 自己評価

この3年間は、（1）朝鮮古代国家形成過程の考古学的研究、（2）古代日朝関係史の考古学的研究、（3）植民地朝鮮における考古学的調査の再検討、という3つの大きなテーマに取り組み、その成果の一端を論文として発表することができた。また、これまで取り組んできた

韓国での韓国語による研究発表に加えて、日本やアメリカ合衆国の学会で英語による研究発表の機会をえたことは、よい経験となった。この他、科学研究費補助金の共同研究者として参加している韓国の文字瓦研究や、紫金山古墳の調査研究の成果についても、論文や学術講演を通して発表することができた。さまざまな分野についての研究を同時に進めることについては充実感を感じているが、研究全体が散漫にならないように心がけ、積み重ねてきた研究成果を、著作・論文などの形にできるようこれからも精進していきたい。

〔行動文化学専攻〕

苧阪直行（心理学専修教授）

I. 研究業績

【著書・訳書】

1. 『脳と意識のワークスペース』（監訳）、協同出版、2004年
2. 『大脳皮質と心—認知神経心理学入門—』（苧阪満里子と共訳）、新曜社、2005年
3. 『心の神経生理学入門—神経伝達物質とホルモン—』（苧阪満里子と共訳）、新曜社、2005年
4. *Cognitive Neuroscience of Working Memory*. (Ed. With Logie, R. & D' Esposito, M.). Oxford: Oxford University Press, 2007
5. *Object Recognition, Attention & Action*. (Ed. With Rentschler, I. & Biederman, I.). Elsevier, 2007

【論文】

1. Kondo, H., Morishita, M., Osaka, N., Osaka, M., Fukuyama, H., & Shibasaki, H., “Functional roles of cingulo-frontal network in performance of working memory”, *NeuroImage*, 21, 2004, pp.2-14.
2. Osaka, N., Osaka, M., Morishita, M., Kondo, H., Fukuyama, H., & Shibasaki, H., “Word expressing pain activates anterior cingulate cortex in the human brain: An fMRI study”, *Behavioral Brain Research*, 153, 2004, pp.123-127.
3. Osaka, N., Osaka, M., Morishita, M., Kondo, H., Fukuyama, H., & Shibasaki, H., “The neural basis of executive function in working memory: An fMRI study based on individual differences”, *NeuroImage*, 21, 2004, pp.623-631.
4. “The world as an inside working memory”, *Behavioral & Brain Sciences*, 27, 2004, pp.905-906.
5. “On the perceptual and neural correlates of reading models”, *Behavioural & Brain Sciences*, 26, 2004, pp.495-496.
6. Kondo, H., & Osaka, N., “Susceptibility of spatial and verbal working memory to demands of central executive”, *Japanese Psychological Research*, 46, 2004, pp.86-97.
7. Kondo, H., Osaka, N., & Osaka, M., “Cooperation of the anterior cingulate cortex and dorsolateral prefrontal cortex for attention shifting”, *NeuroImage*, 23, 2004,

pp. 670-679.

8. 十河宏行・荻阪直行「Kanizsaの主観的図形とサッカードによる視野圧縮：誘導図形間の距離の効果の検討」、*VISION*, 16, 2004, pp. 231-234
9. 「デカルト的意識の脳内表現—心の理論からのアプローチ—」、『哲学研究』758号、2004、pp. 103-120
10. 「精神動作学」の誕生とその展開—千葉胤成著「書記能力及連想反応時間に冠する実験」(1908)を通して—、『心理学評論』47, 2004, pp. 257-262
11. 金田みずき・荻阪直行「長期記憶情報の利用における中央実行系の役割」、『基礎心理学研究』23, 2004, pp. 20-29
12. Sogo, H., & Osaka, N., “Kanizsa figure does not defend against saccadic compression of visual space”, *Vision Research*, 45, 2005, pp. 301-309.
13. 「21世紀の脳と心：ワーキングメモリと心の理論」、『教育と医学』No. 619, 2005, pp. 19-27
14. 「ワーキングメモリと実行系機能の個人差—fMRIによる検討—」、*Cognition & Dementia*, 4, 2005, pp. 95-100
15. Hirose, N., Kihara, K., Tsubomi, H., Mima, T., Ueki, Y., Fukuyama, H., & Osaka, N., “Involvement of V%/MT+ in object substitution masking: Evidence from rTMS”, *NeuroReport*, 16, 2005, pp. 491-494.
16. 大塚結喜・荻阪直行「言語性ワーキングメモリの fMRI による検討—加齢が前部帯状回 (ACC)—前頭前野 (PFC) ネットワークに及ぼす影響—」、『心理生理学と精神生理学』23, 2005, pp. 11-18
17. 廣瀬信之・荻阪直行「rTMS (反復経頭蓋磁気刺激) を用いたオブジェクト置き換えマスキングの脳内メカニズム」、『心理生理学と精神生理学』23, 2005, pp. 29-37
18. 荻阪直行・荻阪満里子「擬態語により創発される情動空間の脳内表現—fMRIによる検討—」、『心理生理学と精神生理学』23, 2005, pp. 5-10
19. 「ワーキングメモリと前部帯状回皮質—実行系機能の個人差の fMRI による検討—」、*Clinica I Neuroscience*, 23, 2005, pp. 1241-1244
20. 十河宏行・荻阪直行「サッカードに伴う空間圧縮現象」、『心理学評論』48, 2005, pp. 207-217
21. 「日本の地域心理学—歴史と現状の紹介—、特別寄稿によせて」、『心理学評論』48, 2005, p. 221
22. 「関西心理学会—78年の回顧と展望—」、『心理学評論』48, 2005, pp. 223-247
23. Osaka, N., & Osaka, M., “Striatal reward areas activated by implicit laughter induced by mimic words in humans”, *NeuroReport*, 16, 2005, pp. 1621-1624.
24. 「ワーキングメモリと前頭葉機能—実行系機能の個人差—」、『認知神経科学』7, 2005, pp. 250-255
25. 「fMRIによるワーキングメモリの神経基盤研究」、『臨床神経生理学』33, 2005, pp. 370-371
26. 「特集「ワーキングメモリと注意の脳内表現」によせて」、『心理学評論』48, 2005, pp. 477-481
27. 「日本の心理学関連学会—現状と展望—」(編著)、『心理学評論』48, 2005, pp. 593-646
28. 大塚結喜・荻阪直行「高齢者のワーキングメモリ—前頭葉仮説の検討—」、『心理学評

- 論』48, 2005, pp. 518-529
29. 池田尊司・苧阪直行「記憶中の色に対する言語情報の影響」、『日本色彩学会誌』29, 2006, pp. 52-53
 30. 「リカーシブな意識の脳内表現—ワーキングメモリを通して自己と他者を知る—」、『科学』76, 2006, pp. 280-283
 31. “Human anterior cingulate cortex and affective pain induced by mimic words: A functional magnetic resonance imaging study”, M. Mancina (Ed.), *Psychoanalysis & Neuroscience*, Springer Italia, 2006, pp. 257-268.
 32. 森下正修・苧阪直行「言語性ワーキングメモリにおける情報の貯蔵と保持」、『心理学評論』48, 2006, pp. 455-474
 33. Otsuka, Y., Osaka, N., Morishita, M., do, H. & Osaka, M., “Decreased activation of anterior cingulate cortex in the working memory of elderly”, *NeuroReport*, 17, 2006, pp. 1479-1482.
 34. 「意識と前頭葉—研究の動向と展開—」、『心理学研究』77, 2007, pp. 553-566
 35. Ikeda, T. & Osaka, N. “How colors are memorized in WM?: An fMRI study”, *NeuroReport*, 18, 2007, pp. 111-114
 36. 苧阪直行・池田尊司「色のワーキングメモリの脳内表現」、『日本色彩学会誌』30, 2006, pp. 197-203
 37. 森下正修・近藤洋史・蘆田佳世・大塚結喜・苧阪直行「読解力に対するワーキングメモリ課題の予測力：リーディングスパンテストによる検討」、『心理学研究』77, 2007, pp. 493-530
 38. 坪見博之・苧阪直行「視覚的注意のトップダウン制御の脳内表現」、『心理学評論』49, 2006, pp. 321-340.
 39. 「心の理論の脳内表現」、『心理学評論』49, 2006, pp. 358-374.
 40. 「笑いと痛み—擬音・擬態語の脳内表現」、『人工知能学会・ことば工学研究会資料、SIG-LSE-A602-6』（人工知能学会）、2006, pp. 55-64
 41. Osaka, M., Komori, M., Morishita, M. & Osaka, N. “Neural basis of focusing attention in working memory”, *Cognitive, Affective & Behavioral Neuroscience*, 2007 (In Press)
 42. Sogo, H. & Osaka, N., “Presaccadic compression distorts not only apparent location but also apparent shape”, *Spatial Vision*, 20, 2007, pp. 265-276
 43. Osaka, M. & Osaka, N., “Neural bases of focusing attention in working memory: an fMRI study based on individual differences”, Osaka, N., Logie, R. & D’Esposito, M., *Cognitive Neuroscience of Working Memory*, Oxford: Oxford University Press, 2007, pp. 99-117
 44. 「志向する意識の脳内表現—自己から他者へ—」、紀平英作編『グローバル化時代の人文科学(下)』文学部創立百周年記念論集(京大出版会)、2007, pp. 41-65
 45. Sogo, H. & Osaka, N. “Interaction between shape perception and egocentric localization”, N. Osaka, I. Rentschler & I. Biederman (Eds.), *Object recognition, attention and action*, Springer, 2007, pp. 159-171
 46. Logie, R., Osaka, N., & D’Esposito, M. “Working Memory Capacity, Control,

Components and Theory”, Osaka, N., Logie, R. & D’Esposito, M., *Cognitive Neuroscience of Working Memory*, Oxford: Oxford University Press, 2007, pp.13-17

【学術講演】

1. “Neuroimaging study of verbal working memory under theory of mind task”, European Working Memory Conference Symposium, University of Bourgogne, Beaune, France, April 22, 2004 (Invited lecture).
2. “Working memory under theory of mind task: An fMRI study”, 2nd International Conference on Working Memory, Kyoto International Conference Hall, Kyoto, August 18, 2004 (Invited lecture).
3. “Anterior cingulate cortex and affective pain induced by mimic word”, International Conference on Neurosciences and Psychoanalysis: Memory, Emotion & Dream, Genova Conference Center, Genova, Italy, November 4, 2004 (Invited lecture).
4. 「感性の言葉を味わう」、京都大学市民講座講演、京大百周年記念ホール、2004年11月20日
5. 「意識のワークスペース」、京都大学大学院文学研究科文化行動学系シンポジウム講演、京大百周年記念ホール、2004年12月4日
6. 「高齢者のワーキングメモリ」、第2回日本ワーキングメモリ学会シンポ講演、京大百周年記念ホール、2005年3月6日
7. 「前頭葉とワーキングメモリ」、日本認知神経科学学術大会講演、京都大学芝蘭会館、2005年7月10日
8. 「fMRI によるワーキングメモリの神経基盤」、日本臨床神経生理講演、九州大学、2005年11月29日
9. 「意識とは何か」、日本学術会議サイエンスカフェ講演（函館）、カフェ・ハルジオオン・函館未来大学、2006年4月23日
10. 「意識のサイエンス—意識と心の神経哲学—」、日本脳神経外科学会講演、東京プリンスホテル、2006年5月12日
11. 「心の理論の脳内表現」、日本ワーキングメモリ学会シンポ講演、芝蘭会館、2006年12月9日

II. 自己評価

研究のテーマは意識の科学的研究である。ここ20年、ワーキングメモリが意識の主要な担い手であるという仮説をもとに、実験心理学及び認知脳科学研究の統合を目指して意識科学を提唱してきた。心理学的にはアクティブで志向的な記憶システムとしてのワーキングメモリの心的機能の解明を行ないつつ、認知神経科学的にはワーキングメモリの制御を担う注意の実行系機能の前頭葉機能の検討を行ってきた。デカルト以来の心脳問題や意識の主観性の問題を機能的磁気共鳴脳画像法や経頭蓋磁気刺激法を用いて検討するとともに、覚醒、アウェアネス及びリカーシブな意識から構成される意識の3階層モデルを提案した(Osaka, N. 2003. *Neural Basis of Consciousness*, Benjamin: Amsterdam)。また、環境認識を中心とする中間的意識（アウェアネス）とそれを基盤に形成されるリカーシブな意識のいずれもが、異なる志向性をもつワーキングメモリとかがかわること、さらに自己や他者の脳内表現に

も言語性ワーキングメモリが密接にかかわることを明らかにした。21世紀の人類の重要なテーマである心脳問題について、ワーキングメモリの解明を通して一定の寄与をなし得たものと考えている。今後日本学術会議「脳と意識」分科会でもこのテーマを人文・理系にまたがる学際的アプローチの中で深めてゆきたいと考えている。

藤田和生（心理学専修教授）

I. 研究業績

【著書・訳書】

1. 『マキャベリの知性と心の理論の進化論－ヒトはなぜ賢くなったか－』（山下博志・友永雅己と監訳）、ナカニシヤ出版、2004年、490pp. [原書：Byrne, R. & Whiten, A. (Eds), *Machiavellian intelligence: Social expertise and the evolution of intellect in monkeys, apes, and humans*. Oxford Science Publications, 1988.]
2. 『マキャベリの知性と心の理論の進化論II－新たなる展開』（友永雅己・小田亮・平田聡と監訳）、ナカニシヤ出版、2004年、515pp. [原書：Whiten, A. & Byrne, R. (Eds), *Machiavellian intelligence II: Extensions and evaluations*. Cambridge University Press, 1997.]
3. 中島義明・繁榊算男・箱田裕司（編）『新・心理学の基礎知識』、有斐閣、2005年（項目執筆）（ISBN 4-641-18311-2）
4. 人工知能学会（編）『人工知能学事典』、共立出版、2005年（項目執筆）（2-16 動物行動、pp. 94-96）（ISBN 4-320-12107-4）
5. *Diversity of cognition: Evolution, Development, Domestication, and Pathology*. (Ed. With S. Itakura). Kyoto University Press, 2006. 414pp.
6. 『動物たちのゆたかな心』、京都大学学術出版会、2007年、181pp.

【論文】

1. Anderson, J. R., Awazu, S., & Fujita, K., “Squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*) choose smaller food arrays: Long-term retention, choice with non-preferred food, and transposition”, *Journal of Comparative Psychology*, 118(1), 2004, pp. 58-64.
2. Paukner, A., Anderson, J. R., & Fujita, K., “Reactions of capuchin monkeys (*Cebus apella*) to multiple mirrors”, *Behavioural Processes*, 66(1), 2004, pp. 1-6.
3. Kuwahata, H., Adachi, I., Fujita, K., Tomonaga, M., & Matsuzawa, T., “Development of schematic face preference in macaque monkeys”, *Behavioural Processes*, 66(1), 2004, pp. 17-21.
4. 「知性の輝く舞台」、『発達』98 (Vol. 25), 2004, pp. 104-112.
5. Anderson, J. R., Kuroshima, H., Kuwahata, H., & Fujita, K., “Do squirrel monkeys (*Saimiri sciureus*) and capuchin monkeys (*Cebus apella*) predict that looking leads to touching?”, *Animal Cognition*, 7, 2004, pp. 185-192.
6. 「21世紀の心理学に向けて－多様性心理学の展開－」、『基礎心理学研究』22(2), 2004, pp. 193-199.

7. 「動物のころを知る」、『紅萌』第5号, 2004, pp.9-12.
8. “How do nonhuman animals perceptually integrate figural fragments?”, *Japanese Psychological Research*, 46(3), 2004, pp.154-169.
9. Ushitani, T., Fujita, K., & Sato, A., “Perceptual organization of motions in pigeons (*Columba livia*)”, *Japanese Psychological Research*, 46(3), 2004, pp.170-181.
10. “Exploring minds of nonhuman relatives”, *Raku-Yu* (Kyoto University Newsletter), Autumn issue, 2004, pp.8-9.
11. 黒島妃香・服部裕子・藤田和生「新世界ザルにおける「ころ」の理解」、『哲学研究』578, 2004, pp.23-60.
12. 「比較認知科学（第9章）」、波多野誼余夫・大津由紀雄（編）『認知科学への招待』（研究社）、2004、pp.122-140
13. 放送大学ビデオ教材「ヒトの学習の特徴－生物学的基盤」（波多野誼余夫と共著）、『学習科学』第6回、2004 [印刷教材：波多野誼余夫・大浦容子・大島純編『学習科学』「第6章 ヒトの学習の特徴：生物学的基盤」、財団法人放送大学教育振興会、2004、pp.71-84]
14. Anderson, J. R., Kuwahata, H., Kuroshima, H., Leighty, K., & Fujita, K., “Are monkeys aesthetists? Rensch (1957) revisited”, *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes*, 31(1), 2005, pp.71-78.
15. Fujita, K., & Ushitani, T., “Better living by not completing: A wonderful peculiarity of pigeon vision?”, *Behavioural Processes*, 69, 2005, pp.59-66.)
16. Ushitani, T. & Fujita, K., “Pigeons do not perceptually complete partly occluded photos of food: An ecological approach to the ‘pigeon problem’ ”, *Behavioural Processes*, 69, 2005, pp.67-78.
17. 「動物の錯視（3.8章）」、後藤倬男・田中平八（編）『錯視の科学ハンドブック』（東京大学出版会）、2005、pp.284-296
18. 「動物のコミュニケーション」、中島平三（編）『言語の事典』（朝倉書店）、2005、pp.517-541
19. Hattori, Y., Kuroshima, H., & Fujita, K., “Cooperative problem solving by tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*): Spontaneous division of labor, communication, and reciprocal altruism”, *Journal of Comparative Psychology*, 119(3), 2005, pp.335-342.
20. 石川 悟・黒島妃香・藤田和生「フサオマキザルにおける階層的概念獲得とシンボル間関係の理解」、『認知科学』12(3), 2005, pp.142-152.
21. Fujita, K., & Giersch, A., “What perceptual rules do capuchin monkeys (*Cebus apella*) follow in completing partly occluded figures?”, *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes*, 31(4), 2005, pp.387-398.
22. Anderson, J. R., Kuroshima, H., Hattori, Y., & Fujita, K., “Attention to combined attention in New World monkeys (*Cebus apella*, *Saimiri sciureus*)”, *Journal of Comparative Psychology*, 2005, 119(4), 2005, pp.461-464.
23. Saito, A., Mikami, A., Kawamura, S., Ueno, Y., Hiramatsu, C., Widayati, K. A., Suryobroto, B., Teramoto, M., Mori, Y., Nagano, K., Fujita, K., Kuroshima, H., & Hasegawa, T., “Advantage of dichromats over trichromats in discrimination of color-camouflaged stimuli in non-human primates”, *American Journal of Primatology*, 67,

- 2005, pp. 425-436.
24. Saito, A., Kawamura, S., Mikami, A., Ueno, Y., Hiramatsu, C., Koida, K., Fujita, K., Kuroshima, H., & Hasegawa, T., “Demonstration of genotype-phenotype correlation in polymorphic color vision of a non-callitrichine New World monkey, capuchin *Cebus apella*”, *American Journal of Primatology*, 67, 2005, pp. 471-485.
 25. 足立幾磨・藤田和生「ハトにおけるヒトの「顔」と「顔以外の身体部位」のカテゴリー弁別」、『動物心理学研究』55(2), 2005, pp. 49-57. (Categorical discrimination of human faces from the other body parts in pigeons)
 26. Fujita, K., & Ushitani, T., “How do primates and birds recognize figures?”, In: K. Fujita, & S. Itakura (Eds.), *Diversity of cognition: Evolution, development, domestication, and pathology* (Kyoto, Kyoto University Press), 2006, pp. 38-54.
 27. “Seeing what is not there: Illusion, completion, and spatio-temporal boundary formation in comparative perspective”, In: Wasserman, E. A., & Zentall, T. R. (eds.), *Comparative Cognition: Experimental Explorations of Animal Intelligence*, 2006, pp. 29-52.
 28. Awazu, S., & Fujita, K., “Transfer from “edible” categorization training to feeding behavior in pigeons (*Columba livia*)”, *Japanese Psychological Research*, 48(1), 2006, pp. 27-33.
 29. 放送大学ビデオ教材「比較認知科学から見たヒトの学習」、『教授・学習過程論—学習科学の展開』、2006 [印刷教材：大島純・野島久雄・波多野誼余夫編『（新訂）教授・学習過程論—学習科学の展開』「第2章. 比較認知科学から見たヒトの学習」、財団法人放送大学教育振興会、2006, pp. 25-41.]
 30. 「比較認知（第6章）」、海保博之・楠見孝（監修）『心理学総合事典』（朝倉書店）、2006, pp. 111-128.
 31. Nakamura, N., Fujita, K. Ushitani, T., & Miyata, H., “Perception of the standard and the reversed Müller-Lyer figures in pigeons (*Columba livia*) and humans (*Homo sapiens*)”, *Journal of Comparative Psychology*, 120, 2006, pp. 252-261.
 32. Adachi, I., Kuwahata, H., Fujita, K., Tomonaga, M., & Matsuzawa, T., “Infant Japanese macaques in their first age have already formed a multi-modal representation of their own species”, *Primates*, 47(4), 2006, pp. 350-354.
 33. Miyata, H., Ushitani, T., Adachi, I. & Fujita, K., “Performance of pigeons (*Columba livia*) on maze problems presented on the LCD screen: In search for preplanning ability in an avian species”, *Journal of Comparative Psychology*, 120(4), 2006, pp. 358-366
 34. 「比較認知科学におけるパーティシペーションの意味」、『心理学評論』49(3)、2006、pp. 384-398
 35. 「心を読むこと、他者を操作すること」、山極寿一（編）『ヒトの科学』（岩波書店）、2007、pp. 133-152
 36. 「動物の感覚・知覚（視覚）」、大山正・今井省吾・和気典二・菊池正（編）『新編 感覚・知覚ハンドブック [増補版]』、2007、pp. 21-47
 37. 「心の進化」、紀平英作（編）『グローバル化時代の人文学(下)』（京都大学学術出版会）、

2007, pp. 5-40

38. Adachi, I., Kuwahata, H., & Fujita, K., “Dogs recall owner’s face upon hearing owner’s voice”, *Animal Cognition*, 10(1), 2007, pp. 17-21
39. Adachi, I., & Fujita, K., “Cross-modal representation of human caretakers in squirrel monkeys”, *Behavioural Processes*, 74, 2007, pp. 27-32
40. Hattori, Y., Kuroshima, H., & Fujita, K., “I know you are not looking at me: Capuchin monkeys’ (*Cebus apella*) sensitivity to human attentional states”, *Animal Cognition*, 10(2), 2007, pp. 141-148

【学術講演】

1. 「内的表象操作の比較認知科学」、国際高等研究所「思考の脳内メカニズム」、国際高等研究所セミナー室、2004年11月27日（話題提供）
2. Fujita, K., Kuroshima, H., & Hattori, Y., “Social Intelligence in Capuchin Monkeys (*Cebus apella*)”, Presented at the Symposium “Parallels in the evolution of social cognition”, The 29th International Ethological Conference, Budapest, Hungary, August 21-27, 2005 (invited speaker)
3. “Causality understanding of tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*) in tool use”, Workshop at the 69th Annual Conference of Japanese Psychological Society, Keio University, September 12, 2005 (invited speaker)
4. 「動物の思考」、JST異分野融合ワークショップ「模倣と社会機能」、浜名湖ロイヤルホテル、2005年11月13日（話題提供）
5. “Physical and social intelligence in capuchin monkeys”, Seminar at the University of Sao Paulo, Brasil, 2006年8月 (invited seminar)
6. 「セルフコントロールの進化」、日心第70回大会ワークショップ、福岡国際会議場、2006年11月3日（話題提供）

II. 自己評価

霊長類、ツパイ類、げっ歯類、鳥類にわたる多様な動物種の心の機能を、フィールド研究から厳密な実験室的分析までの多角的な手法で明らかにし、相互に比較し、その進化を考察した。対象とした心の機能は、基礎的な外界認識から欺きや駆け引き、読心などの高度な社会的知性まで多岐にわたる。研究成果の多くは一流の国際的学術誌に発表した。こうした広範でかつ高質な比較認知研究を展開している研究室は、世界的に見てもほとんど例がなく、国際的にも高い評価を得ている。国際交流の面では、英国スターリング大学の研究者と長期的な共同研究を継続しているほか、海外からの大学院生や学部学生を繰り返し受け入れて、共同研究へと発展させている。他方、当研究室からも大学院生を海外の研究室へ中期的に派遣し、研究交流に力を入れている。歴代の博士課程大学院生は、ほぼ全員が日本学術振興会の特別研究員 DC1 あるいは DC2 に採用されており、若手の育成も順調に進んでいる。現在の我が国において、もっともアクティブな比較認知研究室であると自負している。

櫻井芳雄（心理学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. “How can we detect ensemble coding by cell assembly” , In: Funahashi, S. (Ed.), *Representation and Brain*, Springer, Tokyo, 2007, pp. 249-270
2. “Brain-machine interface to detect real dynamics of neuronal assemblies in the working brain” , In: Wu, J.L., Ito, K., Tobimatsu, S., Nishida, T. & Fukuyama, H. (Eds.), *Complex Medical Engineering*, Springer, Tokyo, 2007, pp. 407-412

【論文】

1. Sakurai, Y., and Takahashi, S., “Dynamic synchrony of firing in the monkey prefrontal cortex during working memory tasks”, *Journal of Neuroscience*, 26, 2006, pp. 10141-10153.
2. 「マルチニューロン活動とブレイン-マシンインターフェース」、『生体の科学』57(4), 2006, pp. 292-297
3. 「マルチニューロン活動 - セル・アセンブリ - ブレイン-マシン・インターフェース」、『生理心理学と精神生理学』24(1), 2006, pp. 57-67
4. Koike, Y., Hirose, H., Sakurai, Y. and Iijima, T., “Prediction of arm trajectory from a small number of neuron activities in the primary motor cortex”, *Neuroscience Research*, 56, 2006, pp. 146-153.
5. Sakata, S., Yamamori, T., and Sakurai, Y., “7-12 Hz cortical oscillations: Behavioral context and dynamics of prefrontal neuronal ensembles” , *Neuroscience*, 134, 2005, pp. 1099-1111.
6. Takahashi, S. and Sakurai, Y., “Real-time and automatic sorting of multi-neuronal activity for sub-millisecond interactions in vivo” , *Neuroscience*, 134, 2005, pp. 301-315.
7. 「神経回路網による情報の表現」、『哲学研究』578, 2004, pp. 1-22.
8. Sakurai, Y., Takahashi, S., and Inoue, M., “Stimulus duration in working memory is represented by neuronal activity in the monkey prefrontal cortex” , *European Journal of Neuroscience*, 20, 2004, pp. 1069-1080.
9. Sakata, S., Yamamori, T. and Sakurai, Y., “Behavioral studies of auditory-visual spatial recognition and integration in rats” , *Experimental Brain Research*, 159, 2004, pp. 409-417.
10. 「マルチニューロン活動の記録-なぜ・どのようにして」、『電子情報通信学会誌』87, 2004, pp. 279-284.
11. 「セル・アセンブリによる神経情報の表現-実験的検証に向けて」、『蛋白質・核酸・酵素』49, 2004, pp. 463-470.

【学術講演】

1. 「脳の情報表現と可塑性をブレイン-マシン・インタフェースから見る」、第4回北海道大学脳科学研究教育センターシンポジウム「可塑性研究の最前線」、札幌、2006年12月
2. 「ブレイン-マシン・インタフェースの実現と可能性」、電子情報通信学会東京支部講演

会、東京、2006年12月

3. “Plasticity of firing and synchrony of hippocampal neurons in BMI”, CREST International Symposium “Possibility and Future of Brain-Machine Interfaces”, 京都, 2006年11月
4. “Brain plasticity revealed with brain-machine interfaces”, 1st International Conference on Advanced Medical Engineering and Informatics - Reconstruction and Restoration of Biological Function from Molecule to Body, 大阪, 2006年6月
5. Nomura, M., Sakurai, Y., Kitano, K. & Aoyagi, T., “Applying the kernel method to multi-neuronal spike trains”, 1st Symposium on Complex Medical Engineering, 京都, 2006年5月
6. 「脳の情報表現を Cell Assembly と Brain-machine Interface から観る」、生命科学研究科合同セミナー・サテライト講演会、岡崎、2006年3月
7. 「脳の情報表現とニューロン集団の活動」、東京大学機能生物学セミナー、東京、2006年2月
8. 「信号をつなぐ～脳からコンピュータへ～」、日本科学未来館「展示の前で研究者に会おう」、東京、2006年2月
9. 「BMI 法による脳の情報表現と可塑性の研究」、第3回 SICE 生物制御研究会、京都、2006年2月
10. 「脳の柔軟な情報表現を Cell Assembly と Brain-machine Interface から探る」、数学者のための分子生物学入門「新しい数学を作ろう」、精華町、2006年1月
11. 「ブレイン-マシン・インターフェイスの現状と可能性」、情報通信技術研究交流会、大阪、2005年11月
12. 「脳で動かすもう一つの体ーブレイン-マシン・インターフェイスの可能性」、CREST「脳の機能発達と学習メカニズムの解明」第1回公開シンポジウム、東京、2005年11月
13. “Brain-machine interface to detect dynamics of neuronal assemblies in the working brain”, 1st International Conference on Complex Biomedical Engineering (CME2005), 高松, 2005年5月
14. 「脳-機械直接通信型インターフェイス (BMI) から脳を観る」、第10回創発システムシンポジウム・チュートリアル講演、富山、2004年8月
15. 「Brain-Machine Interface から見える脳のダイナミクスと進化」、国際高等研究所「ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義」第1回研究会、京阪奈、2004年5月
16. 「脳の柔軟性を情報表現の方式から解明する」、リハビリテーション神経科学セミナー、諏訪、2004年5月

II. 自己評価

理想的とは言えないが、全体にほぼ満足できる結果だと思う。著書については、これまでの研究をまとめる以上、2007年度（出版予定）に集中したが、数としては十分であると思う。ただ、著書はオリジナルな研究成果を発表する場ではないので、今後もあまり重要視しないつもりである。最も重視している論文については、あと数本は国際誌に出したかったが、Impact Factor の高いジャーナルをねらう以上、多数にならなくても仕方ないかもしれない。一番新し

い論文 (Sakurai and Takahashi, 2006) の Impact Factor は 7.5 であり、悪くないと思う。学術講演については、招待講演のみ記載し、学会での研究発表やシンポジウムは除外してあるが、十分な数をこなせたと思う。このような招待講演の多さは、現在の研究テーマと研究成果に対する多方面からの関心の高さを示していると考えている。

板倉昭二 (心理学専修助教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『「私」はいつ生まれるか』、ちくま新書、2006 年
2. *Diversity of cognition*. (With K. Fujita). Kyoto University Press. 2006.

【論文】

1. Moriguchi, Y., Lee K. & Itakura, S., “Social transmission of disinhibition in young children”, *Developmental Science*, 10, 2007, pp. 481-489
2. MacCarthy, A., Lee, K., Itakura, S. & Muir, D., “Cultural display rules drive eye gaze during thinking”, *Journal of Cross Cultural Psychology*, 37, 2006, pp. 717-722
3. Minato, T., Shimada, M., Itakura, S., Lee, K., & Ishiguro, H., “Evaluating human likeness of an android by comparing gaze behaviors elicited”, *Advanced Robotics*, 20, 2006, pp. 1147-1163
4. 「心理学の立場から：メンタライジングの発達」、『脳と発達』、38, 2006, pp. 262-266
5. “Gaze processing in nonhuman animals”, In: K. Lee et al. (Eds.), *Gaze-following*, Lawrence Erlbaum, 2007
6. 嶋田容子・板倉昭二「乳児の声の遊び」、『日本音響学会聴覚研究会資料』36, 2006, pp. 347-350.
7. 「言語獲得と社会的認知—小椋論文へのコメント—」、『心理学評論』49, 2006, pp. 42-44.
8. 「観察法」、『心理学総合辞典』(朝倉書店)、2006
9. 小杉大輔・村井千寿子・板倉昭二「乳児における対象に適切な動きの理解」、『日本認知科学会テクニカルレポート』58, 2006, pp. 1-7.
10. 「乳児における社会的インタラクションの発現」、*TELECOM FRONTIER*, 50, 2006, pp. 12-19.
11. “To what extent do infants and children find a mind in non-human agents?”, In: K. Fujita & S. Itakura (Eds.), *Diversity of cognition*, Kyoto University Press, 2006.
12. Moriguchi, Y. & Itakura, S., “Effect of Conflicting and Non-Conflicting Cues On a Rule Switching Task”, *Psychological Reports*, 96, 2005, pp. 1049-1054.
13. Moriguchi, Y. & Itakura, S., “Does Pointing Comprehension Disturb Controlling Action? Evidence From 2-Year-Old Children”, *Proceedings of the 4th International Conference on Development and Learning*, 2005, pp. 102-105. (Reviewed paper).
14. MacDorman, K. F., Minato, T., Shimada, M., Itakura, S., Cowley, S., & Ishiguro, H., “Assessing human likeness by eye contact in an android testbed”, *Proceedings of CogSci-XXVII*, 2005. (Reviewed paper).

15. Minato, T., Shimada, M., Itakura, S., Lee, K., & Ishiguro, H., “Does gaze reveal the human likeness of an android” , *Proceedings of 2005 4th IEEE International Conference on Development and Learning*, 2005. (Reviewed paper).
16. Okanda, M. & Itakura, S., “Young infants’ sensitivity to social contingency from mother and stranger: Developmental changes” , *Proceedings of 2005 4th IEEE International Conference on Development and Learning*, 2005. (Reviewed paper).
17. 「比較発達研究の新しいかたち」、遠藤利彦（編著）『発達心理学の新しいかたち』（誠信書房）、2005
18. 「見出される意図：比較認知発達科学からのアプローチ」、『人工知能学会誌』20, 2005, pp. 387-393.
19. Murai, C., Kosugi, D., Tomonaga, M., Tanaka, M., Matsuzawa, T. & Itakura, S., “Can chimpanzee infants (*Pan troglodytes*) form categorical representations in the same manner as human infants (*Homo sapiens*)” , *Developmental Science*, 8, 2005, pp. 240-254.
20. Callaghan, T., Rochat, P., Lillard, A., Claux, M.L., Odden, H., Itakura, S., Tampanya, S., and Singh, S., “Synchrony in the onset of mental state reasoning: Evidence from 5 cultures” , *Psychological Science*, 16, 2005, pp. 378-384.
21. 「視線理解の進化と発達」、遠藤利彦（編）『読む目、読まれる目』（東京大学出版会）、2005
22. 「認知発達ロボティクスに期待すること」、『ベビーサイエンス』Vol. 4, 2004, p. 28.
23. 「成り立つ心—心の発達科学」、『哲学研究』578, 2004, pp. 61-79.
24. Minato, T., MacDorman, K.F., Shimada, M., Itakura, S., Lee, K. & Ishiguro, H., “Evaluating humanlikeness by comparing responses elicited by an android and a person” , *Proceedings of 2nd International Workshop on Man-Machine Symbolic System*, 2004.
25. Moriguchi, Y. & Itakura, S., “How children understand other’s belief before they develop attentional flexibility?” , *Proceedings of 3rd International Conference of Development and Learning (CD)*, 2004. Reviewed paper.
26. 「他者の心：メンタライジングを中心に」、波多野・大津（編）『認知科学への招待』（研究社）、2004
27. 「心を見出す知性の発達」、『発達』99, 2004, pp. 104-112.
28. 「他者の心の理解の発達:意図性の検出をめぐる」、『チャイルドヘルス』7, 2004, pp. 11-16.
29. “Gaze following and joint visual attention in nonhuman animals”, *Japanese Psychological Research*, 46, 2004, pp. 216-226.
30. Inoue, Y., Inoue, E., & Itakura, S., “Use of experimenter-given directional cues by a young white-handed gibbon (*Hyllobates lar*)” , *Japanese Psychological Research*, 46, 2004, pp. 262-267.
31. T. Minato, M. Shimada, H. Ishiguro, and S. Itakura(2004). A Constructive Approach for Studying Human-Robot Communication. Proc. of the Second International Symposium on Emergent Mechanisms of Communication in the Brain(IEMC), poster session, 2004, p. 82. (Reviewed paper).
32. Minato, T., Shimada, M., Ishiguro, H., Itakura, S., “Development of an android robot for studying human-robot interaction” , *Proceedings of the 17th International Conference*

on Industrial & Engineering Applications of Artificial Intelligence & Expert Systems, 2004.

33. 「映像の参照的理解:比較認知科学的な視点から」、『チャイルドヘルス』7, 2004, pp. 354-357.
34. 「進化から見た共同注意」、大藪泰他(編)『共同注意の発達と臨床』(川島書店)、2004
35. Sanefuji, W., Hashiya, K., Itakura, S., & Ogami, H., “Emergence of the understanding of the other’s intention: Re-enactment of intended acts from “failed-attempts” in 12-to 24-month-olds”, *Psychologia*, 47, 2004, pp.10-17.
36. 「他者の心を理解する—その発達と進化」、『日本医学総会誌』、2004

II. 自己評価

平成16年から18年にかけては、Developmental Cybernetics という新しい研究領域を立ち上げるための業績が中心となった。これは、大阪大学工学研究科との共同研究および日産財団からの補助によっておこなわれた研究である。これらの研究目的は、乳児がどのような対象に、いつごろから心的状態を帰属するようになるかを明らかにしようとするものである。その一部であるが、意図理解やロボットを用いた誤信念課題などをおこない、興味深い成果が得られた。また、科学技術振興機構の大型プロジェクトによる、日本のコホート研究にも参加し、子どもの発達を縦断的に追っている。さらに、21世紀COEの心理学連合で開催した認知の多様性に関する国際シンポジウムをおこない、それを1冊の本にまとめ高い評価を得た。

蘆田宏 (心理学専修助教授)

I. 研究業績

【論文】

1. Kitaoka, A. & Ashida, H., “A variant of the anomalous motion illusion based upon contrast and visual latency”, *Perception*, 36, 2007, pp. 1019-1035
2. Ashida, H., Lingnau, A., Wall, M. B., & Smith, A. T., “fMRI adaptation reveals separate mechanisms for first-order and second-order motion”, *Journal of Neurophysiology*, 97(2), 2007, pp. 1319-1325
3. Liu, J., Ashida, H., Smith, A. T., & Wandell, B., “Assessment of stimulus induced changes in human V1 visual field maps”, *Journal of Neurophysiology*, 96, 2006, pp. 3398-3408.
4. Murakami, I., Kitaoka, A., & Ashida, H., “A positive correlation between fixation instability and the strength of illusory motion in a static display”, *Vision Research*, 46(15), 2006, pp. 2421-2431.
5. Ashida, H., Kitaoka, A., & Sakurai, K., “A new variant of the Ouchi illusion reveals Fourier-component-based processing”, *Perception*, 34, 2005, pp. 381-390.
- Verstraten, F. A. J., Ashida, H., “Attention-based motion perception and motion adaptation: what does attention contribute?”, *Vision Research*, 45, 2005, pp. 1313-1319.
6. “Action-specific extrapolation of target motion in human visual system”, *Neuropsychologia*, 42, 2004, pp. 1515-1524.

7. 「身体制御と錯視—手は騙されないか—」、『哲学研究』578, 2004, pp. 80-102

【学術講演】

1. “Extrapolation of visual motion: psychophysics and fMRI”, Lancaster-Kyoto Joint International Symposia “New advances in psychological science”, Lancaster University, UK, October 25-26, 2006.
2. Ashida, H. & Kitakaze, T., “Prism adaptation and aftereffect in darts”, Paper presented at 4th Asian Conference on Vision, Matsue, Japan, Jul 28-Aug 1, 2006.
3. 「ガボール視覚刺激と空間定位」(*Vision*, 17, pp. 23-27)、日本視覚学会 2005 年夏季大会 (チュートリアル講演)、2005 年
4. 「視覚野における網膜位置依存的表現と視覚的運動」、岡崎生理学研究所研究会「視知覚のメカニズム—生理、心理物理、計算論的アプローチ」、2005 年 6 月 23-24 日 (招待講演)
5. Ashida, H. & Smith, A.T., “Retinotopic mapping of motion stimuli in human visual cortex” (*Journal of Vision*, 5(8), p. 489), Paper presented at Vision Sciences Society 2005 annual meeting, May 6-11, Sarasota, FL, USA, 2005.
6. Ashida, H., Yamagishi, N., & Anderson, S. J., “Visually-guided actions are dependent on luminance signals” (*Perception*, 34-2, p. 245), Paper presented at AVA Christmas Meeting 04, Dec 16, 2004, Birmingham, UK, 2004.

II. 自己評価

16 年度は文部科学省在外研究員として英国ロンドン大学に滞在、fMRI を用いた脳機能画像化実験について学ぶ機会を得た。これまで、心理物理学の実験に基づき視知覚の脳内メカニズムを推定する研究を行ってきたが、新たな神経科学的手法を雑事にとらわれず時間をかけて習得することができ、研究上、大きくステップアップできた年であった。新しい取り組みを始めたため、その後の 2 年間も含めて 16-18 年度の具体的な研究成果は必ずしも十分でなかったことは認めざるを得ない。しかし、この期間はそれまでに育んできた共同研究の成果が結実する期間でもなり、いくつかの論文を発表することができた。なお、在外期間中の研究についてはその後の精緻化を経て、18 年度によろやく論文として掲載されはじめた。次年度にかけてさらに数件の研究成果がまとまる予定であり、英国との新たな共同研究も企画中である。この 3 年間を通して、今後の研究教育の布石となる重要な成果を得たと自己評価できる。

田窪行則 (言語学専修教授)

I. 研究業績

【博士論文】

1. 『日本語条件文とモダリティ』、京都大学博士論文、2006 年 3 月

【論文】

1. 「日本語の文構造」、朝倉日本語講座 1 『世界のなかの日本語』 (朝倉書店)、2005 年 6 月, pp. 42-64

2. 「中国語の否定：否定のスコープと焦点」、『中国語学』（日本中国語学会）、2005年10月、pp. 61-71
3. 「感動詞の言語学的位置づけ」、月刊『言語』34. 11（大修館書店）、2005年11月、pp. 14-21
4. “Overt Marker for Individual Sublimation in Japanese”, In: Shibani, M. et al. (eds.) *The History and the Structure of Japanese*, Tokyo: Kurosio Syuppan, 2007, pp. 135-151
5. “Two types of modal auxiliaries in Japanese: two directionalities in inference”, In: McGloin, N. et al. (eds.). *Japanese/Korean Linguistics 15*, Center for the Study of Language and Information, Stanford, 2007, pp. 440-451
6. “Non-veridical Use of Japanese Expressions of Temporal Precedence” (Stefan Kaufmann 氏との共著), In: McGloin, N. et al. (eds.). *Japanese/Korean Linguistics 15*, Center for the Study of Language and Information, Stanford, 2007, pp. 358-369

【学術講演】

A. 査読付きの学会発表

1. “Two types of modal auxiliaries in Japanese: predictive and abductive reasoning”, 9th International Cognitive Linguistics Conference, Yonsei University, Seoul, Korea, July 2005.
2. “Two types of modal auxiliaries in Japanese: two directionalities in inference”, JK15th, University of Wisconsin-Madison, October 2005.
3. “Non-veridical Use of Japanese Expressions of Temporal Precedence” (with Kaufmann, S.), JK15th, University of Wisconsin-Madison, October 2005.

B. 招待による学会発表

1. “Overt Marker for Sublimation”, Oxford-Kobe Seminars: The History and Structure of Japanese, Kobe Institute: Kobe, Japan, September 2004.
2. “Two directionalities in Inference-Evidential and Epistemic Modalities in Japanese”, Philosophical Foundations of Cognitive Linguistics, The University of Tokyo, July 2005.
3. 「中国語の否定：理論言語学からのコメント」、日本中国語学会第54回全国大会、京都大学、2004年11月6-7日

C. 学会での招待講演 (Plenary lectures or Keynote lectures)

1. 「日本語の2種のモーダル助動詞：推論の方向性」、言語処理学会、香川大学、2005年3月15-17日
2. “Conditional Modality in Japanese”, The plenary talk at International conference on Revisiting Japanese Modality, Department of Japan and Korea School of Oriental and African Studies, University of London, 25. 6. 2006.
3. 「推論と認知：言語学の立場から」、第23回日本認知科学会、中京大学、2006年8月3日

D. 招待講演

1. “An Overt Marker for Individual Sublimation: The Case of 'N-no koto' in Japanese”, Cornell University Linguistics Department, 28. 4. 2005.
2. “The Syntax and Semantics of Demonstratives in Japanese”, Cornell University Linguistics Department (delivered in Japanese), 29. 4. 2005.

3. “The Semantics and Syntax of Japanese Demonstratives: An Overview of Past Research”, East Asian Language Program Seminar Rm, 5 Bryant St: The Reischauer Institute of Japanese Studies (delivered in Japanese), 5.5.2005.
4. “Counterparts in Time: The Case of Japanese ‘Imagoro,’ ” The Reischauer Institute of Japanese Studies, 6.5.2005.
5. “Perfective and progressive in Japanese”, Hertford College, Oxford University, 26.6.2006.

II. 自己評価

2004-2006 年度は博士論文完成を中心として活動したため、論文の本数は少ないが、博士論文を完成した。この博士論文の一部は岩波書店から出版される。また、多くの国際学会で論文を発表し、内外で招待講演を行った。Oxford 大学言語学科の博士論文の外部審査委員として論文を審査した。さらに、2005 年 1 月には Language under Uncertainty、2006 年 10 月には Japanese Korean Linguistics Conference を主催した。前者の発表論文は世界でもっとも権威ある形式意味論の学会誌である Journal of Semantics の特別号として出版された。また、後者はスタンフォード大学 CSLI publications からプロシーディングズが刊行された。

全体としてきわめて生産的な活動状況であったと評価することができる。

吉田和彦（言語学専修教授）

I. 研究業績

【著書】

1. *Studies in Anatolian and Indo-European Historical Linguistics (Studies in Old Eurasian Languages 2)*. Graduate School of Letters, Kyoto University. 2004.
2. 『比較言語学の視点 —テキストの読解と分析』、大修館書店、2005 年

【論文】

1. 「インド・ヨーロッパ古文獻に関する覚え書き」、『人文知の新たな総合に向けて』21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書、2004 年、pp. 5-43
2. 「諸言語の文字と日本語の文字」、朝倉日本語講座第 1 巻『世界の中の日本語』（朝倉書店）、2005 年、pp. 65-82
3. “Hittite *li-in-kat-ta* and Similar Spellings”, *Acts of the Vth International Congress of Hittitology (Corum, September 2-6, 2002)*, 2005, pp. 789-795
4. 「象形文字ルウィ語の解読の歴史と現状」、『人文知の新たな総合に向けて』21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第三回報告書、2005 年、pp. 434-439
5. 「校訂をめぐる問題」、『泰山木（財団法人新村出記念財団設立二十五周年記念文集）』、2006 年、pp. 161-164
6. 「印欧語における中・受動態動詞の先史—ヒッタイト語からの新たな根拠—」、『言語研究』130 号、2006 年、pp. 43-82
7. “The morphological history of Hittite mediopassive verbs”, *Festschrift for Jay*

Jasanoff. 2007, pp. 379-395

8. “Some irregular mediopassives in Hittite”, *Proceedings of the Eighteenth Annual UCLA Indo-European Conference (Los Angeles, November 3-4, 2006)*, 2007, pp. 129-141
9. “Hittite *la-ga-a-it-ta-ri*”, *Festschrift for Belkıs and Ali Dinçol*, 2007, pp. 803-806
10. “Hittite *pār-ha-at-ta-ri*”, *Tabularia Hethaeorum (Hethitologische Beiträge für Silvin Košak zum 65. Geburtstag)*, 2007, pp. 714-724
11. 「言語からみたインド・ヨーロッパ世界——多様化と収斂化」、『グローバル化時代の人文科学(上) 対話と寛容の知を求めて』(京都大学学術出版会)、2007年、pp. 171-173

II. 自己評価

上記の研究業績はすべて印欧語比較言語学に関するものである。とりわけヒッタイト語に代表される古代アナトリアの諸言語を研究の中心に据えてきた。その理由は、これらの諸言語の資料の多くは紀元前二千年紀に記録されており、印欧祖語に遡ると考えられる古い文法的特徴を多く保存しているからである。研究を推進していくうえで特に心掛けたのは、いきなり他の印欧諸語との比較分析に進むのではなく、まず問題に関与するデータを包括的に収集整理し、アナトリア語派の内部でのそれらの位置付けを明らかにしようとした点である。これらの成果の多くは、国際学会での発表や招聘外国人学者との意見交換に基づいており、実証性に裏づけられた比較研究として国際的に一定の反応を得ている。しかしながら、印欧語比較研究の分野には依然として未解決な問題が山積しているため、今後もアナトリア諸語を中心にした総合的な比較研究を推進していきたい。

吉田 豊 (言語学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 『コータン出土8-9世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』(神戸市外国語大学研究叢書 第38冊)、神戸、2005

【論文】

1. “Some reflections about the origin of čamuk”, in: T. Moriyasu (ed.), *Aspects of international trades and cultural exchanges as seen from the textual and material remains unearthed from Central Asia*, Osaka, 2004, pp. 127-135.
2. “On the Sogdian version of the Muryōjūkyō 無量寿経 or Larger sukhāvatīvyūha”, inpress.
3. “On the origin of the Sogdian surname Zhaowu 昭武 and related problems”, *Journal Asiatique* 291, 2003 [2004], 35-67.
4. 「シルクロード出土文献における言語変化の年代決定 ウイグル語文献中の借用形式の例から」、『えくすおりえんて』Vol. 11, 2004, pp. 3-34.
5. 「粟特人在中国(歴史, 考古, 言語的新探索)」、『唐代史研究』7, 2004, pp. 240-248.
6. “Sogdian version of the new Xi’an inscription”, in: E. de la Vaissiere and E. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 57-72.

7. 「西安新出史君墓志の粟特文部分考釈」、『粟特人在中国—歴史、考古、語言的新探索』（法国漢学 第十輯）北京，中華書局 2005，pp. 26-42.
8. “The Sogdian fragments of Samghātasūtra in the German Turfan Collection”, (with I. Yakubovitch), in: D. Weber (ed.), *Languages of Iran: Past and present. Iranian studies in memoriam David Neil MacKenzie*, Wiesbaden, 2005, pp. 239-268.
9. 「ソグド語の敬語について」、『中央アジア古文獻の言語学的・文献学的研究』（Contribution to the Studies of Eurasian Languages 10），2006，pp. 81-94.

【書評】

1. “Prods Oktor Skjærvø, with contribution by Ursula Sims-Williams, *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library. A complete catalogue with texts and translations*, London, The British Library, 2002, lxxviii + 609 pp. with 8 plates”, 『神戸市外国語大学論叢』55/7, 2004, pp. 21-33.

【事典の項目等】

1. 『古代オリエント事典』（岩波書店）、2004年12月：「イラン諸語」，「ソグド語」，「パルティア語」，「フワーラズム語」，「バクトリア語」
2. 『中央ユーラシアを知る事典』（平凡社）、2005年4月：「ペンジケント」，「ソグド」，「イスラーム化以前の貨幣」，「イスラーム化以前の中央アジアの文字」，「イスラーム化以前の暦」，「失われた言語」
3. 『週刊シルクロード紀行 No. 13 ペンジケント・ドシャンベ』（週刊朝日百科）、2006年1月：「ソグド商人の時代」，「安祿山」，「ソグド人」，pp. 12-15, 18-19, 22.

【学術講演】

1. 「イスラーム化以前の中央アジアの歴史をめぐる最近の研究動向について—ソグド語資料とバクトリア語資料の発見と研究成果をめぐる—」、日本オリエント学会、九州大学、2005年10月29日
2. 「ソグド語資料とコータン語資料 新発見と再発見」、羽田記念館、2006年11月25日

II. 自己評価

イラン系の言語で現在では死語となっているソグド語の文書や碑文についての文献学的・言語学的研究を従来通り行い、成果を論文の形で発表してきた。加えて、イラン系の別の死語であるコータン語文献についても研究をすすめ、内容の解明を行った。そしてその成果を著書として発表した。この言語について研究を発表するのは新しい取組であった。

最近アフガニスタンで発見されている、イラン系のバクトリア語についての研究も続けているが、論文という形で成果を発表する段階ではない。この方面では新しい研究が発表されつつあり、今後ともその動向を追う必要がある。2004年4月には北京で、2006年3月にはベルリンで研究発表を行ったが、海外での研究発表や資料調査は十分に出来なかった。今後の課題である。平成18年4月に職場が変わった。新しい研究教育環境でどのように教育と研究を進めていくかも今後の課題になっている。

白井聡子（言語学専修講師）

I. 研究業績

【博士論文】

1. 『ダバ語における視点表示システムの研究』（博士論文），京都大学，2006年1月

【論文】

1. 「ロシア所蔵チベット語袖珍本について（1）」、『京都大学言語学研究』第23号，2004年12月，pp. 167-190
2. 「ダバ語メト方言における音素体系と子音連続の相関」、『東ユーラシア言語研究 第1集』，好文出版，2006年3月，pp. 307-323.
3. “The two structures of the noun-modification in Modern Tibetan”，『漢藏語言研究—第三十四届国際漢藏語言暨語言學會議論文集』，民族出版社，2006年3月，pp. 506-514.
4. 「ロシア所蔵チベット語訳陀羅尼經に見る言語特徴」，白井聡子・庄垣内正弘（編）『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』（CSEL10）（京都大学），2006年3月，pp. 157-180.
5. “Analysis of multiple existential sentences in nDrapa”，『庄垣内正弘先生退任記念論集 ユーラシア諸言語の研究』，2006年4月，pp. 145-173.
6. 「ダバ語メト方言」，中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—1』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所），2006年9月，pp. 119-148
7. 「ダバ語における『視点』を示す二系列の助動詞」、『京都大学文学部研究紀要』第46号、2007年3月、pp. 267-341

【学術講演】

1. 「日本人の研究者から見た中国の多民族社会—四川省甘孜チベット族自治州道孚県の多言語社会」，堺・南大阪地域学研究会，大阪府立大学，2006年1月23日

II. 自己評価

ダバ語メト方言の記述研究を中心とし，ダバ語と系統的にも社会言語学的にも関係の深いチベット語についても研究をおこなっている。

ダバ語は，中国四川省西部の少数民族地帯で話される，チベット=ビルマ系の無文字言語で，先行研究は非常に少ない。白井は四川省甘孜藏族自治州道孚県において，同県仲尼郷麻中村で話される方言（メト方言）について現地調査を行い，記述言語学的研究を進めてきた。博士論文の第1章および（6）は，ダバ語メト方言の全体像を初めて明らかにしたものである。この言語における視点表示システムを中心に扱った博士論文，多様な存在動詞を扱った（5）は，言語類型論的な観点からも注目されている。

11世紀のチベット語木版印刷資料を扱った（1），（4）においては，古チベット語から古典チベット語への変遷過程が示され，チベット語の歴史的研究において重要な意義を持つものとなっている。

今後は，ダバ語だけでなく周辺の言語についても記述を進めるほか，研究成果を審査のある学術雑誌に投稿してより広く公開していくことが求められるだろう。

松田素二（社会学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『ミクロ人類学の実践 エイジェンシー/ネットワーク・身体』（田中雅一と共編著）、世界思想社、2006年11月

【論文】

1. 「国勢調査と民族生成—ケニア」、青柳真智子編『国勢調査の人類学』（古今書院）、2004年4月、pp. 251-266
2. 「変異する共同体」、『文化人類学研究』第69巻2号、2004年9月、pp. 247-270
3. 「フィールドワークとリアリティ：東アフリカ都市調査の経験から」、『京都社会学年報』第12号、2004年12月、pp. 1-21
4. 「人種的共同性の再評価のために—黒人性再創造運動の経験から」、『人種概念の普遍性を問う：西洋的パラダイムを超えて』竹沢泰子編（人文書院）、2005年2月、pp. 390-414
5. 「都市性への挑戦—『貧困の文化』から学ぶ」、山下晋司編『文化人類学—古典と現代をつなぐ20のモデル』（弘文堂）、2005年4月、pp. 191-205
6. “Recapturing the city: Everyday life Practices of Maragoli migrants in Nairobi”, in: *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*, ed. A. Tanabe, Kyoto University Press/ Transpacific Press, 2005年6月、pp. 171-193.
7. 「土地の正しい所有者は誰か—東アフリカ・マサイ人の土地返還要求運動の事例から」、『環境社会学研究』11号（有斐閣）、2005年10月、pp. 70-89
8. 「世代を継いでライフヒストリーを聞き取る—アフリカ調査の経験から」、桜井厚、小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー 質的調査入門』（せりか書房）、2005年12月、pp. 202-210
9. 「フィールドワーク型調査と社会学教育」、『社会学者は誰に何を教えどんな人を創っていくのか』科学研究費報告書（第一分冊）、社会学教育研究会、2006年2月、pp. 99-106
10. “Reconciliation and Redress in Post-colonial East Asia: Creativity of Narrative of Suffering”, *New Currents in Asian Studies in/Between National Boundaries*, Kyujanggak Institute for Korean Studies, Seoul National University, 2006年6月、pp. 60-85.
11. 「セルフの人類学に向けて—遍在する個人性の可能性」、田中・松田編『ミクロ人類学の実践』（世界思想社）、2006年11月、pp. 380-405
12. 「過去の傷はいかにして癒されるか：被害を物語る力の可能性」、棚瀬孝雄編『市民社会と責任』（有斐閣）、2007年3月
13. 「グローバル化時代の人文学—アフリカからの挑戦」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学(上)』（文学部創立百周年記念論集）（京都大学学術出版会）、2007年3月、pp. 118-145
14. “Overcoming of Predicament of Social Research”, in: Furukawa. A. (ed.), *Social Research for Happiness*, Pan-Pacific Press, 2007年3月

【学術講演】

1. 「アフリカの歴史と社会から何を学ぶのか」、日本アフリカ学会第40回学術大会 記念講演、島根大学、2003年5月31日

2. 特別講演「異なる経験世界をつなぐ過程としてのフィールドワーク」、京大 21 世紀 COE シンポジウム「フィールドワークから紡ぎ出す—発見と分析のプロセス」特別講演、京都大学、2004 年 10 月 30-31 日
3. 「現代社会における寛容性」、「寛容性に関する日中若手ワークショップ」基調講演、上海第二工業大学・外国語学院、2005 年 11 月 3-6 日
4. 「フィールドワークにおける介入・ポジショナリティ・ジェンダー：アフリカ調査の経験から」、21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」ワークショップ：フィールドワークとジェンダー 基調講演、お茶の水大学、2006 年 12 月 22-23 日

II. 自己評価

この三年間の研究領域は、三つの領域に大別できる。それは、第一には植民地化のエスノヒストリーや紛争と和解の問題解明に力点をおいたアフリカ地域研究であり、第二には、社会文化理論の領域における主体とセルフに関する研究である。さらに第三はフィールドワークの方法論をめぐる研究である。

この期間研究の特徴は、徹底した日常性への依拠であり、これまで取るに足らぬ世界とされてきた普通の生活者の生活世界のなかに、圧倒的に強力な権力へのレジスタンスや、社会保障、世界観形成、経済再生などにまつわる可能性が秘められていることを明らかにし、日常性のダイナミズム研究という領域を異文化研究のなかに確立した。また長期のフィールドワークに裏付けられた研究から、独自のフィールドワーク論が生み出された。他者を表象する権力批判の嵐のなかで、方法的反省を迫られた 1980 年代以降、人類学はフィールドワークの困難の時代を迎えてきたが、この研究では「歴然として存在する構造的差異を認め、両者の関係性の切断のうえに、「生活のふれあいを通じて現実を学び取る」という理解の可能性」を追求する共感のフィールドワークと呼ばれる方法で、閉塞状況に、ある種の突破口を開こうと試み一定の成果をあげた。

落合恵美子（社会学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. *21 Segi Gajokege: Ilbon wi Gajok goa Sahoe* (『21 世紀家族へ』韓国語訳). Seoul: Yangseowon, 2004.
2. 『21 世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた・超え方（第 3 版）』、有斐閣、2004
3. 『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話』（編著）、ミネルヴァ書房、2006
4. 『アジアの家族とジェンダー』（山根真理・宮坂靖子と共編著）、勁草書房、2007

【論文】

1. 「歴史人口学から見た家・村・ライフコース—小農社会論としての家・村論再考」、日本村落研究会編『年報村落社会研究』第 39 集、農山漁村文化協会、2004、pp. 49-96
2. 「中国明代黄冊の歴史人口学的分析—万曆徽州黄冊底籍に見る世帯・婚姻・承継—」（周紹泉・侯楊方と共著）、佐藤康行編『変貌する東アジアの家族』（早稲田大学出版会）、2004、pp. 110-141

3. “Post War Transition in the Japanese Family,” Toshiko Tsukaguchi-le Grand and Carl le Grand eds., *Women in Japan and Sweden: Work and Family in Two Welfare Regimes*, Stockholm: Stockholm University, 2004, pp.137-166.
4. “Family and Community Standards,” (co-authorship with James Lee, Tommy Bengtsson, Cameron Campbell, Marco Breschi and Michel Oris), Tommy Bengtsson, Cameron Campbell and James Lee eds., *Life Under Pressure: Mortality and Living Standards in Europe and Asia, 1700-1900*, Boston: MIT Press, 2004, pp. 85-105.
5. 「明代黄冊底籍中の人口与家庭—以万曆徽州黄冊底籍為中心」(周紹泉・侯楊方と共著)、張国剛主編『家庭史研究的新視野』(北京:三聯書店)、2004、pp. 218-261
6. 「変容するアジア社会における育児ネットワークとジェンダー:中国、タイ、シンガポール、台湾、韓国、日本」(山根真理(・宮坂靖子・周維宏・斧出節子・木脇奈智子・藤田道代・洪上旭と共著)、『教育学研究』71-4、2004、pp. 2-18
7. 「100歳女性のライフヒストリー—九州海村の恋と生活」、京都社会学年報 Vol.12、2004、pp. 57-95
8. 「現代アジアにおける主婦の誕生—グローバル化と近代家族」、『日本学報』第24号(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室)、2005、pp. 3-28
9. 「世界のなかの戦後日本家族」、歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座第10巻戦後日本論』(東京大学出版会)、2005、pp. 159-96
10. “The *ie* in global perspective,” Jennifer Robertson ed., *Companion to the Anthropology of Japan*, Oxford: Blackwell, 2005, pp. 335-379
11. 「日本の女性雑誌に見る女性の表象—ジェンダーとセクシュアリティの戦後体制」(韓国語)、『美術史論壇』20(韓国美術研究所)、2005、pp. 447-75
12. 「ユーラシアプロジェクトの達成—歴史人口学と家族史」、『社会科学研究』(東京大学社会科学研究所)、2006、pp.57-80
13. 「徳川日本のライフコース」、落合恵美子編『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話』(ミネルヴァ書房)、2006、pp. 448+5
14. 「高齢者の『子ども』との同居」、落合恵美子編『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話』(ミネルヴァ書房)、2006、pp.183-205
15. 「変容するアジア家族とジェンダー—5地域比較調査から」、北原淳他編『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—』(実証編)(文化書房博文社)、2006、pp. 139-159
16. 「アジアの家族とジェンダーを見る視点—理論と方法」(山根真理・宮坂靖子と共著)、落合他編『アジアの家族とジェンダー』(勁草書房)、2007、pp. 1-27
17. 「アジアの家族とジェンダーの地域間比較—多様性と共通性」(山根真理・宮坂靖子と共著)、落合他編『アジアの家族とジェンダー』(勁草書房)、2007、pp. 285-310
18. 「中国の高齢者」(周維宏と共著)、落合他編『アジアの家族とジェンダー』(勁草書房)、2007、pp. 121-142
19. 「アジア市民社会における家族とジェンダー—『第2の近代』の岐路」、棚瀬孝雄編『市民社会と法』(ミネルヴァ書房)、2007、pp. 126-144
20. “The Postwar Japanese Family System in Global Perspective: Familism, Low Fertility, and Gender Roles,” *U.S.-Japan Women's Journal*, 29. 2007, pp. 3-36

【学術講演】

1. “Restructuring family networks in the era of modernization and globalization: population bonus and the experience of Japan and other Asian societies,” presented at the East Asia Programme, Institute of Chinese Studies, CSDS Conference on ‘Lines of Convergence: India-China-Japan and the Future of Asia’ held in Delhi, December 13-14, 2006.
2. 「グローバル化する家族」、経済学会公開シンポジウム「共同体・家族・親密圏と資本主義」、同志社大学、2006年11月24日
3. “Restructuring family networks in the era of modernization and globalization: the experience of Japan and other Asian societies,” a keynote speech in the Korean Social History Association annual meeting held in Daejeon, November 17-18, 2006.
4. “Feminization of migration and cross-border marriages in Japan” (co-authorship with Yoshitaka Ishikawa and Kao-lee Liaw), presented at the IIAS-Academia Sinica Conference on ‘Intermediated Cross-border Marriages in Asia and Europe’ held in Taipei, September 18-20, 2006.
5. “Gender roles and childcare networks in East and Southeast Asian societies” , presented at the 8-country coordinators’ workshop, Ewha Womans University, Seoul, June 26, 2006.
6. “The postwar Japanese family system in global perspective: familism, low fertility and gender roles,” presented at the Strasbourg University, 2006.
7. “The postwar Japanese family system in global perspective: familism, low fertility and gender roles,” presented at ESOPP, Paris, April 27, 2006.
8. “The postwar Japanese family system in global perspective: familism, low fertility and gender roles,” presented at EHESS, Paris, April 26, 2006.
9. “Postwar Housewifization of the Japanese Woman in Comparative Perspective,” presented at the University of Geneva, Geneva, April 5, 2006.
10. “Family and lifecourse in three Japanese demo-family systems: testing the peasant family hypothesis,” presented at EHESS, Paris, March 30, 2006.
11. “Family and Gender Role Changes in East and Southeast Asia,” 国際シンポジウム「アジア女性のエンパワメントと女性研究・女性高等教育の課題」、日本女子大学、2006
12. 「人口減少社会のキーワード『女性』と『世界』」、厚生政策セミナー、東京・国連大学、2006年1月17日
13. “Family and Gender Role Changes in East and Southeast Asia,” presented at the East Asia Programme, Institute of Chinese Studies, CSDS Conference on ‘Lines of Convergence: India-China-Japan and the Future of Asia’ held in Tokyo, March 6-7, 2006.
14. 「ジェンダーをめぐる伝統と近代と『創造された伝統』」、四国学院大学、2005年10月2日
15. “Family and Gender Role Changes in East and Southeast Asia,” presented at the 2005 Asian Women’s Forum for Peace, Gwangju, October 25-7, 2005.
16. “Family and Gender Role Changes in East and Southeast Asia,” presented at the JSPS-NRCT Core Program Workshop ‘Changing Families in East Asia,’ Kyoto University, October 15, 2005.

17. “The postwar Japanese family system in global perspective: familism, low fertility and gender roles,” presented at the Autumn Seminar of the ‘The East and the Idea of Europe,’ the University of Jyväskylä, Jyväskylä, August 22, 2005.
18. “The postwar Japanese family system in global perspective: familism, low fertility and gender roles,” presented at Seoul National University, August 16, 2005.
19. “Gender Role Changes and Modernization in East and Southeast Asian Societies: The Birth of the Housewife in Contemporary Asia,” presented at the conference ‘Womens World 2005’ held in Ewha Womans University, Seoul, June 21, 2005.
20. “Gender roles and childcare networks in East and Southeast Asian societies” (co-authorship with Mari Yamane, Setsuko Onode, Nachiko Kiwaki, Michiyo Fujita, Weihong Zhou, Kua Wongboonsin, Sang-ook Hong, Keong-suk Park), presented at the 57th Annual Meeting of the Association for Asian Studies, Chicago, March 31- April 3, 2005.
21. “Reconsidérant l’ie, la famille-souche au Japon,” Journée d’ études ‘La famille dans une perspective comparative,’ Maison franco-japonaise, 28 Octobre, 2004.
22. 「アジア市民社会における家族とジェンダー——『第2の近代』の岐路」、日韓シンポジウム「市民社会の生成と法の役割」、京都大学、2004年10月2-3日
23. “Childcare Support and Gender Roles in East and Southeast Asian Societies”, (co-authorship with Mari Yamane et al.), the 36th World Congress in Beijing, the International Institute of Sociology, Beijing, July 9, 2004.

II. 自己評価

2003年に京都大学に着任してより、研究条件と同僚からの刺激に恵まれて、以前よりも早いペースで研究成果が上げることができるようになった。3年間で著書・編著書4冊、論文20本、学術講演23回というのは、わたしとしてはこれまでで最も多い。以下には挙げなかったが、『アジアの家族とジェンダー』の姉妹編として2006年に『21世紀アジア家族』（上野加代子と共編著、明石書店）を一般書として刊行している。この3年間は、これまでに続けてきた2つの共同研究プロジェクト（歴史人口学と現代アジア家族比較研究）の収穫期に当たっているということも、成果が上がった理由であろう。2冊の編著書（と上記の姉妹編）はその成果であり、さらに4冊の編著書を準備中である。英語での学術講演が多いのに比して、英語での出版が少なめなのが気になるが、準備中の編著書のうち2冊は英語なので、口頭発表した英語論文はそれらに収録される予定である。次はそれぞれのプロジェクトの成果にもとづいて単著を書くことを目標としたい。

伊藤公雄（社会学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『新版 ジェンダーで学ぶ社会学』（牟田和恵と共編）、世界思想社、2006年
2. *International Encyclopedia of Men & Masculinities*, edited by Flood, M., Gardiner, J. K., Pease

B., & K. Pringle, Routledge. (編集委員として項目執筆)、2007、706pp.

【論文】

1. 「戦後男の子文化のなかの『戦争』」、中久郎編『戦後社会のなかの戦争』（世界思想社）、2004、pp. 151-179
2. 「Teaching Sociology—社会学教育の方法をめぐって」、関西社会学会『フォーラム現代社会学』第3号（世界思想社）、2004、pp. 54-64
3. 「イタリア・ファシズムと〈男らしさ〉」、『現代のエスプリ』446号、2004、pp. 118-127
4. 「学術の総点検」、原ひろ子・蓮見音彦・池内了・柏木恵子編『ジェンダー問題と学術』（ドメス出版）、2004、pp. 31-38
5. 「ヘイト／フォビアの構図」、『インパクト』143号（インパクト出版会）、2004、pp. 28-37
6. 「戦後日本社会における『戦争』と『死』」、阪大フォーラム実行委員会編『日本、もうひとつの顔』（大阪大学21世紀COEプログラム『インターフェイスの人文科学』）、2004、pp. 100-111
7. 「人口減少時代の男性／女性の生活スタイル」、『発達』第101号（ミネルヴァ書房）、2004、pp. 74-80
8. 「イメージとしての社会学」、関西社会学会編『フォーラム現代社会学』第4号（世界思想社）、2005、pp. 5-9
9. 「解釈と実践—カルチュラル・スタディーズの射程」、盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編『〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法（下）』（勁草書房）、2005、pp. 145-164
10. “An introduction to men’s studies” in: Maclelland, M. and R. Dasgupta (eds.), *Genders, Transgenders and Sexualities in Japan*, Routledge, 2005, pp. 145-152.
11. 「海外における日本のポピュラーカルチャー受容研究のたつめに」、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書『イメージとしての〈日本〉05』（責任編集：伊藤公雄）、2005、pp. I-VIII
12. 「男性にとっての男女共同参画」、『部落解放』7月号（解放出版）、2006、pp. 45-53
13. 「『過程』と『媒介』の思想—アントニオ・グラムシの視座」、大橋良介・高橋三郎・高橋由典編『学問の小径』（世界思想社）、2006、pp. 249-263
14. 「ジェンダーの視点で見た日本とイタリア」、日本ジェンダー学会『日本ジェンダー研究』第10号、2006、pp. 75-79
15. 「プロジェクトとしての『イメージとしての〈日本〉』」、大阪大学21世紀COEプログラム『インターフェイスの人文科学』編『イメージとしての〈日本〉06』、2006、pp. 1-7.

【学術講演・シンポジウム】

1. “La ‘guerre’ et la ‘mort’ dans la culture populaire d’ apres-guerre au Japon”, Forum 2004 de L’ Universite d’ Osaka a Strasbourg, 2004.
2. “Sexuality and Violence in Japanese Popular Culture: Focusing on Boys’ Culture”, *Imaging Japan : Symposium*, Japanese Studies Center at Monash University, 2005.
3. International Symposium on Trafficking in Persons, at U Thant Conference Hall, United Nations University, 2006. (主催：外務省、独立行政法人国立女性教育会館、国際移住機構) (パネルとして参加報告)
4. “Fascismo/Nazione-stato/Mascolnita”, Roma University, 2005.

II. 自己評価

2004-2006年においては、主に、ジェンダー研究、社会学教育の方法論研究、文化研究にかかわる研究を継続した。ジェンダー研究分野においては、多数の論文発表や講演・報告などとともに、内閣府男女共同参画会議専門調査会委員（基本問題専門調査会および女性に対する暴力に関する専門調査会）として、また内閣府「男女共同参画社会の将来像検討会」（03-04年）の副座長として、政府の男女共同参画政策の推進に関与した。さらに、日本学術会議社会学委員会ジェンダー部会副委員長として、学術分野におけるジェンダー学の位置づけと豊富化のための活動を進めつつある。社会学教育については、関西社会学会研究活動委員として、3年間にわたり社会学教育の内容と方法についてのシンポジウムを企画運営し、曲がり角にある社会学教育についての点検と今後の方向性を探る作業を深化させた。文化研究の分野においては、前任校である大阪大学のCOE『インターフェイスの人文学』『イメージとしての<日本>』班のプロジェクト・リーダーとして、日本のポピュラーカルチャー研究やその海外受容についての国際シンポジウムを数度にわたり開催するとともに、複数の報告書を責任者として編集、発行した。これらの報告書に対しては、海外の多くの日本文化研究者から高い評価を受けている。他にも、現代日本社会分析や社会学理論について多くの論文を発表しており、特に論文5は、朝日新聞論壇時評欄2004年の「今年の3本」に選定されている。

田中紀行（社会学専修助教授）

【編著書】

1. 『京都大学文学部の百年』（編著）、京都大学大学院文学研究科、2006年6月

【論文】

1. 「歴史社会学の展開と展望」、『社会学史研究』第27号、2005年6月
2. 「行為の意味-ヴェーバー『社会学の基礎概念』」、井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス』第1巻『自己・他者・関係』（世界思想社）、2007年3月刊行予定

【学術講演】

1. 「歴史社会学の展開と展望」、日本社会学史学会第44回大会シンポジウム、日本女子大学、2004年6月27日
2. 「ヴェーバーとブルデュー」、京都大学大学院文学研究科主催のシンポジウム「マックス・ヴェーバーと現代社会-ヴェーバー的視座の現代的展開」、京都大学大学院文学研究科、2006年3月18日
3. 「『ヴェーバー・パラダイム』をめぐる諸問題」、京都哲学会公開講演会、京都大学大学院文学研究科、2006年11月4日

II. 自己評価

これまで主として①マックス・ヴェーバーを中心とする社会学史の研究と②大学知識人の歴史社会学という2つのテーマで研究を進めてきたが、この3年間は次第に②から①へ重点を移してきた。①に関しては、2006年にヴェーバーに関する国際シンポジウムの企画と報告をする機会があり、これを機にヴェーバー社会学の現代社会学理論への継承の可能性について、近年

のドイツにおけるヴェーバー研究の動向を参照しながら再考する作業に着手したところである。また②に関連して、文学部創立100周年記念事業の一環として企画された記念誌の編集と執筆の機会を与えられたが、この時に収集した資料は文学部100年史の執筆に利用しただけで、これを歴史社会学的研究に活用することは残念ながらできなかった。いずれについても過去3年間には十分に研究成果を公表するに至っておらず、それをまとめることが今後の課題として残されている。

金田章裕（地理学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『世界遺産で知ろう世界の国々』（湯川晴雄と共著），文英堂，2004年
2. 『宮津市史 絵図編』，宮津市，2005年
3. 『平安京一京都の都市図・都市構造に関する比較統合研究とデジタルデータベースの構築』，科研報告書，2005年
4. 『日本の地誌8 近畿圏』（石川義孝と共編），朝倉書店，2006年
5. 『中学社会 地理的分野』，大阪書籍，2006年
6. 『平安京一京都，都市図と都市構造』，京都大学学術出版会，2007年2月

【論文】

1. 「浄水寺碑文記載の条里と寺領」，熊本県豊野町教育委員会編・刊『肥後国浄水寺古碑群』，2004年，pp. 61-72
2. 「古代の郡・郷と村についての覚え書き」，『日本歴史』668号，2004年，pp. 126-133
3. 「条里プランと古代都市研究の20年—立地・形態と機能・構造—」，『条里制・古代都市研究』20，2004年，pp. 1-36
4. 「歴史地理学からみた近江の宮と都」，大津市歴史博物館編『近江・大津になぜ都はいとなまれたのか』（サンライズ出版），2004年，pp. 109-136
5. 「西大寺関係古地図と条里・条坊プランの表現」，佐藤信編『西大寺古絵図の世界』（東京大学出版会），2005年，pp. 267-274
6. “Sayama-Ike and the Japanese experience: Traditional irrigation systems and problems of modernization”，in: R. Coopey et. al. eds., *A History of Water Issues*, United Nations University, 2005, pp. 35-47.
7. 「東海の土木技術—治水・開拓・灌漑—」，森浩一編『水とまつりの古代史』（大巧社），2005年，pp. 29-60
8. 「明治の地籍図」「大字・小字図」，金田章裕・宮津市史編さん委員会編『宮津市史 絵図編（解説）』，2005年，pp. 181-200・201-208
9. 「オーストラリアのワインとワイナリー」，小山修三編『世界の食文化 7 オーストラリア・ニュージーランド』（農文協），2005年，pp. 102-117
10. 「国府の景観と文学における表現」，『上代文学』97，2006年，pp. 1-16
11. 「北山杉林業景観の特性」，金田章裕編『文化的景観（北山杉の林業景観）保存・活用事業

- 報告書』（文化庁・京都市文化刊行資源保護財団），2006年，pp. 11-15
12. 「文化的景観としての北山杉林業景観」，同上，pp. 116-118
 13. 「『条里制』研究から何が見えるか—景観史構築への道程—」，水内俊雄編『歴史と空間』（朝倉書店），2006年，pp. 15-39
 14. 「琵琶湖・淀川水系の港津地名」，『季刊 河川レビュー』No. 134（新公論社），2006年，pp. 32-37
 15. 「文化的景観の概念と意義」，『季刊 まちづくり』11，2006年，pp. 20-21
 16. 「共同研究の意義と課題」，『日本の歴史』693，2006年，pp. 1-6
 17. 「大学改革と人文学の課題」，『IDE 現代の高等教育』No. 485，2006年，pp. 4-9
 18. 「小字地名の成立過程」，『地名研究』4（京都地名研究会），2006年，pp. 2-14
 19. 「位置と領域」，金田・石川編『日本の地誌8 近畿圏』（朝倉書店），2006年，pp. 4-7
 20. 「清水山城館跡現況調査の成果」，『清水山城館跡現況調査報告書I』（高島市教育委員会），2006年，pp. 1-7
 21. 「都市図と都市構造への接近」，金田章裕編『平安京—京都都市図・都市構造』（京都大学学術出版会），2007年，pp. 233-236
 22. 「平安京—京都の特性と本書のねらい」，同上，pp. 1-16
 23. 「平安京 左・右京図について」，同上，pp. 19-39
 24. 「ガリバーからゴールドラッシュへ—英国の世界認識と世界覇権をめぐる—」，紀平英作編『グローバル化時代の人文学（上）』（京都大学学術出版会），2007年，pp. 250-280
 25. 「『新訂万国全図』の編集過程をめぐる」，藤井譲治ほか編『大地の肖像』（京都大学学術出版会），2007年，pp. 345-364

II. 自己評価

この期間の研究業績については極めて不満が多い。本来であればこの間、さらに著書2冊程度を刊行すべきであったが、雑事にとり紛れて果たせなかった。

この3年間は、古地図研究・文化的景観研究・オーストラリア研究において、若干の蓄積をすることができ、特に京都図研究においては科学研究による共同研究を終了し、その報告書を刊行すると共に、その一部を補訂して単行書として出版（2007年2月）することが可能になったのがせめてもの慰めである。

このような自己評価を強いられるに際して痛感するのは、静かな研究環境が保たれなくなってきた現況に対する疑問である。人文学はとりわけ長期的な取り組みを必要とする（金田「大学改革と人文学の課題」2006年）のであり、人文学にかかわる研究者によるシステムの再構築を必要とするように思える。

石川義孝（地理学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『アジア太平洋地域の人口移動』（編著）、明石書店、2005、400頁

2. 『日本の地誌 8 近畿圏』（金田章裕と共編著）、朝倉書店、2006、563 頁

【論文】

1. 「「楽園」を求めて—日本人の国際引退移動—」（久保智祥と共著）、『人文地理』56(3)、2004、pp. 296-309
2. 「岩手県胆江地方における産業と人口—1970 年代以後の再生の歩み—」、金田章裕・藤井正編『散村・小都市群の動態と構造』（京都大学学術出版会）、2004、pp. 111-131
3. 「国内・国際人口移動論」、杉浦芳夫編『空間の経済地理』（シリーズ人文地理学 第 6 巻）（朝倉書店）、2004、pp. 128-151
4. 「外国人関係の 2 統計の比較」、『人口学研究』37、2005、pp. 83-94
5. 「<年間展望>人口」、『人文地理』57(3)、2005、pp. 294-296
6. 「国際人口移動の概観」、『地理の研究』74、2006、pp. 8-15

II. 自己評価

ここ数年の研究テーマである国境を越える人の移動に関する業績は、「人文地理」や「人口学研究」といった専門雑誌に査読付き論文として掲載されており、研究の成果の発表は順調と考えている。また、2005 年に大部の編著として刊行された『アジア太平洋地域の人口移動』は、この地域における人の移動を広汎に扱い、人の空間的移動の多様性とその意義を詳述した貴重な成果と自負している。2006 年に刊行された編著『日本の地誌 8 近畿圏』は、50 人以上の執筆者を動員してまとめられた、近畿地方に関する久々の詳細な地誌であり、地理学者の重要な社会的貢献とみなせる。他にも、入門的な文献や国内の地域調査に基づいたモノグラフも発表している。総じて、斯学の発展に結びつく研究活動を着実にやっている、と自己評価している。

杉浦和子（地理学専修教授）

I. 研究業績

※研究活動は、「田中和子」名義で行っているが、研究助成金等の報告書については「杉浦和子」で提出している。

【著書・編著書】

1. 「近現代期京都の富裕層と都市空間構造」、金田章裕編著『平安京—京都の都市図と都市構造』（京都大学出版会）、2007、pp. 211-231
2. 『人の移動・流動からみた都市空間構造の動態モデルの構築』、平成 16～18 年度科学研究費研究成果報告書、2007、148pp.
3. 『地域資源管理の手法に基づく中山間地域の総合的な環境保全戦略の提言—平成 16 年 7 月福井豪雨による災害復旧・復興対策を組み入れて—』（編著）、平成 17 年度旭硝子財団研究助成報告書、2006、123pp.
4. 『福井県における中山間地域の内部格差の要因分析と総合的環境保全の提言』、2003 年度鹿島学術振興財団研究助成報告書、2005、153pp.
5. 「オーストラリア、アデレード都市圏における人口移動の距離と方向—「場の効果」概念を用いた分析—」、石川義孝編著『アジア太平洋地域の人口移動』（明石書店）、2005、pp. 97-121

【論文】

1. 「平成 16 年 7 月福井豪雨による農地被害と復旧状況—南越・丹生地区における農業集落間の格差—」、『日本海地域の自然と環境』第 13 号、2006、pp. 29-54
2. 「人口漸減都市における移動行動の男女差—福井市の住民異動届データを用いて—」、石川義孝編著『人口停滞・減少時代における新しい人口地理学の構築』（平成 15～17 年度科学研究費報告書）、2006、pp. 73-91
3. “The impact of disaster education on public preparation and mitigation for earthquakes: a cross-country comparison between Fukui, Japan and the San Francisco Bay Area, California, USA”, *Applied Geography*, Vol. 25, 2005, pp. 201-205.
4. 「近現代期における京都の都市空間構造—富裕層の分布の変遷を中心に—」、金田章裕編著『平安京—京都の都市図・都市構造に関する比較統合研究とデジタルデータベースの構築』（平成 14～16 年度科学研究費報告書）、2005、pp. 167-187
5. 「空間的自己相関分析による農業集落の「近傍圏」の抽出とその意義—福井県南越地区・丹生地区の中山間地域を対象に—」、杉浦和子編著『福井県における中山間地域の内部格差の要因分析と総合的環境保全の提言』（2003 年度鹿島学術振興 財団研究助成報告書）、2005、pp. 5-35
6. 田中和子・高芝和紀・服部勇「鯖江市における街区公園の利用実態に関する調査報告—都市と公園と住民の関係に注目して—」、『日本海地域の自然と環境』第 11 号、2004、pp. 79-95

II. 自己評価

民間団体からの研究助成（3 件）と科学研究費（3 件）によるプロジェクトの遂行と連動させる形で、都市構造、人口移動、防災という 3 つのテーマを中心に調査・研究を行った。京都における新富裕層の誕生と郊外形成についての実証研究（著書 1）、人間行動に対する空間の幾何学的制約性を析出する手法の提案（著書 5）、日米における平素の防災準備の比較分析（論文 3）は、それぞれの分野の研究に新しい面を開拓する成果であると評価する。

ただし、プロジェクトの枠の中で成果を求められる研究は、論文執筆が課されることが成果を出すことに貢献する反面、研究テーマと時間の制約が大変厳しい。とくに、民間団体による研究助成の場合、その傾向が顕著である。

現在および今後の課題は、収集した多種の資料（データ）をじっくり分析すること、自由な発想での萌芽的な研究テーマに取り組む余裕を持つことである。

米家泰作（地理学専修助教授）

I. 研究業績

【訳書】

1. B・グレーム, C・ナッシュ著『モダニティの歴史地理』（共訳）、古今書院、2005 年 5 月、370pp.

【論文】

1. 「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」, 『史林』88-1, 2005年1月, pp.126-158
2. 「近世出羽国における焼畑の検地・経営・農法—村山郡のカノを中心に—」, 『歴史地理学』47-2, 2005年3月, pp.1-23
3. 「<山村>概念の歴史性—その視点と表象をめぐって—」, 『民衆史研究』69, 2005年5月, pp.3-20
4. “Colonial environmentalism and shifting cultivation in Korea: Japanese mapping, research and representation”, *Geographical Review of Japan* (『地理学評論』), 79(5), 2006年10月, pp.664-679.

【学術講演】

1. 「植民地における森林資源の調査と表象—朝鮮総督府作成『朝鮮林野分布図』をめぐって—」, 第10回地図史フォーラム in 神戸, 2004年10月
2. 「<山村>概念の歴史性—その視点と表象をめぐって—」, 民衆史研究会大会, 2004年11月
3. 「紀伊山地の焼畑とその歴史地理」, 東北芸術工科大学東北文化研究センター・オープンリサーチセンター整備事業総括研究会, 2006年8月11日

II. 自己評価

当該期間の研究成果は、大きく2つのテーマに区分される。1つは、ここ10年間継続している近世日本の山村と焼畑に関する歴史地理学的研究である。もう1つは、英語圏の歴史地理学の動向を摂取しつつ、近代日本の植民地の歴史地理という新しいテーマを開拓することである。前者については、新たな事例として山形県（出羽国）の焼畑を近世における変容を扱うことができた。加えて、これまでの成果を踏まえて日本史学や民俗学との学際的な場での報告や共同研究に参加する機会があり、大いに学問的刺激を受けることができた。後者については、新しい研究対象に着手し、その最初の研究成果を英文で出すこともできた。いずれも、研究活動は順調に進めることができたと評価され、来年度以降も研究計画は継続する予定である。

〔現代文化学専攻〕

伊藤和行（科学哲学科学史専修教授）

I. 研究業績

【論文】

1. 「落下法則—古典力学の誕生と数学」, 『人文知の新たな総合に向けて』（京都大学文学研究科）, 2004年, pp.45-53
2. 「オイラーの運動方程式」, 『科学哲学科学史研究』第1号, 2006年, pp.153-169
3. 「フォン・ノイマンと科学計算コンピュータ（1）—EDVACからIASコンピュータへ—」, 『実証段階におけるカオス研究の哲学的考察』（平成16・17年度科学研究費補助金：基盤研究(C)研究成果報告書）, 2006年3月発行, pp.1-10

【学術講演】

1. 「ガリレオの落下法則」, 東京: 国立科学博物館, 2005年7月23日

II. 自己評価

平成16年度以降の研究は, 主として2つのテーマに関して行なってきた. 第1は, ガリレオとオイラーを中心とした, 17世紀および18世紀に古典力学の発展過程に関する研究であり, 第2は, 1940年代を中心としたデジタル・コンピュータの誕生に関する研究である. 第1のテーマは, 継続して研究している問題であり, ガリレオの力学に関する研究から, ニュートンからオイラーに至る期間における古典力学の発展に研究の中心を進めている. とくに運動方程式の定式化によって知られるレオンハルト・オイラーにおける運動方程式の発展を考察した. その成果は「オイラーの運動方程式」においてまとめられているが, ヨハン・ベルヌーイらオイラー以前の研究の影響, また流体力学という重要な分野が今回の研究では視野に入っておらず, それらに関する検討が必要である. 第2のテーマに関しては, プログラム内蔵コンピュータの概念で知られるフォン・ノイマンを中心に考察を進め, 彼がコンピュータを考案した動機である物理的問題の数値解析とコンピュータ理論の関係について「フォン・ノイマンと科学計算コンピュータ(1)」においてまとめた. しかしそこでの考察はノイマンのコンピュータ理論の基盤となったチューリングの機械計算理論との関係の検討がなされていない点で不十分であり, 今後チューリングに関する研究を進めていく予定である.

林 晋 (情報・史科学専修教授)

I. 研究業績

【著訳書】

1. K. ゲーデル著『不完全性定理』(八杉満利子と翻訳・解説)、岩波書店(岩波文庫)、2006年9月15日、訳文48pp., 解説237pp.

【論文】

1. Akama, Y., Berardi, S., Hayashi, S., Kohlenbach, U., “An Arithmetical Hierarchy of the Law of Excluded Middle and Related Principles”, *Proceedings of IEEE Annual meeting, Logic in Computer Science 2004*, 2004, pp.192-201. (査読有)
2. Hayashi, S., Pan Y., Sato M., et al., “Test Driven Development of UML Models with SMART modeling system”, in: Baars et al. eds., *UML 2004, Lecture Notes in Computer Science vol. 3273*, Springer, 2004, pp.395-409. (査読有)
3. 林晋・黒川利明「二つの合理性と日本のソフトウェア工学」、『科学技術動向』2004年9月号(科学技術政策研究所、科学技術動向センター)、2004(査読無)
4. 「情報通信技術と「思想」—科学技術の能力としての「思想」—」、『科学技術動向』2006年10月号(科学技術政策研究所、科学技術動向センター)、2006(査読無)
5. 解説「ソフトウェア開発法の新傾向」、『光学』第34巻第8号(特集「光技術と技術経営: 国際競争力回復を目指して」、応用物理学会)、2005年8月(査読無)
6. “Mathematics based on Incremental Learning—Excluded middle and Inductive inference—”, *Theoretical Computer Science* 350 (1), 2006, pp.125-139. (査読有)

7. “Can proofs be animated by games?” , in: P. Urzyczyn ed., *TLCA 2005, Lecture Notes in Computer Science vol. 3461*, Springer, 2005, pp.11-22. (招待論文)
8. “Can proofs be animated by games?” , *Fundamenta Informaticae* 77, 2007, pp.1-13. (In print, 2005年の論文の拡張版, 査読有)

【学術講演】

1. Akama, Y., Berardi, S., Hayashi, S., Kohlenbach, U., “An Arithmetical Hierarchy of the Law of Excluded Middle and Related Principles” , IEEE Annual meeting, Logic in Computer Science 2004, Truku, Finland, 2004. (講演者 S.Berardi)
2. Hayashi, S., Pan Y., Sato M., et al., “Test Driven Development of UML Models with SMART modeling system” , International Meeting UML 2004, Lisbon, Portugal, 2004. (講演者:林晋)
3. “Can proofs be animated by proofs?” , TLCA 05, Nara, Japan, April, 2005. (招待講演)
4. “Hilbert’s basis theorem, Solvability, and LCM” , Joint meeting of ‘Workshop on Hilbert in Kyoto’ & ‘CC seminar’ , Graduate school of letters, Kyoto university, Nov. 11, 2006. (CC Seminar)
5. “Hilbert notebooks I, II” , Joint meeting of ‘Workshop on Hilbert in Kyoto’ & ‘CC seminar’ , Graduate school of letters, Kyoto university, Nov. 11-12, 2006. (Workshop on Hilbert in Kyoto, 自身で主催)

II. 自己評価

平成16年度から18年度における私の研究は、ソフトウェア工学、計算機科学、情報社会学(科学政策含む)、科学史が主であり、神戸大工学部に在職していた平成16年度にはソフトウェア工学が中心であったが、それが段々と社会学や科学史にシフトをしている。この間の特筆すべき研究としては、ドイツの数学者D.ヒルベルトの数理哲学的思索に関するノートの発見がある。これは平成17年夏に発見したもので、一般の関心も高い「数学基礎論」の歴史についての従来の定説を覆す発見であった。これに関する研究は現在も継続しているが、その一部は平成18年度夏に発表した岩波文庫「ゲーデル 不完全性定理」の解説と、ウェブ・サイト、および平成18年秋にCOEの特別プロジェクトとして開催してワークショップで公開し大きな反響を得た。この文庫(の解説)は、解説が本文の5倍近い分量を持つ、岩波文庫としては特異な形式の書籍であるが、学術的な研究に基づいて数学基礎論史を正しく紹介した我国で最初の書籍と自負している。

杉本淑彦 (二十世紀学専修教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 「ターバンをかぶったナポレオン」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて』(京都大学学術出版会)、2007年3月刊行予定

2. 「白色人種論とアラブ人—フランス植民地主義のまなざし」、藤川隆男編『白人とは何か？—ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房）、2005年10月
3. 「フランス人たちのパクス・ブリタニカー友でも敵でもなく」、秋田茂編『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』（ミネルヴァ書房）、2004年5月

【論文】

1. 「エジプト遠征の記憶にみるアラブ・イスラーム観」、『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究』 科学研究費補助金基盤研究(B)報告書(2004年—2006年度、研究代表者：武田雅哉)、2007年3月刊行予定
2. 「ヴィヴァン・ドノン『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』の200年」、大阪大学西洋史学会編『パブリック・ヒストリー』2号、2005年2月
3. 「オリエントとヨーロッパ・アイデンティティ」、『人文知の新たな総合に向けて』21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書I〔歴史篇〕、2004年3月

【書評】

1. 「石井洋二郎・工藤庸子編『フランスとその〈外部〉』（東京大学出版会）」、『図書新聞』、2004年12月4日

【学術講演等】

1. 「ナポレオンとルーヴル美術館」、京都市美術館、2005年7月30日
2. 「ナポレオンとエジプト遠征」、京都女子大学公開講演、2004年5月28日
3. 「戦後日本のビジュアルジャーナリズム 元祖オタク／大伴昌司の世界」、日韓国際学術セミナー「日韓文化交流の過去、現在、未来」、京都大学文学部、2007年1月27日

【科学研究費補助金】

1. 「英雄の条件—近現代ヨーロッパにおける軍事英雄観の展開」、科学研究費補助金基盤研究(B)、2006年—2008年度、研究代表者：杉本淑彦
2. 「近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究」、科学研究費補助金基盤研究(B)、2004年—2006年度、研究代表者：武田雅哉

II. 自己評価

2002年に本研究科に着任した際に、研究計画を以下のように構想した（本研究科二十世紀学専修HP参照 <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/20century/>）

(1) 対イスラーム意識を中心にしたオリエンタリズム論を、集合的記憶という枠組みで、文学・映像・絵画などを素材にして研究する。

(2) 二十世紀現代文化の象徴といえる映画やマンガ・アニメなどの、新しいスタイルの資料の利用法について研究を進める。

(3) 歴史研究で得た成果を高等学校学生向け歴史教育に活用する方策について研究を進める。

上記のうち、(1)は2件の科学研究費を得るなどして進めてきた。おもにナポレオンのエジプト遠征を素材に、エドワード・サイードに代表される従来の「オリエンタリズム批評」とは異なるオリエンタリズム論を展開している点が、歴史学研究に貢献するところ大だと考えている。すでに著書(1-3)・論文(1-3)によって論点を提示しており、研究は順調に進んでいる。

(2)については、ビジュアルジャーナリスト大伴昌司の遺した原画・原稿類の寄託を2006年

にうけ、企画展「大伴昌司の世界」を京都大学構内で実施し（2007年1月30日～2月23日）、講演3もおこなった。今後も大伴資料の整理を進め、とくに来年度以降は海外での展示を通じて研究の国際交流を図る考えである。

(3)については、高等学校用世界史教科書Bを2006年に執筆し、これは2008年4月から使用される予定である。並行して2006年には歴史教育用ソフトならびに歴史コンピュータ・ゲームの開発に着手した。だが、これはまだ構想段階にとどまり、実現は2007年秋以降になる予定である。

紀平英作（現代史学専修教授）

I. 研究業績

【著書・編著書】

1. 『グローバリゼーションと帝国』（油井大三郎と共編）、ミネルヴァ書房、2005年11月
2. 『京都と北京』（吉本道雅と共編）、角川出版社、2005年12月
3. 『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて』上・下巻（編著）、京都大学学術出版会、2006年2月

【論文】

1. 「膨張する合衆国と世界」、紀平英作・油井大三郎編著『グローバリゼーションと帝国』（ミネルヴァ書房）、2005年11月、pp. 1-14
2. 「二〇世紀東アジア国際関係の形成と展開—日本・中国そしてアメリカ」、紀平英作・吉本道雅編『京都と北京』（角川出版社）、2005年12月、pp. 10-50
3. 「序文—グローバル化する世界を見つめつつ」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて』上巻（京都大学学術出版会）、2006年2月
4. 「世界分割の時代を超えて—第一次世界大戦と新たな世界構想の胎動」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて』上巻（京都大学学術出版会）、2006年2月

【学術講演】

1. “The Birth of the American Republic and the Concept of Continental Expansion, 1776-1789”, Beijin forum: The Harmony of Civilizations and Prosperity for All-Asia's Opportunities and Development in Globalizaion, at Beijin, China, November 16, 2005. (報告)
2. 「二十世紀東アジア国際関係の形成と展開—アメリカ・日本そして中国」、国際シンポジウム「京都と北京：光の交わるところ—学問知から人類知へ」、京都大学時計台記念会館百年記念ホール、2005年12月17日（講演）
3. 「京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」を締めくくるにあたって」、シンポジウム「グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて」、京都大学文学部新館第3講義室、2006年12月2日（報告）

II. 自己評価

この3年間、3つの方向で研究を進めた。1) 独立革命から建国初期アメリカ合衆国の領

土膨張と政治制度の形成に関する研究。とくに連邦制度の形成と北西部条例の展開について。2) 第1次世界大戦期のウッドロー・ウィルソンの対外政策と国際連盟構想の展開。また第1次世界大戦の世界史的意味の解明。3) 20世紀初頭から21世紀初めまでの東アジア国際関係の形成と展開に関する歴史叙述。とくに日本、中国、アメリカ、3国間の国際関係の展開過程について。である。これらの3つの分野のうち、2, 3については論文として発表した。わが国における研究として、もっとも先端的な研究であると自負している。また1についても、2005年9月 Bejin Forum において中間的報告をおこない、さらに論文「膨張する合衆国と世界」において基本的見通しを示した。

ただし、分野1についてはあらためて相当量の論文を発表する材料を整えたが、いまだ成稿となっていない。平成19年度に引き継ぐ課題である。あわせてこの間、二〇世紀アメリカ合衆国政治史の再検討も進めた。とくにニューディールの世界史的意味について。著書『アメリカ現代史研究序説』の執筆を目的としたことである。仕事としては相当の進展を見たが、なお文章化の課題が残った。向こう2年の間になすべき課題としたい。

永井 和（現代史学専修教授）

【著書】

1. 「朕は汝ら軍人の大元帥なるぞ」、佐々木克編著『明治維新期の政治文化』（思文閣出版）、2005年9月
2. 「日本現代史研究と中国」、紀平英作・吉本道雅編『京都と北京一日中を結ぶ知の架橋―』（角川文芸出版）、2006年12月
3. 『日中戦争から世界戦争へ』、思文閣出版、2007年2月
4. 「東アジア史の「近世」問題」、夫馬進・吉本道雅編『中国東アジア外交交流史』（京都大学学術出版会）、2007年3月

【論文】

1. 「万機親裁体制の成立―明治天皇はいつから近代の天皇となったか」、『思想』557（2004年1月号）、2004年1月
2. 「前近代日朝中国交関係の二つのモデル」、『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究』*Newsletter* no. 2、2004年3月

【書評】

1. 「大藪龍介『明治維新の新考察 上からのブルジョア革命をめぐって』（社会評論社）」、『季報唯物論研究』98号、2006年11月

【学術講演】

1. 「明治天皇はいつから近代の天皇となったのか」、ソウル大学校国際学大学院日本研究センター、ソウル、2004年9月17日
2. 「日本軍の慰安所政策」、ソウル大学校ジェンダー研究所／社会史研究会共催セミナー、ソウル、2004年9月18日
3. 「倉富勇三郎日記と植民地朝鮮」、韓国精神文化研究院、盆唐市、2004年9月20日

【科学研究費補助金】

1. 「倉富勇三郎日記研究—電子テキスト化と1920年代の皇室・宮中をめぐる諸問題」、平成16～19年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)、2004年—2007年

II. 自己評価

前回の自己評価の際に、「今後の計画と展望」を以下のように構想していた(平成14年2月10日時点)

- (1) 政党政治期の昭和天皇について今までの研究をまとめたい。
- (2) 倉富勇三郎日記のデジタル・コンテンツ化を継続し、できれば公開したい。
- (3) 占領軍の撮影した膨大な記録フィルムを素材にして、現代史研究における映像資料の利用法について研究を進める。
- (4) 帷幄上奏制度の実態についてさらに研究を深める。
- (5) 日本の戦時体制について包括的な展望図を描くことをめざす。
- (6) 1980年代から90年代における歴史学の「パラダイム転換」の意味について考察を深める。

上記のうち、(1)は2003年に『青年君主昭和天皇と元老西園寺』(京都大学学術出版会)を刊行したことにより、実現・終了した。(2)については、2004年度から科学研究費補助金を受けて、現在作業を進行中である。著作権処理の関係で公開にまではいたっていないが、デジタル・コンテンツの蓄積は進めている。なお、この件では活字版による出版の計画も現在進行中である。

(4)については、統帥権独立の起源(明治天皇はいつ大元帥となったのかという問題)を解明すると同時に、なぜ1878年末という時期に統帥権独立制度が成立したのか、それに対するほぼ決定的ともいえる回答を提出することができた(著書1と論文1)。また、その研究の過程で、近代の日本国家の国家意思決定システムを「多元的輔弼制をとる万機親裁体制」と定式化した(学術講演1)。これはここ10年の天皇制に関する研究の中でも、もっとも注目される研究成果のひとつであると自己評価している。

(5)に関しては、いままでの研究を集大成して研究業績1としてまとめた。

(6)については、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」のサブプログラム「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」し、そこでの研究課題として「東アジア史と世界システム論」を設定し、ここ十数年の東アジア史研究の大きな流れを追うことで、東アジア史の近世問題という特定の問題をめぐって「歴史学のパラダイム転換」がどのように進んだのかを分析した。その成果が著書の4である。また書評1は、明治維新史研究について「歴史学のパラダイム転換」が何であったのかを考察したものである。

(3)については、ほとんど時間を割くことができなかった。残念である。

小野澤 透(現代史学専修助教授)

I. 研究業績

【著書】

1. 五十嵐武士編『アメリカ外交と21世紀の世界：冷戦史の背景と地域的多様性をふまえて』(共著)、昭和堂、2006年(第4章「米・中東関係：パクス・アメリカーナの曇り雲」(pp. 129-173))

担当)

2. アメリカ学会編 『原典アメリカ史 第9巻 唯一の超大国』 (共著), 岩波書店, 2006年(第8章「湾岸戦争と反米イスラーム主義の高まり」(pp. 132-144) 担当)
3. “The United States and the Iraqi Revolution of 1958: Transformation of American Regional Policy toward the Middle East, 1957-1960,” in: Graduate School of Letters, Kyoto University, ed., *Humaniora Kiotensia: On the Century of Kyoto Humanities* (Graduate School of Letters, Kyoto University, 2006), pp. 17-51.

【論文】

1. 「現代アメリカと『帝国』論」, 『史林』88巻1号, 2005年1月, pp. 90-125. [査読有]
2. “Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950-1952: Middle East Command Concept and Its Legacy,” *Diplomatic History*, Vol. 29, No. 1, Jan., 2005, pp. 117-148. [査読有]

II. 自己評価

筆者は、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国と中東の関係をアメリカ外交史の視点から分析することを研究課題としており、特に大戦後二十年あまりを主たる研究対象としている。この時期は、今日まで続く米・中東関係の基礎がかたちづくられた時代であるとともに、合衆国の世界的な覇権が築かれた時代でもある。それゆえ、筆者の研究は、中東をケーススタディとして合衆国の世界的な覇権のありかたを考察するという側面も持つ。過去三年間の研究は、1950年代の合衆国の中東外交を一次史料の綿密な分析によって分析した研究(共著3, 論文2)と、より長期的な視野から合衆国の中東外交および覇権のあり方を考察した研究(共著1・2, 論文1)に分類できる。前者は、合衆国が中東をひとつの「地域」として把握した上で、中東にグローバルな役割と位置づけを与えつつ、その内部に自らが望む秩序を構築しようとする過程を、具体的かつ詳細に分析したものである。後者は、前者の個別的な研究をより大きな全体像の中に捉え直すと同時に、前者で得られた知見をもとに通説的な全体像を再検討するという意味を有している。

